



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ベルクソン『物質と記憶』の純粹知覚説における問題解決型の思考実験とその構成の方法としての仮象論によるメタ理論の構築
Author(s)	原, 健一
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13834号
Issue Date	2020-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k13834
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94572
Type	doctoral thesis
File Information	Ken-ichi_Hara.pdf



ベルクソン『物質と記憶』の純粹知覚説における
問題解決型の思考実験とその構成の方法としての
仮象論によるメタ理論の構築

原 健一

目次

序論：ベルクソンは『物質と記憶』でいったい何をしているのか？	6
第一部 哲学的方法論	19
第一章 ベルクソンはいかにして純粹知覚説を肯定しようとしているのか？	19
1. 論点先取？	21
2. 議論の構造	24
3. ベルクソンは純粹知覚説をどのように肯定しているのか？	30
4. 石井〔2001〕の解釈	31
5. 「直観的に与えられた実在」とは何か？	33
6. なぜ純粹知覚説の正当性は「直接的に確証」されえないのか？	35
7. 実在論の推論	37
8. 実在論論駁の概要	38
9. 記憶と知覚の本性の差異？	40
10. ベルクソンの推論の定式化	41
11. 結論——純粹知覚の肯定の方法論は何ではないか	42
第二章 現在主義の起源	45
1. 現在主義	47
2. 起源の特定	48
3. 起源の転換	49
4. 私の現在	52
5. 「私の現在」からの現在主義の成立	54
6. 世界を見ることを学び直す	56
7. 実在と経験——結論に代えて	58
第三章：意識の諸平面の理論におけるベルクソンの哲学的方法	60
1. 概念論と唯名論	62
2. Worms の解釈	63

3. « cercle » の再規定	64
4. 一般観念の形成過程の説明	67
5. 概念論と唯名論の二者択一からの脱出.....	69
6. 「意識の諸平面」の理論の役割	72
7. ベルクソンは「意識の諸平面」の理論によって何をしているのか.....	73
第二部 純粹知覚説.....	76
第四章 ベルクソンにとって色とは何か.....	76
1. 色の非實在論——投影説と傾向性理論.....	78
2. ベルクソンは色の實在論者か？——「創発」批判.....	80
3. 色はいかにして「形成」されるのか.....	83
4. ベルクソンは色の實在論者か？	85
5. 傾向性理論への反論	87
6. 実現基盤機能主義	88
7. 傾向性批判再び	91
8. 色の恒常性	93
9. 行為性・超越性・直接性——結論に代えて.....	96
第五章：全体性と無際限.....	98
1. 「秩序」とは何ではないか	102
2. 秩序	104
3. 空間	105
4. 持続——完了相と未完了相	107
5. 既知の全体	109
6. 結論	112
第六章 問題解決型の思考実験とその構成の方法.....	114
1. ベルクソンの思考実験の特徴	116
2. 實在論と観念論の起源	118
3. メタ理論としての純粹知覚説	121

4. 問題解決型の思考実験——ベルクソンにとってのよい思考実験.....	123
5. 結論——仮象から実在へ	124
結論.....	126
参考文献・引用文献.....	137

凡例

引用について

[ベルクソン関係の引用について]

ベルクソンからの引用は、それぞれ *Quadrige* 版 (*Le choc* 版) を用いて、次の略号の後に頁数を示した。

DI : *Essai sur les données immédiates de la conscience*. 『意識の直接与件についての試論』

MM : *Matière et mémoire*. 『物質と記憶』

ES : *L'énergie spirituelle*. 『精神エネルギー』

PM : *La pensée et le mouvant*. 『思考と動き』

[参照した邦訳]

以下の訳をそれぞれ参照した。いちいち邦訳に対応するページは指示していない。また、必要に応じて適宜訳語を変更している。

合田正人・平井靖史訳 (2002) 『意識に直接与えられたものについての試論』、ちくま学芸文庫

田島節夫訳 (2001) 『物質と記憶』、白水社

杉山直樹訳 (2019) 『物質と記憶』、講談社学術文庫

原章二訳 (2012) 『精神エネルギー』、平凡社ライブラリー

原章二訳 (2013) 『思考と動き』、平凡社ライブラリー

[その他の引用について]

その他の諸資料からの引用にかんしては、本論文末尾にある参考文献・引用文献をもとに、著者名を指示したのちに出版年とページ数を指示する。(例：杉山 [2017 : 38 頁]、Dainton [2017: pp. 138-42])

括弧などの表記について

引用中 […] は省略、[] 内は引用者による補足を表す。

原文で強調の箇所は、引用中傍点によって示す。

序論：ベルクソンは『物質と記憶』でいったい何をしているのか？

本論文の目的は、ベルクソンが『物質と記憶』においてどのような哲学的方法を用いて純粹知覚説を肯定¹したのかを明らかにすることである。この目的を達成することによって、次の二つの主張を『物質と記憶』におけるベルクソンの考察のなかから取り出すことを目指す。第一に、概念分析や定義やアーギュメントの構成といったふつう私たちが哲学の依拠する方法と考えているものの他にも、哲学的な探究にとって有効な方法がありうるということである。第二に、命題間の論理的関係の吟味などといったふつう私たちが哲学の主な目的と考えているものの他にも、哲学には達成すべき目的がありうるということである。つまり、ふつう私たちが哲学の方法とか目的と考えているものの他にも、哲学には方法や目的がありうるというベルクソンの主張を、今なお妥当なものとして提示することによって、哲学という学問的営みの外延を拡張することを本論文は目指している。この意味で、本論文に賭けられているのは、単なるベルクソン解釈上の問題にはとどまらない、「哲学とは何か？」という問題である。

とはいえ、本論文の大部分は、最初に提示した純粹知覚説をめぐる問いに応答すべく、ベルクソンのテキストを解釈する作業から成る。以下ではまず、純粹知覚説について説明し、そのうえで、この純粹知覚説の肯定の方法についていかなる問題点があるのかを示す。

純粹知覚説はベルクソン『物質と記憶』の中心的な理論の一つである。この理論は、物質にかんする实在論と観念論の争いを解決するための理論である。つまり、物質とはどのような存在者なのか、そして、その物質と呼ばれているものを私たちはどのように認識しているのだろうかといった問題がここには関係している。

例えば目の前に赤いリンゴがあるとする。このような日常的な現象について「素朴な色観」をもつ人は次のように述べる。この赤色はリンゴという事物それ自体がもつ性質であり、通常的环境中で通常の知覚主体にそう見えるような「本当の色」を事物はもつ。だが、これまで多くの哲学者・科学者たちがこのような素朴な色観を否定してきた。このような素朴な色観の否定を一部とする物質についての哲学的主張をする立場が『物質と記憶』の扱う实在論と観念論である。以下では、知覚経験を例にして、各々の主張を見てみよう。

¹「論証」や「証明」ではなく、「肯定」という語を使う理由については後述する。

一方で、観念論は、次のように赤いリンゴの知覚経験を説明する。観念論によれば、赤いリンゴという一つの事物として私たちが見ている（と思い込んでいる）ものは、実は、意識に与えられている感覚データに過ぎない。観念論者はこのデータのことを「観念」と呼ぶ。つまり、私たちが知覚しているものは、外界に存在する赤いリンゴそれ自体ではなく、それについての観念に他ならない。そして、外界とか物質世界と私たちが呼んでいたものは、これらの観念を一つ一つ組み合わせることによって私たちが構成したものである。この意味で、私たちが物質世界と呼ぶものは、私たちの外部に実在するものではなく、意識によって想定されているものに過ぎない。以上が『物質と記憶』で想定されている観念論の主張内容である。

こんな馬鹿げた主張には考察の価値などない、と思われるかもしれない。しかし、現代の知覚の哲学では、このような観念論の説明を（少なくとも部分的に）正当化する議論が哲学的考察の対象になっている²。すなわちそれは「幻覚論法」である。例えば、赤いリンゴの幻覚の経験をもっている人を想定しよう。この人にとって存在しているように見える赤いリンゴは、実のところ、実在しない。とはいえ、この赤いリンゴを内容とする何かがその人には現れている。そうである以上、そのような内容をもつ何らかの存在者があるはずだ。この「何らかの存在者」が「観念」と呼ばれるものである。ところで、この赤いリンゴの幻覚は赤いリンゴの真正な知覚経験と同じ内容をもつ。だからこそ、この人には、幻覚と真正な知覚の区別ができないのである。この場合、幻覚において生じていることが、真正な知覚経験においても生じていると言えるかもしれない。したがって、幻覚であろうと真正な知覚であろうと、私たちの見て取っているものは観念である可能性がある。——この幻覚論法においては、観念論者が言っているように、私たちが見て取っているものは、主観に現れた観念に過ぎないということがありうるのだ。

また、以上のような観念論の考え方に従えば、次のような思考実験によって提示される存在論的・認識論的な主張が一定のもっともらしさをもつものとなる。——仮にあなたの脳が水槽の中にありコンピューターにつながれているとする。コンピューターによってあなたの脳に電気信号が直接送られており、それによって、通常の生活を送り、外界を知覚しているとした場合にあなたがもつような経験とまさしく同じような経験があなたに引き起こされているとしよう。つまり、あなたの経験は幻覚であり、本当は外界など存在していない。ところで、ある経験が幻覚か否かということを区別することは

² 小草 [2009 : 29-31 頁] を参照されたい。『物質と記憶』で扱われている観念論の主張に合わせて、一部を変更している。

あなたにはできない。真正な知覚だと思っていたが実はそれが幻覚であったということは常に可能である。このような想定が可能である以上、あなたは自分が水槽の中の脳かそうではないのかを言うことはできない。それが意味するのは、外界を知覚しているというあなたの信念は正当化されているとは言えず、ひいては、外界が実在しているかどうかということをあなたは知らないということである³。——この思考実験（いわゆる「水槽の中の脳」）の設定は、上記の観念論の立場を反映している。すなわち、私たちが認識しているものは観念に過ぎないのであって、外部にある（ように思われる）物質世界については、それが実在するか否かを知ることはできないのである。以上が観念論である。

さて、他方で、实在論は、次のように述べる。实在論は、私たちの主観的な想定に過ぎないと観念論者が見なす外界・物質世界は実在すると認める。この世界には、私たちがこの世界を恣意的に構成しているのだとしたらありえない秩序が備わっている。この秩序があることや、あるいはこの物質世界の秩序について体系的に記述する物理科学が成功をおさめていることを踏まえると、私たちとは独立の外界が存在するという想定には一定の説得力があると言わざるを得ないと实在論者は考える。しかし、私たちの見て取るものの全てが実在するとは实在論は言わない。すなわち、实在論によると、私たちが見て取っているもののうち、広がりや幅といった延長は実在するが、そうした延長物がもつ（ように見える）色や匂いといった主観的な性質は実在しない。そうした主観的な性質は、脳や神経といった神経系の働きによって生み出されたものに過ぎない。これが『物質と記憶』で想定されている实在論の主張内容である。

素朴な色観をもつ人々からすると、实在論は信じがたい主張をしていると思われるかもしれない。しかし、このような实在論の考えに基づけば次のような一般的な現象が説明できる。——目の前にピンクのシャツを着ている友人がいるとする。しかし、友人は錐体細胞を先天的に欠損しているため、ピンクのシャツが彼には白く見える。だが私にはそのシャツがピンクのシャツとして知覚されている。このときシャツそれ自体は何色をしているのか。实在論者によれば、色とは、物理的刺激を与える事物（この刺激それ自体は色をもたない）を受け取った際に脳や神経が生み出すものである。したがって、シャツそれ自体には色は一切ない。だから、ある種の物理的刺激を受容できる人とできない人がいた場合、その人々の見るシャツの色が異なるといったことも十分にありうる。——この色覚異常に基づいた議論においては、实在論の述べるように、色とは意識に与

³ See Daly [2010: p. 103] 『物質と記憶』の観念論の主張を踏まえて一部変更している。

えられたものに過ぎず、それは外界に実在するものではない。

また、以上のような実在論の考え方を展開すれば、次のような思考実験に含意される存在論的・認識論的主張が一定のもっともらしさをもつものとなる。——メアリーという色について研究する科学者がいる。彼女はこれまでずっとすべてのものが白と黒や灰色の影の色しかもたない部屋で生活してきた。彼女の生きている時代の物理学はひじょうに発展していて、その教科書には、誰かが赤い事物を見るときに引き起こされる物理的事実のすべてが書いてある。これらの教科書を読めば、メアリーは、誰かが赤いものを見るときに生じる物理的な事実のすべてを学ぶ。だから、メアリーが知ることになるものには、人々が赤い対象を見る際に彼ら／彼女らの神経系で起こっていることにかんする物理的事実も含まれる。さて、ここで、メアリーが上述の部屋を抜け出して、赤いリンゴをはじめて見たとしよう。このときメアリーはこれまでは知らなかった何かを学ぶだろう。例えば、メアリーは、赤いリンゴを見る際に生じる物理的な事実以外に、「赤いものを見るときとはどのようなことか」といった赤いものを見るときの主観的経験のあり方についても新たな知見を得るだろう。——この思考実験（フランク・ジャクソンの考案した「メアリーの部屋」⁴）の設定は、実在論の立場を反映している。すなわち、色とは、意識に与えられる主観的な感覚データである。このような、客観的な物理的事実とは質的に異なる主観的な性質があるのであって、科学が記述するような客観的な世界像と日常的な経験において与えられるような主観的な世界像とのあいだにはギャップがある。以上が実在論である。

このような観念論と実在論の考えに対してベルクソンは物質を「イマージュの総体」とする考えを提示した。その考えにおいては、まず、実在論と同じように外界・物質世界が実在することが肯定される。だが、ベルクソンは、実在論を斥けて、色も外界に実在するということを肯定する。ベルクソンは次のように述べている。

「[...]「イマージュ」ということで私たちが理解しているのは、観念論者が表象と呼ぶものよりは多く、実在論者が事物と呼ぶものよりは少ない、ある存在——「事物」と「表象」との中間に位置づけられた存在である。物質にかんするこの考え方は端的に常識の考え方である。[...] この色は [...] 対象の内にある。それらは、私たちの精神の状態ではなく、私たちの精神からは独立した存在の構成的要素である。

⁴ See Daly [2010: p. 104] 『物質と記憶』で扱われている実在論の主張に合わせて一部を変更している。

したがって、常識にとって、対象はそれ自体において存在するのであり、他方で、私たちがそれを見て取るように対象はそれ自体色彩に富んでいる。これはイマージュなのだが、それ自体で存在するイマージュである。」(MM1-2)

純粹知覚説とは、このような色などの性質を備えて外界に実在する物質を、私たちは直接的に見て取っているとする立場である。つまり、ベルクソンの純粹知覚説とは、觀念論と実在論において想定されている意識の描像を斥け、知覚経験においては、意識は対象そのものに到達していると主張するものである。

純粹知覚説ということで意味されている物質とその知覚にかんするベルクソンの主張は「心と身体の関係についての試論」という副題の付された『物質と記憶』にとって最も重要な位置を占める主張の一つである。ベルクソンは、『物質と記憶』「第七版の序文」冒頭で、心身二元論が引き起こす困難を「消し去りはしないまでも、大いに緩和できるだろうと期待している」(MM1)と述べているが、この心身問題の困難の緩和こそ純粹知覚説の肯定によって達成されるのである。敷衍しよう。——伝統的な心身問題の枠組みにおいては、一方で、心は非延長物であり、他方で、身体は延長物であるとされる。そのうえで、両者がどのように相互作用しているのかが問われる。ベルクソンはこのような心身問題の枠組みを部分的に修正する。つまり、彼によれば、心の状態と言われているもののうち少なくとも知覚意識は、それがもつように見える空間的な広がりや色といったさまざまな性質も含めて、外界の特定の空間上に実際に位置を占める。そう考えることによって、ベルクソンは、知覚意識という層においては、延長物と非延長物の相互作用という説明不可能な事態に頭を悩ませる必要などないと考えた。——このように純粹知覚説は心身問題という哲学の伝統的な問題にかかわっている。

またベルクソンの色にかんする主張は、心身問題といった哲学の伝統的問題のみならず、科学的な世界像と日常的な世界像のギャップという、今日的な問題ともかかわっている⁵。赤い色とその物理的基盤（ベルクソンはそれを毎秒 400 兆回の物理的振動として扱う）のあいだに、前者が後者に還元されるといった関係を見て取る立場（還元物理主義）や、前者は他のものに還元したり分析したりすることのできないものであるとする立場（プリミティヴィズム）においては、意識に与えられる世界像と科学が記述するそれとのあいだにギャップがあることが前提されている。（そのようなギャップを利用した思考実験が先に見たメアリーの部屋である。）そして、そこからは、どちらの世界

⁵ この問題については田中 [2018] を参照されたい。

像が本当の世界のあり方なのだろうかといった二者択一の問いが立てられるのである。このような問題に対して、ベルクソンは、意識と科学の世界像が両方とも真の世界のあり方を反映しているということを主張した。ベルクソン自身の言葉を見てみよう。

「[...] それら〔科学が行なう実在についての記述と知覚に与えられる赤色という現れ〕は両方とも正しくて、この〔意識に与えられる赤い〕光とこの〔科学が記述する毎秒 400 兆回の物理的〕運動とのあいだには本質的な差異はない [...]。科学と意識は瞬間において合致するであろう。」(MM39)

このような「瞬間」的な世界像を提示するものが純粹知覚説であり、ベルクソンは独自の知覚理論を提示することによって、科学的な世界像と日常的な世界像のギャップを解消しようとしているのだ。

このように、純粹知覚説には、多くの哲学的主張が賭けられている。ところが、この純粹知覚説の色にかんする主張、ならびにその正当化の方法論には少なからぬ問題点が指摘されうる。確かに、ベルクソンも述べるように、彼の立場は「常識」にかなったものであろう。実際、ふつう私たちは、外界に物が存在して、色といった性質がそれらの事物自体のもつ性質だと思っている。しかし、ある理論が常識的な見解と適合していることは、その理論が正しいことを必ずしも意味しない。実際、ベルクソンの色覚論は、第一に、今日でも有力とされる、ロック、ガリレイ、そしてニュートンの考え（事物それ自体には色はない）に反しているし、第二に、色に関する科学的知見とも一致しないように思われる。この点については第四章で詳しく論じるが、要するに、ベルクソンの色にかんする考えは、私たちの目から見ると端的に誤っているように見えるのだ。とすれば、色にかんするこのような考えに依拠して提示される、心身問題の困難を緩和したとか、意識と科学の世界像は両立するといった『物質と記憶』の主張も破綻していることになってしまうのではないか。

ここで次のような考え方もありうるだろう。——ベルクソンの見解が今日の哲学的・科学的知見と合致するか否かという点はいったん脇において、純粹知覚説を正当化する際のベルクソンのアーギュメントを整理し評価しよう。例えば、幻覚論法や色覚異常の議論に対するベルクソンの反論や、水槽の中の脳やメアリーの部屋の思考実験に対する批判の内実を評価してみよう。もしベルクソンがそのような批判に対する体系的な反論を提示していないのならば、ベルクソン解釈者が、ベルクソンの提示している議論の各

所を適当に拾い上げて、純粹知覚説の内容を反映させた議論を再構成すればよい。そして、その議論が一定の正当性をもつのであれば、ベルクソンの色にかんする見解が今日の見解と相容れないことはさほど大きな問題ではない。むしろ、現代的な知見の誤りを示し、私たちの考え方を根底から覆すような新たな考え方が『物質と記憶』の知覚理論には含まれているといったことだってありうるではないか。

ところが、これこそがよくわからない点なのだ。『物質と記憶』はベルクソンの著作のなかでも最も難解と言われる。例えば、『物質と記憶』を一読したとき、シュヴァリエが次の引用で述べるような「印象」を覚えるのではないだろうか。

「当時、私はヴェルサイユ市のオッシュ高校の哲学級の生徒だったが、主任教授フェリックス・トーマの勧めで、出版されたばかりの『物質と記憶』の第一章を読んだのだ。むずかしい入門だった。私は、きわめて晦渋に思われた第一章から先に進むことができず、その内容も意味も明らかにするには至らなかった。一九〇一年十月、高等師範学校に入学できたとき、私はモーリス・ルジャンドル教授に自分の困惑をうちあけ、ベルクソンは譬喩の世界でいくつかの仮説について思索をめぐらす哲学者の類に属するように思われると言ったものだ〔…〕。」（シュヴァリエ [2008 : 5 頁]）

この言葉が示すように、ベルクソンによる純粹知覚説の正当化の道筋はひじょうに見えにくい。それどころか、哲学的な正当化とは異なる不当な方法（メタファーを繰り出すといったような？）に依拠しているとさえ思われるのだ。例えばその一例として次の言葉を見てみよう。ベルクソンは『物質と記憶』で自分が行なっていることを次のように説明している。

「それは、経験を探し求めてその源泉にまで赴くこと、あるいはむしろ、経験が私たちにとっての有用性の方向に向きを変えながらまさに人間的な経験となる、その決定的な転回点の向こう側に赴くことであろう。」（MM205）

あらかじめ述べておけば、本論文を読んだ後には、このベルクソンの言葉の意味は明晰に理解できるようになる。しかし、ここを一読して——人間的な経験の向こう側へと赴いて、経験の源泉へと向かうことによって、純粹知覚説を正当化すると言われて——、

「なるほど」と了解できる人はいないはずだ。「人間的な経験の向こう側」とは、あるいは「経験の源泉」とは具体的にどのようなものなのか（それは単なる比喻ではないのか）、そして、仮にそのような「経験の源泉」があるとして、なぜ・どのようにしてベルクソンはそこに到達したと言えるのか。ベルクソンの言葉には多くの解明すべき謎がある。

実際、上のようなシュヴァリエの一読した印象とは異なるレベルで、ベルクソンのこの言葉には多くの疑問が投げかけられてきた。例えば『物質と記憶』出版直後に出されたブロとデルボスによる書評を見てみよう。

ブロによれば、ベルクソンが要求するのは、「純粋な経験を見出すこと、あらゆる分析に先立って直観的な与件を見出すこと」(Belot [1897: p. 192]) であり、彼が「純粋知覚」ということで提示している「直接的な認識」とは、「原初的なもの、明確に規定された形式のすべてに先立つもの」(Belot [1897: p. 191]) である。それは「明晰な認識」「分析的な認識」「展開された認識」といったものと対立する認識である。要するに、ブロにとってベルクソンの純粋知覚とは、概念化を受ける以前の、いわば「前概念的な認識」のことである。ブロの批判は、このような前概念的認識がなぜ「認識」や「経験」、そして「知」でありうるのかを問うものであった。ブロによれば、「知」とは概念化されたものとしてしかありえない。「科学的な知や悟性」といったものを媒介にして「展開」されてはじめて、知＝認識はそれとしてもたらされる。したがって、ブロによれば、そもそも「純粋知覚」とは「知＝認識」ではない。

「この純粋知覚というものはもはや表象ではなく、意識へのたんなる瞬間的な現前である。純粋知覚がまさしく事物そのものの一部に他ならない以上、これは意識への現前でももはやない。[...] いつも、ベルクソン氏は、経験に直接的にもたらされることなどありえないと彼自身認めている仮説を、純粋知覚という名のもと私たちに提示している。」(Belot [1897: p. 192])

だから、何らかの「実在」について語る際に、その実在を「直接」与えられたものとする学説は、必ずや誤りを犯していることとなろう。「真なる実在が私たちに現われてくるのは、直接的なものと正反対のところなのである。」(Belot [1897: p. 194]) ブロの批判は以上のようなものであった。

次にデルボスの批判。彼は純粋知覚説について次のように述べている。

「ところで、直接的な認識とは、それがいやしくも一つの認識であるならば、確たる認識のことである。だがそのような直接的な認識などどこにあるのか。私たちの精神と現実的なものとの接触を私たちが体感していて、その結果、まさしくそこに実在があり、そこで精神によって実在が把握されているということが確証されると信ずれば、それで十分だとでもいうのか。自然な明晰性を伴う感情があれば、私たちが肯定する権利をもつには十分だとでもいうのか。直接的なものを人間的な意識のなかに移動させる際にベルクソン氏が用いる、力強く目覚しい分析の努力は、むしろ、諸々の疑念を惹起するようなものとなっている。」(Delbos [1897: p. 386])

デルボスも、純粹知覚説の妥当性を疑っているのであり、それが単なる「自然な明晰性を伴う感情」の「体感」といったものによって肯定されていると見なしている。「感情」や「体感」という表現は、ベルクソンの純粹知覚説が、まっとうな哲学的な正当化を欠いたものであるというデルボスの見解を示している。このような「感情」の「体感」などというものを掲げて、この説が十分に正当化されているというわけにはいかないのであって、ベルクソンは、このような特殊な認識を見出したといえる根拠を示さなければならぬ。

もちろん、このような批判を受けて、ベルクソン『物質と記憶』の議論を救い出そうという試みがこれまでいくつかなされてきた。例えば、ベルクソンの「物質の実在性を肯定する」という試みを、「物質の実在証明」と捉えて、その証明のプロセスを判明にするという試みである。つまり、ベルクソンが「物質の実在性を肯定する」際に行なう議論が、直接的認識としての純粹知覚を無条件に肯定するものではなく、証明という正当化を伴ったものであることを示すという手段である。そして、そのような手段をとった研究が石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論——『物質と記憶』における精神と物質の実在証明』であった。後に本研究の第一章後半で詳しく見ていくこととなるが、石井によれば、物質世界の実在性の証明とは、純粹記憶説を経由して、純粹知覚説を正当化するという「間接的な証明」なのである。

しかしこのような解釈に批判がないわけではない。例えば、仮に石井の言うような「証明」をベルクソンが行なっているとすれば、ベルクソンは論点先取を犯していることとなる。というのは、『物質と記憶』で純粹記憶説を導入する際、ベルクソンは、物質が実在するということを端的な事実として前提している。だからこそ彼は、心理学の実証

的データや、身体によって成し遂げられているさまざまな認識様態を自身の議論にふんだんに導入することができたのである。また、ベルクソンは、『物質と記憶』の中で、物質の実在性を「肯定する」とは述べているが、「証明する」とは述べていない。ベルクソンが、何らかの確実な諸命題を前提して、そこからの演繹的推論を試みるような、いわゆる「演繹的な論証」といった手法に依拠していたとは考えにくい。以上の批判は杉山直樹の次の言葉に端的に表れている。

「ベルクソンの「論証」は、石井氏が（しかしおそらくは自覚的かつ方法論的に）想定したのとはいささか異なり、何らかの確実な諸基礎から出発して、目指された結論（例えば「外界の存在」）へとリニアに進むようなものではない。むしろそれは、暫定的に受容された経験の諸断片をつき合わせつつ、相互に調整を行ないながら、致命的な破綻（『物質と記憶』が批判する従来の「实在論」「観念論」はその例となろう）を避けつつ、多様な論点を巻き込みつつ漸進的に進むものだ。それは言わば、局地戦において蓋然的かつ相対的な勝利を重ねつつ、全体としてはほぼ絶対的な勝利を期する、そうした戦略ではあるまいか。」（杉山 [2002 : 176 頁]）

杉山も述べるように、ベルクソンの論証は、いわゆる演繹的な推論とは異なるものであるように思われる。内観やときには心理学の実験にも目を配りつつ、さまざまなデータをさまざまな論点から取り集めてきて、そこから導き出された諸帰結が指し示す主張を真理として受け入れる。このような方法がベルクソンの哲学的方法なのである。

だが、「多様な論点を巻き込みつつ漸進的に進む」ということは、単にさまざまな事象を見て取ってそこから真理（らしいもの）を推測するといったことと何が違うのだろうか。また、このことは、先にあげた諸々の疑問（「人間的な経験の向こう側」とは、あるいは「経験の源泉」とは具体的にどのようなものなのか、そして、仮にそのような源泉があるとして、なぜ・どのようにしてベルクソンはそこに到達したと言えるのか）に対する答えにはなるまい。

このように見てくると、『物質と記憶』が難解である理由の一端が見えてくる。次の疑問が当然ながら浮かぶからだ。——ベルクソンは証明をしていない？ では彼はいつたい『物質と記憶』で何をしているというのか？——哲学の仕事の主たる部分がいわゆる「論証」であるという先入観をもっている人々からするとこのような疑問をもつことは当然のことと思われる。そして、即座にこの論証の不在というベルクソンの欠点をあ

げつらう。かくして、読者は、ベルクソンによる捉えどころのない語り口を前にして、「ベルクソンは譬喩の世界でいくつかの仮説について思索をめぐらす哲学者の類に属する」などと思い込むこととなろう。

いったんまとめよう。本論文が答えるべきは次の二つの問題である。

(1) 純粹知覚説は、今日的な見解と比較してみると、色覚理論としてはひじょうに危うい主張をしているように見える。しかし、この純粹知覚説の主張には、心身問題の困難の緩和という伝統的な問題や、日常的な世界像と科学的な世界像の両立という今日的な問題に対するベルクソン『物質と記憶』の解答が賭けられている。では、純粹知覚説は、この現代的知見からの乖離という点において、即座に斥けられるべきなのか。そして、その純粹知覚説を支えとする諸々の主張も同時に棄却されてしまうのだろうか。

(2) ベルクソン『物質と記憶』の哲学的方法は、「人間的な経験」を越えて経験の「源泉」へと「赴く」ものと言われている。このようにして肯定されている純粹知覚説は単なる「証明」によって肯定されているのではないようだ。では、『物質と記憶』におけるベルクソンはいかなる哲学的方法によってこの純粹知覚説を肯定しようとしたのか。そしてその方法とは哲学的議論にとって有効なものなのだろうか⁶。

本論文は、問い(1)について、純粹知覚説の主張の内容を詳細にすることによってこの理論それ自体は現代的な批判にも応答しうる内実をもつことを示す⁷。そして、問

⁶ ベルクソンの哲学的方法については Deleuze [1966: chap 1] を参照されたい。ただし、ドゥルーズは、ベルクソンが『物質と記憶』で純粹知覚説を肯定する際にどのような方法をいかに用いているのかは明らかにしていない。ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』の訳者である檜垣立哉は次のように述べる。「ベルクソンの思考の弱点としてとりあげられるのは、その明白な方法論の不在であるだろう。「直観」(intuition) という、方法論に関連する有名な述語は、そもそも初期の段階では出てこない。ベルクソンの記述はいかなる資格において哲学的な言明としての価値をもちうるのか、それが定かにはわからない仕組みになっている。そしてこの点からみて、もっとも問題含みであるのが『物質と記憶』のテキストであるといつてよいだろう。そのわからなさが一種の魅力を構成するとしても、『物質と記憶』が、何故こうしたかたちで書かれたのかについては、実際に考えれば考えるほどさまざまな疑念が生じてくる。」(檜垣 [2017: 99 頁]) また、平井は次のような仮説を提示している。『物質と記憶』には「議論を紡ぐ「論理」そのものが、余所で見たことがないので面食らう」(平井 [2018: 19 頁]) というところがあり、「『物質と記憶』の比類なき「読みにくさ」は、そうした確固たる(既定の方法をもたぬという)方法的信念の証しなのだ」(平井 [2018: 20 頁])。それに対して、本論文は『物質と記憶』から明確な方法(論)を取り出すことを目指しているのである。

⁷ 純粹知覚説の色覚にかんする主張が一定の正当性をもつということを示すのが本論文の目指すところである。この主張に依拠した心身問題の緩和や、日常的な世界像と科学的な世界像との両立といった主張の詳細な吟味はまた別の機会に譲らねばならないことはあ

い(2)については、ベルクソンが『物質と記憶』で用いている独特な哲学的方法の内実を明らかにし、それが一つの哲学的方法として有効であることを示す。以上のこと明らかにすべく、本論文は以下のように議論を進めていく。

本論文は六つの章から成る。そして、これら六つの章について、前半の三つの章は第一部「哲学的方法論」、後半の三つの章は第二部「純粋知覚説」として分けられる。

本論文第一部の目的は、ベルクソンの哲学的方法を示すことである。本論文第一章では、まず『物質と記憶』の議論が主に依拠している方法が何ではないのかを示す。そのうえで、本論文第二章と第三章では、『物質と記憶』第三章の議論を解明することによって、ベルクソンの哲学的方法の特徴を明確化する。第二章では、ベルクソンによる過去の実在性の肯定の議論を解明することによって、第三章では、『物質と記憶』の最も重要な理論の一つである「意識の諸平面」の理論の導入の方法を解明することによって、ベルクソンの哲学的方法の内実を示したい。

第二部の目的は二つある。一つは、ベルクソンによって肯定されようとしている当の理論、純粋知覚説の内実を明確化することである。もう一つは、その純粋知覚説がどのような哲学的方法を用いて肯定されているのかを示すことである。第四章では、ベルクソンの色覚論を参考にしながら、純粋知覚説の主張の内実を明確化する。第五章では、純粋知覚において与えられているものが部分なのか全体なのかという解釈上の問題を解決する。そして、第六章では、第一部で明らかにされたベルクソンの哲学的方法を踏まえたうえで、第四章・第五章で内実が解明された純粋知覚説がどのようにして肯定されているのかを示す。

以上の考察を通して、私は、次のような考えがベルクソン『物質と記憶』に含まれていることを明示したい。すなわち、思考実験にはよいものと悪いものがあるという主張である。そして、上述の観念論や実在論に基づいて提示される思考実験（水槽の中の脳とメアリーの部屋）を悪い思考実験として位置づけ、それを受け入れる必要のないものとして棄却する。このような考えに基づいて、ベルクソンは独自のよい思考実験を提案している。そして、この彼独自の思考実験があつてはじめて、純粋知覚説が説得的な知覚説として肯定されうるのである。このとき重要なのは、思考実験のよさ／悪さを決める基準は何かということ、そして、思考実験はいかにしてよいものとして提示されうるのかということとなろう。本論文のタイトルはこれらの問題に対する答えを反映してい

らかじめ断っておきたい。

る。すなわち、よい思考実験とは「問題解決型の思考実験」であり、それを提示する際のベルクソンに独自の方法は「仮象論によってメタ理論を作り上げる」というものである。詳細は後に回すこととするが、冒頭で述べたように、ここから哲学という営みを従来考えられているよりも広い射程をもつ探究の営みとして捉え直すことができるだろう。

第一部 哲学的方法論

第一章 ベルクソンはいかにして純粹知覚説を肯定しようとしているのか？

——『物質と記憶』第一章の分析——

ベルクソンはいかにして純粹知覚説を肯定したのか。——端的に述べればこれが本論文の扱うベルクソン解釈上の問いである。本論文第一章の目的は、この問いに対する答えが何ではないのかを示すことである。この目的を達成すべく、『物質と記憶』第一章においてベルクソンが提示したイマージュ概念と純粹知覚説の関係にかんする二つの問題を考えてみたい。

一つめの問題点はテキスト解釈上のものである。ベルクソンは、純粹知覚説を導入する際、それを「仮説」と呼んでいる (MM31)。しかも、彼はそれを『物質と記憶』第一章の末尾においてさえ「仮説」と呼んでいるのだ (MM78-80)。ここから、純粹知覚説が、イマージュ概念とある対比をなすものとして理解される。というのは、イマージュ概念について、ベルクソンは次のように述べていたからである。「物質に関するいかなる理論もこの必然性から逃れることはできない」 (MM31-2) のであって「ここにあるのは仮説ではない」 (MM36. 強調は引用者による)。純粹知覚説が、『物質と記憶』第一章において、終始「仮説」とされているのに対して、イマージュ概念は、仮説ではなく、物質にかんする議論を進めるに当たって必ずやはじめに想定されざるを得ない考え方とされているのである。したがって、このような意味での「必然性」をもつイマージュ概念と、「仮説」である純粹知覚説には、内容の点からも、議論上の役割という点からも、違いがあると考えるのが自然だろう。だが、ベルクソンがイマージュ概念と純粹知覚説を上記のように区別しているということを上手く説明できる解釈は、これまで提示されてこなかった。

二つめの問題点は議論の整合性についてのものである。一方で、ベルクソンは、まずもってイマージュ概念を導入することによって議論を始め、それ以降も、イマージュ概念を用いて、先行する議論を整理し、問題を立て直し、問題を解決していく。この意味で、『物質と記憶』第一章の議論全体が、イマージュ概念を想定することによって成立している、とすることができる。しかし他方で、これまでの研究では、イマージュ概念の導入が次のようにして認められているとも考えられてきた。——イマージュ概念を認めなかったらあい、さまざまな困難が次から次へと生じ、私たちは、多くの解決不可能な問題に直面することとなる。この解決不可能性を解消するためには、イマージュ概念

を認めなければならない。——このようにベルクソンは、問題が解決可能であることをもって、イマージュ概念の正当性を導いている、という解釈である⁸。しかし、これら二つの議論が『物質と記憶』第一章に共存しているならば、ベルクソンは、問題の解決によってはじめて認められる考えを、その問題を立てる時点で前提してしまっていることとなり、ここには明らかに論点先取がある⁹。そして、私が見るに、この論点先取の嫌疑も、イマージュ概念と純粹知覚説を判明に区別していないことに由来するのだ。

私は以下の考察で、イマージュ概念の担う役割と純粹知覚説のそれとを差異化し、純粹知覚説をベルクソンの議論の帰結と位置づけることで、彼の議論を論点先取の嫌疑から救うことを試みる。これはつまり、イマージュ概念を、ベルクソンの議論にとっての前提として位置づけ直す、ということでもある。このように、イマージュ概念ならびに純粹知覚説の議論上の位置づけを判明にすることによって、ベルクソンによる純粹知覚説の肯定が、問題を解決するように概念を規定し直すという方法には依拠していないことを示す。

このようにベルクソンによるイマージュ概念と純粹知覚説の関係について明確化したのちに本章の後半部に移る。後半部では、この解釈を踏まえつつ、石井による解釈の再検討を行なう。これは『物質と記憶』第一章の後半部の解釈を通して行なわれる。本研究の冒頭で示したように、この石井の研究には、いくつかの難点が指摘されている。それにもかかわらず、石井の解釈を吟味することは、ベルクソンの試みが部分的には何であるのかということ、それと同時に、ベルクソンが主に用いている方法が何ではないのかということを示すことにつながる。以上の考察を通して、本論文第二章以降の考察の方向性を明示することがここでの目的となる。

⁸ See 杉山直樹 [2006 : 109-61 頁]。本章の記述は、杉山のこの研究に多くを負っている。参考にした箇所を適宜指摘していくので参照されたい。

⁹ 「問題の解決可能性」を軸にさまざまな実在の分節化を図る、というベルクソンの方法論は、ドゥルーズの研究において、ベルクソン哲学の「規則 *règles*」として提示されている (Deleuze [1966 : chap. I])。またグイエによれば、このような方法がベルクソンにおける「哲学の新しいやり方」に当たる (Gouhier [1962 / 1999 : p. 17])。つまり、「問題の解決可能性」を軸に諸概念を創造し、実在を確保してゆくというアイディアは、いわば、ベルクソン哲学を牽引する根本的方法論と考えられている (村山 [2009 : 279-93 頁])。こういった解釈に対して、私は、このような方法論がベルクソン哲学の根本にあるということを否定するつもりはない。私が示したいのは、少なくとも、イマージュ概念を想定する権利を正当化するときに、ベルクソンは、上記の方法論を用いていない、ということである。

1. 論点先取？

まず、既述の論点先取の内実を正確に把握するべく、イマージュ概念に関する二つの議論を確認する。

1-1. 議論 1：イマージュ概念を前提して問題を提示する議論

一つめの議論は、イマージュ概念を前提しながら問題を提示する議論である。『物質と記憶』第一章は次のように始まる。「物質の理論や精神の理論、そして、外界の実在性や観念性についての議論、それらをまったく知らないものとして、しばらくのあいだ振る舞おう。すると、私が前にするのはイマージュである[…]'」(MM11)。このように、ベルクソンは、『物質と記憶』の冒頭からイマージュ概念を導入している。そして、このイマージュ概念に基づいて、ベルクソンは次の問題を設定している。すなわち、どのイマージュも「異なる二つの体系に同時に属している。一方の体系 [= 科学の体系] においては[…]' イマージュの変化のあり方は、周囲のイマージュからこうむる現実的作用によってはっきりと定められている。もう一方の体系 [= 意識の体系] においては[…]' ある特権的なイマージュ [= 知覚主体の身体] の可能的行動をさまざまな程度において [イマージュの変化のあり方が] 反射・反映している。このようなことがどうして可能なのだろうか？」(MM20-1. 原文は全体が強調のイタリック)。

敷衍しよう。意識の体系とは次のものである。「ここに、私が宇宙についての私の知覚と呼ぶ、イマージュの体系がある。この体系は、ある特権的なイマージュすなわち私の身体のちょっとした変化によって一変してしまう。私の身体という特権的なイマージュは世界の中心を占めているのである。それ以外のすべてのイマージュがこの特権的イマージュに従って調整されている。私の身体というイマージュが運動するたびに、まるで万華鏡が回転させられたように、全体が変化する。」(MM20) ここから意識の体系は次の特性をもつと言える。この体系においてはつねに、「私の身体」という特定のイマージュがいわば原点となっており、そのイマージュのあり方に応じて、ほかのすべてのイマージュが現れる。あり方に応じて、とは、あらゆるものが同等に知覚されているのではなく、私の知覚能力と関心とに応じてのものだけが、とりわけ浮き上がって知覚されているということであり、このイマージュが向きを変えたり目を閉じたりすることによって体系のすべてががらりと変わってしまうということである。それに対して科学の体

系とは次のものである。この体系においては、「同じイマージュが […] たしかに影響しあってはいるが、しかし、原因はつねに結果とつりあっている」(MM20)。つまり、科学の体系は次の特性をもつ。この体系は、私の身体といった特権的な中心をもたず、計算による未来の予測を受け入れる。言い換えれば、科学の体系は、物理法則に即した厳密な秩序を示す。事物としてのイマージュが上述の二つの体系に属するものであるという想定。——ひとまずイマージュ概念とは何かを規定しておけば、このような想定のことであると言えよう。

さて、この問題を提示する際のベルクソンの発言に着目しよう。まず彼は次のように述べている。「論争に決着をつけるためには、争いがなされるための共通の場をはじめに見出す必要があり、そして、どんな立場をとるにせよ、私たちが事物を把握するのがイマージュという形のもののみである以上、私たちが問題を提示するのは、イマージュとの関係においてであり、それ以外であってはならない」(MM21)。つまり、上述の問題を提示するに当たって、それは、『物質と記憶』の冒頭から導入された、イマージュ概念に基づいていなければならない。このように彼は、イマージュ概念が、適切な問題設定のためには必要不可欠なものであると述べている。

また彼は次のようにも述べている。イマージュ概念を前提にした場合、科学の体系と意識の体系という判明に区別される二体系が見出され、その結果「实在論と観念論のあいだで提起される問題はきわめて明晰になる」(MM21)。つまり、上述の問題は、イマージュ概念を前提してはじめて、はっきりと見出されたのである。このようにベルクソンは、イマージュ概念を前提して、この理論が提供する判明な区分に依拠しつつ、明晰な問題設定を行っている。

1-2. 議論 2：問題の解決可能性からイマージュ概念を正当化する議論

二つめの議論は、問題が解決可能であることからイマージュ概念を正当化するものである¹⁰。これについては、例えば、ベルクソンによる实在論批判を見ていくのがよい。ここでいう实在論とは、物質にかんする次の考え方であった。すなわち物質が現れてくる際に、それは単に延長をもつものとしてだけではなく、さまざまな質的な性質をもつものとしても現れてくる。言い換えれば、物質は、一定の広がりや特定の位置などのいわゆる一次性質をもつものとしてのみならず、色や匂いといった二次性質をもつものと

¹⁰ 以下の記述については杉山 [2006 : 122-36 頁] を参考にした。

しても現れてくる。实在論によれば、物質それ自体は、この一次性質をもつが、二次性質はもたない。

さて、ベルクソンはこの实在論の考えを次のように批判している。「第一の項〔＝外界の運動〕よりも第二の項〔＝知覚表象〕により多くのものがあるならば、〔言い換えれば〕現存から表象に移行するために、何らかのものを加えなければならないとしたら、その〔＝現存と表象のあいだの〕距離は乗り越えがたく、物質から知覚への移行もうかがい知れぬ神秘に包まれたままであろう」(MM32)。上記の問題（二体系はいかにして共存しているのか）は、实在論にとって、物質の運動がいかにして知覚表象を生みださうか、という形で現れる。しかしベルクソンによれば、この問題は決して解きえない。というのは、物質の運動はあくまで物質の運動であって、表象ではない以上、そこから知覚表象に移行しようとしても、何がその移行を実現させてくれるのか不明であるからだ。例えば、脳内運動という第一性質しかもたないものの位置変化が知覚意識を生じさせ、そのことによって、その運動を引き起こした知覚対象が第二性質を獲得するなどできないのである。

ベルクソンによれば、この困難を回避するには次の考えを捨て去らねばならない。すなわち、感覚神経が受け取った刺激が、脳内で何かしらの変化・変換を被ることで、はじめて知覚性質が生じるという考え、いわゆる「随伴現象説」である (MM35-6)。ベルクソンは、この考えを捨て去り、次のように述べる。「[...] 仮に写真があるとして、事物のまさしく内部で、あらゆる空間点にとって、すでに写真は現像されているということなぜ認めないのか。いかなる形而上学も、いかなる物理学でさえも、この帰結を免れることはできない」(MM36)。すなわちベルクソンは、物質から知覚性質を排することを拒否して、脳・神経が何もつけ加えずとも、私たちに知覚されたとおりに知覚対象が存在していることを認める。さもないければ、私たちは、解決不可能な問題に関わることを余儀なくされるからだ。このとき彼は、問題が解決できることをもって、イメージュ概念を正当化している。

1-3. 論点先取

イメージュ概念には以上の二つの議論があると思われる。しかし、このように理解された場合、ベルクソンの議論は論点先取を犯していることとなる。すなわち彼は、一方で、イメージュ概念を前提としつつ問題を提示しており（議論 1）、他方で、まさにその

ようにして立て直された問題の解決可能性からイマージュ概念を正当化している（議論 2）。イマージュ概念の正当性を結論とする証明に、イマージュ概念を前提しているのだ。ゆえに、ここには論点先取があるように見える。

2. 議論の構造

以下で私は、次のようにして、ベルクソンの議論を論点先取の嫌疑から救い出す。まず、上記の議論 2（問題の解決可能性からイマージュ概念を正当化する議論）が、ベルクソンの議論にはないことを示し、その上で、イマージュ概念の導入契機ならびに目的を明確化する（2-1 節）。次いで、純粹知覚説の内実を規定し（2-2 節）、ベルクソンの議論の構造を示すことで、純粹知覚説をこの議論における帰結として位置づける（2-3 節）。つまり私は、ベルクソンの議論を、イマージュ概念を前提し純粹知覚説を帰結とするものとして示すことで、彼の議論を論点先取の嫌疑から救う。

2-1. 前提としてのイマージュ概念——その導入目的

本節では、1-2 節で提示した議論 2 がベルクソンの議論にはないことを示し、イマージュ概念の導入契機ならびに目的を明確化する。そのために、議論 2 に当たると解釈される箇所を精査し、問題の解決可能性とイマージュ概念の正当性の論理的つながりを吟味することとしよう。

まず以下の箇所を見てみよう。「[...] もし点 P の視覚イマージュが与えられていなかったら、点 P の視覚イマージュがなぜ形成されるのかを探求する余地はなかろう。そして解決不可能な問題を目前にしていると早々に気づかれよう。だが、どんなやり方を採用するにせよ、まずはイマージュを措定することから始めざるをえない」（MM39-40）。「解決不可能な問題」についての言及があることから、この箇所は、議論 2 の存在を示唆しているように思われよう。

しかし注意して欲しい。「イマージュを措定することから始めざるをえない」と述べる直前に付された「だが」に着目しよう。この箇所が議論 2 に当たると言えるには、「問題が解決可能であるから、イマージュ概念は認められる」といった文がなければならない。しかし、「イマージュを措定することから始めざるをえない」という命題と、イマ

イメージ概念を前提しない者が「解決不可能な問題を目前にしている」という命題には、両者の間にあるのが「だが」である以上、後者の命題が前者の理由になってはいないと見るのが自然である。それゆえこの箇所は、むしろ、イメージ概念の正当性が問題の解決可能性とは無関係に肯定されうることを示唆している。

ベルクソンは、実際に、イメージ概念の正当性が問題の解決可能性と無関係に肯定されると考えていたのではないか。——それが私の解釈である。先ほどの引用箇所を改めて吟味してみよう。「[...] 仮に写真があるとして、事物のまさしく内部で、あらゆる空間点にとって、すでに写真は現像されているということをなぜ認めないのか。いかなる形而上学も、いかなる物理学でさえも、この帰結を免れることはできない」(MM36)。

「事物の内部ですでに写真が現像されている」というのは、物質世界が科学の体系と意識の体系に属する記述を受け入れることを意味する。それゆえ、ここでいう「帰結」とは、イメージ概念の析出する二体系が共存していることを認める、ということであり、ここでも、それを認めることは必然的である（「免れることはできない」）とされている。

だがこの箇所も「問題が解決可能であるから、イメージ概念を認めなければならない」とは述べていない。実際、引用部の続きは次のようになっている。「原子でできた宇宙を作ってみよう。距離に従って変化する量・質のもと、物質の全原子によって及ぼされる作用が、各原子の内で感じられる。力の中心でできた宇宙を作ってみよう。すべての中心によって、すべての方向に発せられる力の線が、各中心に、物質世界全体の影響を伝えている。最後にモナドでできた宇宙を作ってみよう。ライプニッツが望んだように、すべてのモナドが宇宙の鏡である。したがって全員がこの点〔＝イメージ概念を想定すること〕に同意している」(MM36)。つまり、ベルクソンは、「問題が解決可能であるから、イメージ概念が認められる」といった仕方で、イメージ概念を正当化しているのではない。彼は、ただ、いかなる理論においてもイメージ概念が前提されざるをえないことから、それが必ずや前提として認められると述べているのだ¹¹。

¹¹ 以下の箇所についても同様である。「意識を導くというのはきわめて大胆な試みであろう。しかし実際にはその試みはここでは不要である。なぜなら、物質世界を置くことでイメージの総体が与えられているのであり、そして、それ以外のものを与えることは不可能であるからだ。物質に関するいかなる理論もこの必然性から逃れることはできない」(MM31-2)。ここでイメージ概念を前提する権利は次のように保証されている。「物質を、運動する原子へと還元してみよう。これら原子は、なるほど〔色や硬さといった〕物理的な質をもってはいない。だが、それに何かしらの規定を与えようとすると、たとえ可能的なものではあれ [...] 視覚や触覚と関係づけざるをえない。[...] じっさい、イメージは知覚されなくても存在することができる」(MM32)。つまり、この箇所も、「問題が解決可能であるから、イメージ概念を認めなければならない」と言っているのではな

以上より私は次のように結論づける。——ベルクソンのテキストに議論 2 は存在しない。彼は、問題の解決可能性がイマージュ概念の正当化につながるとは述べていない。彼はただ、どんな理論でもイマージュ概念を前提しているという事実から、それを前提することを認めているだけである¹²。——これは、ベルクソンの議論には、議論 1 (イマージュ概念を前提しながら問題を提示する議論) のみが認められる、ということの意味する。とすると、イマージュ概念の導入目的は、問題を解決可能にするように物質の本性を規定することではなく、適切な問題設定をすることだけに限られる。ベルクソンは、さまざまな理論にイマージュ概念が共有されていることから、それを前提すべきことを示す。すなわちそれは、実在論や観念論、そしてそれらの考えに基づいて物質世界について記述する理論に想定された、意識の体系と科学の体系の共存という事態を、自身の議論の被説明項 (の一つ) にする、ということである。それによって彼は、適切な問題設定を行なっているのである (MM21)。

2-2. 純粹知覚

以上より、イマージュ概念は、ベルクソンの議論における帰結ではなく前提であることが理解された。とすれば、ベルクソンの議論には、イマージュ概念とは別に、その帰結に当たるものがあることとなろう。私の考えでは、それこそが純粹知覚説である。以下で説明しよう。

く、端的に、どのような理論でも「知覚されなくても存在しているイマージュ」を前提していることを理由に、イマージュ概念を前提することが正当化されている。

¹² 「もし物質界がベルクソンの言うような「イマージュ」であるのなら、彼の議論を認めてもよいのかもしれない。しかし、それが恣意的でない保証はいったいどこにあるのか。[...] こうして私たちは [...] 「イマージュ」概念を導入することの権利をめぐる問いに導かれることになる」(杉山 [2006 : 133 頁])。この問いに対する杉山の答えが、議論 2 の内容 (問題の解決可能性をもって、イマージュ概念の正当性を認める) に当たる。「実際、見えている点 P という指示を用いずに、それが一度も登場しない記述だけを重ねて、その記述がまさに見ているこの光点 P についてのものなのだ、と言わねばならないのだとしたら、それは「解決不可能な問題」であろう。[...] この困難を排除するためには、最初から「点 P の視覚的イマージュ」を「措定しないわけにはいかない」(同上、135 頁)。本章のこれまでの考察から理解されるように、私は、「イマージュ概念を導入する権利」が「問題の解決可能性」によって保証されている、という解釈を採らない。このことについての私の考えは次のものである。——ベルクソンは、イマージュ概念が析出する「二体系の共存」が実在論・観念論とそれらに基づいた物質理論に前提されている、ということを示した。したがって、論敵たちとも共有された事柄について、それを前提する権利をさらにさかのぼって示す必要はない。

まずは純粹知覚説の内実をここで必要な限りで再確認しよう¹³。「[…]「純粹知覚」について私たちが素描したばかりの説を手短にまとめよう」(MM63)。こう述べた後に、ベルクソンは、次のように問う。網膜に与えられた非延長の感覚与件から視覚印象が構成されると考える人々（以下「投影論者」）を想定しよう。この場合、「網膜は一つではなく、二つある」のだから、投影論者が「説明すべきことは、判明に区別されると思われる二つの感覚が、合わさってたった一つの知覚となり、私たちが空間点と呼ぶものに対応する理由であろう」(MM63)。つまり、複数の感覚与件が、特定の空間点に対応している理由は何か。ベルクソンによれば、投影論者にはこの事態が説明できない。というのは、そもそも、非延長の感覚がどのようにして延長を獲得するのかがわからないし、ひいては、その感覚が一つの空間点に対応する理由が不明であるからだ (MM63-4)。

続けて、ベルクソンは次のように問う。「今度は、この視覚的延長がどのようにして触覚的延長と結びつくのか」(MM64)。例えば、視覚像として私に与えられた机の上のペンを、私は手でつかむことができる。こうした視覚与件と触覚与件の対応の由来は何か。投影論者にはこのことも説明できない。視覚と触覚はまったく異種の感覚内容をもつ。そうである以上、両感覚には、共通のものなど一切ない。こうした異種の感覚どうしが、観念の投影によって見事に対応するという事態を説明するには、遅かれ早かれ、予定調和などの恣意的な仮説が要請されることとなろう (MM64)。

だがベルクソンによれば、予定調和のような恣意的な仮説に陥らずに、複数の感覚の対応を説明することができる考えがある。「[…]ここで私たちは、視覚が与える感覚と、触覚が与える感覚とに加えて、一つの秩序を、すなわち、どちらにも共通で、ひいては、どちらからも独立していなければならない秩序を、想定せざるをえないのだ」(MM64)。つまり、上記のさまざまな事態を私たちが説明するには、私たちから独立して秩序を有するものが実在すると考えなくてはならない。「彼ら〔＝投影論者〕は、知覚が知覚された対象と一致する非人称の基盤が存続していること、この基盤が外在性そのものであることを、ただ忘れていただけなのだ」(MM69)。この秩序を備えた「非人称の基盤」こそ、『物質と記憶』がその実在性の肯定を目指す物質であり、純粹知覚説とは、この基盤の実在性をその主張の一部とする「仮説」(MM64) である。

¹³ 以下の記述については杉山 [2006 : 140-8 頁] を参考にした。

2-3. 最善の説明からの推論

では、純粹知覚説は、『物質と記憶』第一章の議論全体で、どのような位置を占めるのか？ この問いに応答すべく、『物質と記憶』第一章の議論を整理して、その形式面を特徴づけよう。

第一章の議論は次のように整理できる。——まずベルクソンは、イマージュ概念を前提することで、意識の体系と科学の体系はいかにして共存可能なのか、という問題を立てる。その際、イマージュ概念を前提する権利は、二体系の共存が、物質世界に関するさまざまな理論に認められていることから保証されている。私たちには、この問題に応答する三つの理論が用意されている。实在論と観念論、そして純粹知覚説（直接知覚説）である。だがこれら三つの理論のうち、实在論と観念論には、上記の問題を解決できない。それに対して、純粹知覚説を想定すると、問題を解決できる。言い換えれば、知覚性質・秩序といった私たちが見て取るものが、私たちの側から構成されるのではなく、私たちに直接知覚されていると仮定することによって、上記の問題が解決される。かくしてベルクソンは、純粹知覚説が正しいことを認める。——彼の議論は以上のように整理できる。

さて、このように整理された議論について、私たちは、ここで用いられている推論の名称ならびに形式を知っている。すなわちそれは「最善の説明からの推論」である。言い換えれば、既知の事実を最もよく説明する理論の（必ずしも論理的ではない）導出である。ベルクソンの議論として私が示したものは、明らかに、この最善の説明からの推論の形をとっている。だが、ベルクソンが最善の説明からの推論によって純粹知覚説の正当性を導いたということは、純粹知覚の正当性は蓋然的なものに過ぎないということだろうか？ というのは、最善の説明からの推論とは、一般に、「最善の説明を導く推論」と称されるように、これだけでは確実な論証とはいえず、ある現象を説明するに際して、よりよい帰結を導いたものにすぎないからだ。それはベルクソンの証明の不完全性を示してはいないか。この疑問に対して、私は「そのとおり」と答えざるをえない。これは、ベルクソンの議論を最善の説明からの推論と特徴づける以上、逃れがたいものである。

しかし、私が見るに、ベルクソン自身も、自らの帰結が蓋然的なものであることに自覚的であった。ベルクソンは『物質と記憶』第一章の末尾で次のように述べている。「[…]

私たちは、純粹知覚のもと、自分の外部にまさしく置かれているのであり、そのさい、

直接的な直観において、対象の实在にふれている」。この「仮説」には「記憶の研究によって […] 判定を下すことができるだろう」(MM79)。つまり、ベルクソンは、純粹知覚説が少なくとも第一章においては仮説の域を出ず、その是非は、後の記憶力の研究によって判定されるべきだ、と考えているのだ。これは彼が、自らの推論を最善の説明からの推論と自認し、その帰結に「蓋然性」を認めていたからに他なるまい。これこそが、純粹知覚説が終始「仮説」と呼ばれていた理由である¹⁴。

そして、純粹知覚説の「蓋然的な帰結」という議論上の位置を、「前提」としてのイマージュが占めることは不可能であろう。そうである以上、ベルクソンは、次のような議論をしていると解するべきである。——ベルクソンは、イマージュ概念を前提したうえで、最善の説明からの推論形式の議論によって、純粹知覚説を帰結として導いている。したがって、ここに論点先取はない。

2-4. イマージュ概念と純粹知覚説の違い

では結局のところ、イマージュ概念と純粹知覚説にはどのような違いがあるのか。両者の導入目的およびそれらが「何に関する理論か」という点を明らかにすることによって答えよう。

イマージュ概念の目的は適切な問題設定をすることである。イマージュ概念は、実在論・観念論と共有されたある想定を析出する。すなわちそれは、物質が科学の体系と意識の体系という判明に区別される二体系に属するように見えるという想定である。この想定を析出によって、「二体系がいかにして共存しうるのか」という問題が立てられたのである。この限りで、イマージュ概念は、物質や知覚に関する積極的な規定を果たす理論ではない。言い換えれば、ベルクソンは、イマージュ概念を冒頭から提示しているが、それは物質にかんする特定の形而上学にコミットすることではない、ということである。つまり、イマージュ概念とは、適切な問題設定のために導入された、物質世界の記述の仕方に関する概念であると言えよう。

それに対して、純粹知覚説の目的は、イマージュ概念によって立てられた問題（二体系はいかにして共存しうるのか）を解決する、ある仮説を提供することである。すなわち、その仮説とは、私たちが知覚しているイマージュが物質世界そのものに当たるとい

¹⁴『精神エネルギー』の次の発言も参照せよ。「私のいう哲学は […] 少しずつ経験をひろげ、少しずつ蓋然性を高めて、ちょうど極限へ向かっていくかのように決定的な確実性に接近していくのです」(ES3-4)。他に (ES6 ; 27 ; 42 ; 58-60 ; 83) も参照せよ。

う直接知覚説である。そして、純粹知覚説は、当該の問題に、实在論・觀念論よりも有効な解決策を与えるという理由で、正当化される。この意味で、純粹知覚説は、イマージュ概念を通して立てられた問題を解決するために導入された、物質の本性・知覚の本性を積極的に規定する理論であると言える。言い換えれば、純粹知覚説が認められることによってはじめて、ベルクソンは物質にかんする特定の形而上学にコミットすることになる、ということである。

以上の区別から次のことが言える。『物質と記憶』第一章の議論において、ベルクソンは、イマージュ概念と純粹知覚説を判明に使い分けている。すなわち、ベルクソンは、問題を立て直す概念（イマージュ概念）と、その問題を解決する理論（純粹知覚説）の二種類を用いている¹⁵。そのうえで、彼は、形式的に言う限りでは、最善の説明からの推論を用いた議論を展開しているのである。

3. ベルクソンは純粹知覚説をどのように肯定しているのか？

——『物質と記憶』第一章末尾の分析——

以下では、ここまでの解釈に基づいて、純粹知覚説をベルクソンがどのように肯定するつもりなのかを明らかにする。「つもり」というのは、以下で行なわれることが、ベルクソンによる肯定のプロセスを逐一辿ることではないからだ。そうではなく、以下では、『物質と記憶』第一章末尾においてベルクソンが提示している、第二章以降の章（第二～四章）における純粹知覚説の正当化の概略を解釈する。正当化の概略がどのようなものであるのかを示すことは正当化が実際にどのようなものであるのかを示すことにはなるまい。とはいえ、ベルクソン自身によるこの概略を理解することは、純粹知覚説の肯定の過程を理解することに少なからず貢献するとも言えるだろう。

とりわけ問題となるのは『物質と記憶』第一章末尾の次の箇所である。

「反対に、私たちに次のことが分かったと仮定しよう。すなわち、記憶と知覚のあいだには、たんなる程度の差異ではなく、根本的な本性の差異がある、と。この場合、この推測 (*présomption*) は次の仮説に有利なものであろう。すなわち、記憶に

¹⁵ 杉山 [2006] では、この二種類の役割をイマージュ概念が一手に担っていると誤解されているということである。

はまったく実在しない何かを、言い換えれば、直観的に捉えられたある実在を、知覚の内に見出すような仮説〔＝純粹知覚説〕である。」(MM80)

まとめるとここでベルクソンは次のような「推測」を提示していることになる。

- (1) 記憶と知覚のあいだに本性の差異があるならば、直観的に捉えられた実在が知覚の内にはある。
- (2) 記憶と知覚のあいだには本性の差異がある。
- (3) したがって、直観的に捉えられた実在が知覚の内にはある

(1~3) の内実を理解するには次の①~④の点が解明される必要がある。まず、①「記憶と知覚のあいだには本性の差異がある」という命題がどのような内実をもつのかが具体化されるべきである。また、②「直観的に捉えられた実在が知覚の内にはある」という命題に見られる「直観的に捉えられた実在」が何を意味するのも特定されるべきだろう。さらに、③ (1~3) を通してベルクソンは何をしているのか（それは演繹的な推論か、最善の説明からの推論か、それとも…？）ということや、④そもそもなぜこのような類の議論が純粹知覚説の肯定に必要だとベルクソンが考えたのかというこの議論の背後にある動機も明らかにしなければならない。

以上の四つの点を（『物質と記憶』第一章末尾から分かる限りで）明らかにすべく次のように論を進める。まず、石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論——『物質と記憶』における精神と物質の存在証明』による、問い①~④に対する解答を提示する。次に、この石井の解釈の問題点を指摘する。そして、MM80 をその周辺部の解釈を通して補完することによって、①~④の問題を解決して、純粹知覚説の肯定の概略のより正確なバージョンを提示する。

4. 石井 [2001] の解釈

『物質と記憶』においては「純粹知覚説」と「純粹記憶説」という二つの理論が大きな役割を果たしている。石井によれば、これら二つの理論のあいだには、純粹記憶理論の証明を通して純粹知覚理論の正当性が論証されるという「間接的」な証明が試みられている。石井は次のように述べる。

「〔…〕この理論〔＝純粹記憶説〕は、外界の「外部性そのもの」から権利上は独立しているような精神的実在としての「純粹記憶」を、実際の知覚のうちに探り当てて、その本質が身体に対して「無力」な点にあることを示すことによって、いつも身体に対して力をもつ現実の知覚のうちに「外部性そのもの」が含まれていることを、間接的に証明しようとするものである。「外部性そのもの」は、具体的な知覚の大部分を構成している記憶の、その本質としての「無意識」のうちには、端的に不在のものとして、その存在が証明されるのである。」（石井〔2001：24頁〕）

この石井の解釈によれば①～④に対しては次の解答が与えられる。

- ①「記憶と知覚のあいだには本性の差異がある」という命題が意味するのは、「記憶が身体に対して「無力」であるのに対して、知覚は身体に対して「無力」ではない」ということである。そして、「無力」という語は「知覚者を行為へと促さない」という意味をもつ。
- ②「直観的に捉えられたある実在」とは「外部性そのもの」のことである。「外部性そのもの」とは、要するに現存する「物質」のことであり、つまりここでベルクソンは「物質」の実在性について議論していることとなる。
- ③ベルクソンが行なっていることは一つの「証明」であり、石井の言葉を借りるならば「間接的証明」である（「〔…〕不在のものとして、その〔＝物質の〕存在が証明される」）。
- ④なぜこの「証明」は「直接的」なものではなく、「間接的」なものである必要があるのか。その理由は次の石井の言葉を見ればわかる。

「実際の知覚は、たとえそれが「記憶心像」に浸されていないと仮定しても、それが接触しているはずの「外部性そのもの」がそれ自体としては現れてこない知覚であり、そのわけは、「持続の厚み」をつくり出す一種の記憶力、通常の意味での記憶力と同根の一種の記憶力が、現実の知覚に一定の時間の厚みを与えているからである。」（石井〔2001：23頁〕）

通常の知覚は、その大部分が記憶力によって導入された記憶イメージから構成されており、そこに潜んでいる現存する「外部性そのもの」はそれ自体として知覚主体に与えられることはない。それにもかかわらず「外部性そのもの」の存在を間接的に証明す

るための手掛かりなら、現実の知覚のうちに探りあてられる、とベルクソンは考えた
「…」(石井 [2001 : 23 頁])。まず、知覚と記憶という通常の知覚を構成する二つのもの
のあいだに、前者が知覚者を行為に促すのに対して後者がそうではないという本性の
差異を見出す。そして、このことから、現に行為を促すものとして与えられている知覚
の中には、「無力」な記憶とは本性的に異なる、知覚者を行為に促す「外部性そのもの」
があるだろうと推測されるのである。つまり、ベルクソンの証明が間接的なものでなけ
ればならない理由は、その実在が証明されるべき「外部性そのもの＝物質」がそれ自体
としては直接意識に与えられないからである。

以上の石井の解釈に従ってベルクソンの議論を定式化するならば次のようになる。

- (1) 知覚に現れているものが知覚者を行為へと促すのに対して、記憶は知覚者を行為へ
と促さないならば、知覚の内には(知覚者を行為へと促さない記憶とは異なる)知
覚者を行為へと促す「外部性そのもの＝物質」がある。
- (2) 知覚に現れているものが知覚者を行為へと促すのに対して、記憶は知覚者を行為へ
と促さない。
- (3) したがって、知覚の内には知覚者を行為へと促す「外部性そのもの＝物質」がある。

石井の解釈はこれですべてではない。特に石井はその著書の後半(第四章から第六章)
を、ベルクソンによる (2) の正当化の議論(純粹記憶説)の解釈に当てている。とはい
え、石井が解釈するベルクソンの「間接的証明」の構造はこれで表現できているのであ
り、石井の解釈の問題を指摘することによって MM80 のよりよい解釈を提示するとい
う目的にとってはこれで十分である。

5. 「直観的に与えられた実在」とは何か？

次に石井による解釈の問題点を指摘していきたい。石井の解答の①・③・④に主に問
題があるのだが、ここではまず②を足場にすることから始めよう。②にあるように、知
覚者を行為へと促す「外部性そのもの」とは「物質」のことである。ところで、そのよ
うな行為を促進する「物質」とは何だろうか。というのも、『物質と記憶』第一章後半
部の時点においては、物質の内実規定として二つの候補がありうるからだ。すなわち、

一つは、感覚性質を一切もたないものとしての延長物であり、もう一つは、感覚性質をもつ延長物である。ではベルクソンがここで述べている「外部性そのもの」としての「物質」——MM80 で用いられている言葉を用いて述べ直せば、「記憶にはまったく実在しない何か」「直観的に捉えられたある実在」——とはどちらを意味しているのか。

以下では MM80 を一部とする段落全体とその周辺部を吟味することで石井の解釈の問題点を一つずつ指摘していきたい。この段落（MM78-80）の目的は、「記憶力の問題が私たちの見解〔＝純粹知覚説〕において特権的な問題である理由をしっかりと定める」（MM78）ことである。この段落は、「知覚における脳の役割に関する」「第一の」帰結と「形而上学的な秩序をもつ第二の帰結」という二つのパートの説明から成る。順に見ていこう。

第一の帰結においてベルクソンが示そうと試みていることは、「脳は表象の道具ではなく、行動の道具である」という脳の機能にかんするテーゼである。このテーゼは少なくとも次のことを意味する。すなわち「脳は感覚性質を生み出すことができない」ということである¹⁶。例えば、リンゴを見ているとしよう。このリンゴの知覚には赤さといった感覚性質が伴っている。そして、ベルクソンによれば、この赤さは、何らかの物理化学的過程を経て脳や神経が生み出すものではない。ベルクソンはこのような考えを第一の帰結として肯定しようとしているのであり、これが純粹知覚説の主張の一部を成す。

第二の帰結はこの第一の帰結と密接に関係する。すなわち、仮に脳が感覚性質を生み出すことができないとしたら（＝第一の帰結）、私たちに与えられている感覚性質は物質そのものに内在する性質であるという推測（＝第二の帰結）が成り立つ。例えば、赤いリンゴの赤さが脳や神経によって生み出されていないのだとすれば（＝第一の帰結）、私たちに与えられている赤さはリンゴそのものに内在する性質であろう（＝第二の帰結）と推察される。

以上のように、第一の帰結と第二の帰結とのあいだのつながりを考慮すると、MM80 において述べられている「直観的に捉えられた実在」とは、延長のみならず、感覚性質ももつものことと思われる。これが問い②（「直観的に捉えられた実在が知覚の内にはある」という命題に見られる「直観的に捉えられた実在」が何を意味するのか）に対する答えとなる。

ところで、この点については石井の解釈も誤ってはいない。ただし、このように、ベルクソンが肯定しようとしている「外部性そのもの＝物質」の内実を明確に規定すると、

¹⁶ 第四章冒頭（MM199-200）にこのテーゼの簡潔なまとめがある。

石井の再構成した証明には、この意味での「物質」の实在証明としては不十分なところがあることとなる。

6. なぜ純粋知覚説の正当性は「直接的に確証」されえないのか？

さて着目すべきは（石井の応答③にあるように）ベルクソンが上の意味での「物質」の实在性については「直接的な確証」を得ることはできないと考えていることである。例えば、第一の帰結の説明部分でベルクソンは次のように述べている。

「純粋知覚が、定義上、現存する対象に関わっており、私たちの器官・脳中枢を働かせている以上、ひいては、私たちの知覚が、私たちの脳状態から生じ、次いで、知覚からは完全に区別される対象に投影されるかのように、つねに物事が進行しているようである以上、私たちは、このテーゼの直接的確証を事実を求めることはできなかった。言い換えれば、外界の知覚の事例においては、私たちが反対したテーゼも、私たちがそのテーゼに替えて提示したテーゼも、同じ帰結をまさしく導いており、結果として、私たちにできるのは、経験の權威を引き合いに出すことではなく、これらのテーゼのうち一方あるいは他方を考慮しつつ、テーゼがより高い知解可能性をもつことを引き合いに出すことであった。」（MM78-9）

重要なのは「このテーゼの直接的確証を事実を求めることはできない」とベルクソンが述べるその理由である。それは以下のように解釈することができる。

ここでいう「私たちが反対したテーゼ」とは「脳や神経が感覚性質を生み出す」という主張である。ベルクソンはこのような考え方もつ理論を「实在論」や「唯物論」、あるいは「機械論」とか「唯物論的实在論」とも呼ぶが、以下ではそれらを（これまでと同様）「实在論」と一括して呼ぼう。それに対して、「私たちがそのテーゼに替えて提示したテーゼ」とは「脳や神経が感覚性質を生み出さない」という純粋知覚説のテーゼである。また、「このテーゼの直接的確証を事実を求める」ということでベルクソンが意味しているのは、科学の体系と意識の体系が共存しているということを「事実」としたうえで¹⁷、この事実を説明できるか否かという点で、实在論と純粋知覚説とのどちらの

¹⁷ すなわち、どのイマージュも「異なる二つの体系に同時に属している。一方の体系

蓋然性が高いのかを評価するということである。つまり、本章の前半部で示したように、ここでベルクソンはやはり最善の説明からの推論を行っており、そのことは「これらのテーゼのうち一方あるいは他方を考慮しつつ、テーゼがより高い知解可能性をもつことを引き合いに出す」というベルクソンの言葉からも見て取れる。

ところが、實在論も純粹知覚説も、それなりの仕方で、二つの体系の共存という事態を説明できてしまう。二つのテーゼが「同じ帰結をまさしく導く」とは、このことを意味する。そうである以上、科学の体系と意識の体系の共存を説明できるか否かと問うことによって、両方のうちのどちらがよりもっともらしいのかを決することはできない。だからこそ「このテーゼの直接的確証を事実を求めることはできない」とベルクソンは考えたのである。

ベルクソンは第二の帰結のところでも同様のことを述べている。

「対象の實在が直観的に知覚されているにせよ、対象の實在が合理的に構成されているにせよ、実際の結論がまったく同じものである以上、ここでもまた、経験による立証は不可能であった。」(MM79)

科学の体系と意識の体系が共存しているという事態は、感覚性質をもつ延長物を私たちが直接知覚している（＝純粹知覚説「対象の實在が直観的に知覚されている」）にせよ、そうではなく、脳や神経によって感覚性質が生み出されている（＝實在論「対象の實在が構成されている」）にせよ、説明はできてしまう（＝「実際の結論がまったく同じものである」）。そのため、實在論と純粹知覚説のどちらが正しいのかを、二つの体系の共存をめぐる説明力を比較すること（最善の説明からの推論）によって決することはできない。

さて、石井によれば、ベルクソンが「間接的な証明」を採用した理由は次のものであった。——すなわち、通常の知覚は、その大部分が記憶イメージによって構成されている。そのため、通常の知覚のほんの一部を構成している「外部性そのもの」としての物質がそれ自体で意識に与えられることはない。ゆえに「間接的証明」が要請される。

〔＝科学に属する体系〕においては〔…〕イメージの変化のあり方は、周囲のイメージからこうむる現実的作用によってはっきりと定められている。もう一方の体系〔＝意識に属する体系〕においては〔…〕ある特権的なイメージ〔＝知覚主体の身体〕の可能的行動をさまざまな程度において〔イメージの変化のあり方が〕反射・反映している。このようなことがどうして可能なのだろうか？」(MM20-1. 原文は全体が強調のイタリック)。

だが第一の帰結と第二の帰結とのつながりを考慮しつつ、ベルクソンが述べることを詳細に見ていくと、この石井の見解は誤っているように見える。すなわち、ベルクソンが純粹知覚説の「直接的な確証」を得ることができないと考えている理由は次のものではないか。——實在論も純粹知覚説も、意識の体系と科学の体系の共存という説明すべき事態を（「どれほど納得できるのかについては、両者で大きな差があるけれども」MM265）それなりの仕方でも説明できてしまう。そうである以上、最善の説明からの推論を用いた議論だけでは、どちらの説が正しいのかを決することはできない。——これが、純粹知覚説の「直接的な確証」を得ることができないということでベルクソンが意味していたことである。以上が問い④（そもそもなぜこのような議論が純粹知覚説の肯定に必要なだとベルクソンが考えたのか）に対する解答である。

7. 實在論の推論

ではベルクソンはどのようにして「直接的な確証」を得られない純粹知覚説を肯定しようとしたのか。彼によると「記憶力の経験的研究は、これら二つのテーゼ〔純粹知覚説と實在論〕に裁定を下すことができるはずである。」（MM79）——どういうことか。まずベルクソンは實在論がどのようにして自身の主張を正当化しているのかを示す。

「知覚が特定の脳の活動にその必要十分な原因をもつとしたら、この脳の活動が、対象の不在のもと多かれ少なかれ完全なしかたで反復されることで、知覚内容を十分に生じさせることだろう。この場合、記憶力は、脳によって完璧に説明されることができよう。」（MM79）

すなわち、脳が知覚内容を（再）構成する機能をもつとすれば、記憶表象もその脳によって構成されていることは十分にありうる。實在論はこのような推測をしているとベルクソンは見ている。またベルクソンは、この實在論の考えに物質についての次のような積極的な規定が含意されていることも指摘している。

「ところで、唯物論は、物理的な要素の働きだけから、あらゆる機能を伴った意識を生じさせることができると思い込んでいるのであり、そうである以上、唯物論の

本質は「『物質には神秘的な力などなく、神経も脳も物理的な性質しかもたない』
というのとは」正反対のことを主張することにある。ここから、物質について知覚
された性質そのもの、感覚性質、ひいては感覚されている性質までもが、すでにし
て、知覚の作用のうちで脳内の現象の痕跡に付随して生じる燐光と同様のものでは
あるという考えに導かれる。」(MM75)

このように実在論は、脳や神経によって感覚性質が生み出されていると述べる際に、
「物質には意識的な性質を生み出す力がある」というテーゼを暗黙の裡に認めている。
この物質に対する見解から、「物質は、意識の基礎的な事実を生み出すことができるの
であり、もっとも高度な知性的事実をもうまく生み出すこととなろう」(MM75) と実
在論は推論するのである。

まとめるとベルクソンは唯物論の考え方を次のように定式化していると言える。

- A) 脳・神経といった物体が感覚性質を生み出すことができるならば、脳・神経には、
知性・思考に属するものを生み出す力もある。
- B) 脳・神経といった物体は感覚性質を生み出すことができる。
- C) したがって、脳・神経といった物質には、知性・思考に属するものを生み出す力も
ある。

8. 実在論論駁の概要

ではベルクソンは上のような推論を行なっている実在論に対してどのように対抗し
たのか。彼が述べるにはこのような実在論の考えを論駁する方法はたった一つしかない。

「実際には、唯物論を拒絶する一つの方法が、そして唯一の方法があろう。それは、
物質は徹頭徹尾現れるとおりに存在していると確証することであろう。そうすれば
私たちは、物質から、潜在的性質・隠れた力能のすべてを排し、そうして、精神現
象は、独立した実在をもつこととなろう。しかしそのためには、唯物論も唯心論も
一致して物質から引き剥がしてしまった性質を、物質の側に残しておかなくてはな
らない。そうした性質を、唯心論者の方は、精神がもつ表象へと仕立てあげ、唯物

論者のほうは、延長がたまたまとった装いとしか見ないわけだが。」(MM76)

ここでいう「物質は徹頭徹尾現れるとおりに存在している」とか「物質から、潜在的性質・隠れた力能のすべてを排」するといった主張は、意識に現れる性質を物質に内在的な性質として位置づけるということである。より具体的には、物質のもつ広がりはもちろんのこと、感覚性質までも、物質そのものがもつ性質とすることである。では、なぜこれが「唯物論を拒絶する唯一の方法」なのか。ベルクソンは次のように述べている。

「反対に、次のことが私たちに分かったと仮定しよう。すなわち、脳のメカニズムは、あるしかたで、記憶を条件づけているが、しかし、記憶の残存を確固たるものとするには不十分である、と。そして、脳のメカニズムは、思い出された知覚においては、私たちの表象よりはむしろ、私たちの行動に関係している、と。ここから次のように推論されよう。すなわち、脳のメカニズムは知覚そのものにおいても同じ役割を演じているのであり、その機能はといえば、現存する対象に対する私たちの行動の有効性を保証することに他ならない、と。私たちの第一の帰結〔＝脳は表象の道具ではなく、行動の道具である〕はかくして立証されよう。」

ここでベルクソンは、實在論の前提 (A) の対偶を用いて、實在論を論駁しようと試みている。具体的には、彼は、「脳や神経には知性や思考を生み出す機能がない」ということを示すことによって、「脳や神経は物質のもたない性質（感覚性質）を生み出せない」という推測を肯定しようとしている。脳が記憶を表象するに十分な機能をもたないとするれば、脳は知覚においても同様に知覚意識に与えられるような光景を作り出す機能をもたないと推察されるのである。——これが、ベルクソンがここで述べていることである。つまりベルクソンは、實在論の前提 (A) の後件を否定して、(A) の対偶によって、(A) の前件を否定するという道筋をとっている。

以上をまとめると次のようになろう。——ベルクソンは純粹知覚説を肯定したい。それが意味するのは、實在論の前提である (A) の前件を否定したいということである。しかし、先に述べたように、實在論も純粹知覚説も最善の説明からの推論においては同等の説明力をもっているため、實在論の主張はそれなりの説得力をもつ。そこで (A) の前件を「直接」斥けることをベルクソンはあきらめたのである。そのうえで、ベルクソンは、實在論が行なっている推論を明確化した。つまり、實在論は「脳や神経といっ

た物質は物質のもたない感覚性質を生み出す」ということから、「脳や神経には物質のもたない知性や思考も生み出す」と推測している。言い換えれば、唯物論は、「脳や神経といった物質が物質のもたない感覚性質を生み出すならば、脳や神経には物質のもたない知性や思考も生み出す」と前提している。そのことを見抜いたベルクソンは、この命題の後件「脳や神経には物質のもたない知性や思考も生み出す」を否定することによって、实在論を論駁できると考えた。したがって、問い③（(1~3)を通してベルクソンは何をしているのか(それは演繹的な推論か、最善の説明からの推論か、それとも…?)ということ)に対しては、ベルクソンの言う「推測」は、实在論の推論を引き受ける形で構成された推論であるという答えが与えられる。

9. 記憶と知覚の本性の差異？

以上の考察を踏まえて、改めて、本章冒頭で提示した引用箇所 MM80 を見てみよう。今回はその周辺部も引用しておこう。

「だがここでもまた、記憶の研究によって二つの仮説に裁定を下すことができよう。実際、第二の仮説〔＝实在論：対象の实在は脳や神経による構成物である〕においては、知覚と記憶どちらも自足した表象現象である以上、知覚と記憶のあいだには、強度の差異、より一般的に述べれば程度の差異しかないはずであろう。反対に、私たちに次のことが分かったと仮定しよう。すなわち、記憶と知覚のあいだには、たんなる程度の差異ではなく、根本的な本性の差異がある、と。この場合、記憶にはまったく实在しない何かを、言い換えれば、直観的に捉えられたある实在を、知覚の内に見出すような仮説〔＝純粹知覚説〕の方が正しいと推測されるはずだ。」

(MM79-80)

さて、石井は問い①（「記憶と知覚のあいだには本性の差異がある」という命題がどのような内実をもつのか）に対して、この命題が意味するのは「記憶が知覚者を行為へと促さないのに対して、知覚は知覚者を行為へと促す」ということだと答えていた。さて、これまでの議論を踏まえた場合、この命題は、「脳は感覚性質を生み出さない」という帰結を導くものでなければならないはずだ。しかし、「知覚が知覚者に行為を促す」

という主張は、そこから、脳の機能に関するテーゼや、ひいては、物質は広がりをもつだけなのか、それとも広がりのみならず感覚性質ももつのかという問いを決するものではない。というのは、知覚者を行為へと促すことだけならば、感覚性質をもたず広がりだけをもったものにもできるからだ。言い換えれば、「記憶が知覚者を行為へと促さないのに対して、知覚は知覚者を行為へと促す」というテーゼは、実在論と純粹知覚説のどちらが正しいのかを決するような内実をもつテーゼではない。したがって、石井の解釈は実在論への反論を提示しているベルクソンの議論の特徴づけとしては不十分なのである。

そして以上の議論を踏まえた場合、この「記憶と知覚のあいだには本性の差異がある」という命題は次の意味をもつテーゼでなければならないはずだ。すなわち、それは、「記憶は知性的・理性的な働きを生み出すことができるのに対して、脳や神経にはそのような働きを生み出す働きなどない」という意味である。このことがもっとも端的に表現されているのは「要約と結論」の次の箇所であろう。「記憶力は脳の機能とは別のものであり、知覚と記憶との間にあるのは、程度の差異ではなく、本性の差異である。」

(MM266) これこそベルクソンが「物質は必ず現れるとおりに存在している」とか「私たちは、物質から、潜在的性質・隠れた力能のすべてを排する」と述べていた際に意味していたことであり、「記憶と知覚のあいだには本性の差異がある」というテーゼの内実でなければならぬ。

10. ベルクソンの推論の定式化

さてここで冒頭において掲げた推測を思い出そう。

- (1) 記憶と知覚のあいだに本性の差異があるならば、直観的に捉えられた実在が知覚の内にはある。
- (2) 記憶と知覚のあいだには本性の差異がある。
- (3) したがって、直観的に捉えられた実在が知覚の内にはある

以上の考察を踏まえてベルクソンの議論を再構成すると次のようになる。

- (1) 脳や神経に物質のもたない性質を生み出す機能がないとすれば、物質は感覚性質をもつこととなる。
- (2) 脳や神経に物質のもたない性質を生み出す機能はない。
- (3) したがって、物質は感覚性質をもつ。

以上よりベルクソンの議論のポイントは(2)をいかにして肯定するのかということとなる。ちなみに(2)は次の推論によって肯定されている。——脳や神経が物質のもたない感覚性質を生み出さないならば、物質は感覚性質をもつこととなる。それに対して、脳や神経は物質のもたない感覚性質を生み出すならば、物質は感覚性質をもたないこととなる。ところで、实在論は次のような推測を行なっている。すなわち、脳や神経は物質のもたない感覚性質を生み出すのだから、脳や神経は物質のもたない思考や知性的性質も生み出しているはずだ。そこでベルクソンは、思考や知性的性質は、脳や神経によってではなく、記憶力によって生み出されていることを明らかにすることにした。この純粹記憶説の肯定によって、唯物論の推測を利用する形で、純粹知覚説の主張（「物質は感覚性質をもつ」）が肯定されることとなる。

つまり、形式的には、「脳や神経は物質のもたない思考や知性的働きを生み出せない」ということが肯定できれば、純粹知覚説が肯定できるようになっている。だからこそ「記憶力の問題が私たちの見解〔＝純粹知覚説〕において特権的な問題である」とベルクソンは述べたのである。

11. 結論——純粹知覚の肯定の方法論は何ではないか

ベルクソンはいかにして純粹知覚説を肯定しようとしているのか。——ここまでの考察から言えるのは、ベルクソンによる肯定の試みには、少なくとも、最善の説明からの推論と演繹的推論が含まれるということである。このことは、シュヴァリエの言うような「ベルクソンは譬喩の世界でいくつかの仮説について思索をめぐらす哲学者の類に属する」という印象のみならず、デルボスやブロの批判に対しても、ベルクソンの議論が（少なくとも部分的には）応答可能なものであることを意味する。ベルクソンの議論には、イマージュ概念と純粹知覚論の判明な区別に基づいた最善の説明からの推論や、实在論のアーギュメントをしっかりと吟味したうえで構成された演繹的な推論が含まれ

るのだから。

しかし、最善の説明からの推論と演繹的推論という特徴づけは、ベルクソンの議論の特徴づけとしては不十分であろう。言い換えれば、これら二つの特徴づけがベルクソンの議論の道筋の一部を構成していることは事実であるが、彼の議論の主たる道筋を成すものではない。なぜそう言えるのか。

まず端的に言えば、ベルクソンの方法が最善の説明からの推論や演繹的な推論であるという解釈は、ベルクソンが自身の方法論を述べていた箇所の意味を説明できない。今一度その箇所を見てみよう。

「それは、経験を探し求めてその源泉にまで赴くこと、あるいはむしろ、経験が私たちにとっての有用性の方向に向きを変えながらまさに人間的な経験となる、その決定的な転回点の向こう側に赴くことであろう。」(MM205)

少なくとも私には、ベルクソンの依拠した推論が最善の説明からの推論であるとか演繹的なものであるとかいう答えが、このベルクソンによる自身の方法の説明に対応するとは思えない。結局のところ、「人間的な経験の向こう側」とは、あるいは「経験の源泉」とは具体的にどのようなものなのか（それは単なる比喻ではないのか）、そして、仮にそのような源泉があるとして、なぜ・どのようにしてベルクソンはそこに到達したと言えるのか、といった疑問は何も解明されていない。

このことを踏まえて演繹的推論という特徴づけが不十分なのはなぜかを示そう。『物質と記憶』第一章の末尾を解釈してわかったことは、ここで提示されている推論が、实在論に対抗する議論になっているということである。しかし、ベルクソンの議論（『物質と記憶』第二章から第四章）は实在論という特定の説にのみ向けられて、この实在論を打倒することを中心にして立てられたものであろうか。そうではないだろう。ベルクソンは、「人間的な経験の向こう側に赴く」ことが自身の目指すところであると述べている。实在論の推論を定式化して、それを打倒することが、「人間的な経験の向こう側に赴く」ことだとは私には思えない。したがって、この意味で、このような实在論に向けられた推論の再構成という試みはベルクソンの論証の内実の解明にとってはきわめてささやかなことである。

また最善の説明からの推論という特徴づけが不十分なのはなぜか。それは、純粹知覚説か实在論かという二者択一を決するような内実を最善の説明からの推論がもたない

からである。このことはベルクソン自身が認めていることであり、ベルクソンはそのような単なる蓋然的な結論という地位を純粹知覚説に与えるだけで満足してはいない。

また、最善の説明からの推論において説明項の候補となる諸説は競合している必要がある。だから、競合している理論とはまったく異なる新説を持ち出して、その説明力の高さを好意的に評価するならば、その新説がなぜ他の仮説と競合しうるのかは少なくとも説明しなければならない。当該の議論においては、競合している仮説が實在論と觀念論、そして新説が純粹知覚説に相当する。つまり、ベルクソンは、純粹知覚説がなぜ他の二つの理論と競合しうるのかを説明する必要がある。

つまり、今のところ言えるのは、ベルクソンは純粹知覚説を肯定するために、最善の説明からの推論や演繹的推論をその一部とする何らの哲学的方法論を用いていたはずだ、ということに過ぎない。確かに、ある種の論点先取はこれで回避できるし、「ベルクソンは譬喩の世界でいくつかの仮説について思索をめぐらす哲学者の類に属するように思われる」といったベルクソンの議論の印象が誤っているといった見解も、これで部分的には斥けることができるはずだ。しかし、「人間的な経験の向こう側に赴く」とするベルクソンの議論を特徴づけようと思うと、これらの解答は不十分なもののなのである。

以上でベルクソンの哲学的方法の主たるものが何ではないのかが示された。この結論を踏まえて、続く第二章では、『物質と記憶』第三章の議論を分析することによって、ベルクソンの哲学的方法の積極的な規定を試みる。

第二章 現在主義の起源

ベルクソンは『物質と記憶』第三章において、「私の現在」という時間経験にかんする概念を提示している。本論文第二章では、この「私の現在」という概念の果たす役割を明確化することによって、ベルクソンの哲学的方法を解明したい。

「私の現在」という概念を通してベルクソンは、主観的な時間経験における現在を、幅をもたない「数学的な点」と捉える考え方を斥け、そこには常に一定の持続が伴っていると主張する。時間経験にかんするベルクソンのこの概念は、哲学者との関係では、W. ジェイムズの「見かけの現在」や E. フッサールの「生き生きとした現在」と、あるいは現代の時間経験にかんする所見との関係では、「延長モデル」や「把持モデル」といったものと比較・対照が試みられるなど、多くの可能性に開かれたものと見なされている¹⁸。

しかし、ベルクソンが「私の現在」という概念を『物質と記憶』第三章で導入した根本的な動機は何なのかという点、それについてはあまりはっきりと理解されていないのではないだろうか。こう述べると次のように言われるかもしれない。——彼には、主観的な経験の生き生きとしたあり方、連続的・流動的なあり方を描写しようという根本的な哲学的動機があった。前著『直接与件』のときから、あるいはベルクソンの全著作を通して、そうだったことは自明ではないか¹⁹。——だが、『物質と記憶』第三章にはある明確な目的がある。その一つが、現在において存在しているものだけが存在していると主張する「現在主義²⁰」を斥けて、過去の実在を肯定するというものである。そうである以上、「私の現在」を導入した動機は、この目的の達成との関連で語られるべきであろう。

ところで、経験が持続を有しており過去を含むという主張と、過去がそれ自体で客観的な実在性をもつという主張は、一見したところ、まったく別の主張であり、両主張は即座につ

¹⁸ . デイントン [2016] ; Dainton [2017].

¹⁹ 「ベルクソンは一連の著作を通じて、我々の経験の連続性を強調してきた。我々の経験のすべての部分は流れ、途切れたり中断したりすることがない」(デイントン [2016 : 220-1 頁])。

²⁰ この語はデイントン [2016] に由来する。

ながりをもつわけではない²¹。してみれば、時間経験に関する「私の現在」という概念は、過去の客観的实在性を肯定するうえでどのような役割を果たしているのか。これが本章の問いである²²。ベルクソン哲学全体に通底する動機を指摘したところで、この問いに対する答えとはなるまい。

私は以下の考察を通して、過去の実在性を肯定するという『物質と記憶』第三章の試みを、主に四つの局面から成るものとして再構成する。これによって、「私の現在」という概念がこの試みの中に占める正確な位置を示したい。論の構成は次の通りである。はじめに現在主義の内容を概観し（第一節）、次いで、ベルクソンの議論の主たる方針を確認する（第二節・

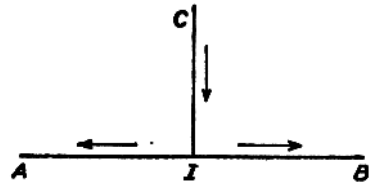
²¹ Worms [1997] は次のように述べている。「過去一般が意識の働きによって自らを保存することができるということは […]『意識によって実際に体験されている具体的な現在』について考察すると即座に確証される。実際、この具体的で生き生きとした現在はずでにして『その大部分が直接的な過去からなっている』。このように精神あるいは記憶力がその過去のすべてを即自的に保存することができるということを逆説的な仕方で証明しているのが、意識が知覚のもつ現在の内に過去を生み出しているということなのだ」(p. 155)。「時間の内に諸現象を縮約し、引き継ぐ記憶力がなければ、知覚は単なる現象のまたたきに過ぎないこととなろう。『[…] 現在はたんに自ら生成するものである。ここで過去と未来を分かち不可分の境界をあなたが意味しているとしたら、現在の瞬間などほとんど存在しないに等しい』。こういうわけで、意識は、過去が連続的に保存されているということを、知覚そのもののうちに明示している」(p. 156)。こうした Worms の解釈が提示している推論は、大まかに述べて、次のようなものであると言える。すなわち「主観的経験には過去が含まれる、したがって過去は実在する」というものである。Worms の解釈が提示しているこのような推論は、実のところ、ベルクソンが『物質と記憶』第三章で「私の現在」を導入することによって批判しようとした最たるものである。

²² Deleuze [1966] によれば、ベルクソンは「過去に一举に飛び込む」という主体の働きに、過去の実在性を確保するという役割を託している（このような Deleuze の解釈に従った研究として、藤田 [2010] と藤田 [2017] がある）。この Deleuze の議論については次の点を指摘しておきたい。すなわち、過去の客観的实在性が、そのような主観的な働きから見て取れるとするこの解釈は、主観的な経験のあり方から客観的な実在のあり方を推断するという、推論の飛躍に他ならない。本章末尾で示すように、このような推論は、ベルクソンが、「私の現在」という概念を導入することによってそのおかしさを明示しようとした最たるものである。ドゥルーズの解釈は、ベルクソンが過去の実在性を経験の条件として要請しているとするものであり (Kelly [2014] : pp. 17-22)、この解釈の帰結を本章のものと一つ一つ比較することはきわめて有益な作業であるが、紙幅の都合上、上述した、本章とのもっとも本質的な対立点に言及するにとどめる。

第三節)。そして、以上で確認された方針をもつ議論の流れに「私の現在」を位置づけることで（第四節・第五節）、この概念が過去の実在を肯定するという試みにおいていかなる役割を担っているのかを特定する（第六節）。以上の考察は、実在と経験の関係にかんするベルクソンの考え方を浮かび上がらせることにもつながる。本章末尾において私たちは、経験から実在へと至るためにベルクソンが採用している特有の方法を理解することとなろう（第七節）。ではさっそく、ベルクソンの論敵となる現在主義の内実を確認することから始めよう。

1. 現在主義

ベルクソンが導入した図を用いて説明しよう。右図の線分 AB は、空間内に現存している物理的対象を示している。それに対して、線分 CI は、過去に知覚したものの記憶を示している。また点 I は、現に意識に与えられているものを表わしている。したがって、線分 AB と線分 CI（両者から I を差し引いたもの）を別の言い方で特徴づけると、前者は、今は知覚されていないがその場に行けば知覚される物理的対象を、後者は、思い出されていない過去つまり記憶²³を表わしているということになる（MM157-9）。



本論文で「現在主義」と呼ぶのは、線分 AB と線分 CI の実在性について対照的な考え方をとる形而上学的立場である。線分 AB から見ていこう。現在主義は、線分 AB によって表現されている物理的対象すべての実在を認める。例えば、私が今いる部屋の向こうには隣の部屋があるし、その隣の部屋の窓の向こうには通りや街があるといった具合に、線分 AB 上に物的実在が広がっていることを認める。つまり現在主義とは、物的なものについては、知覚されていない対象の実在を認める素朴な実在論的立場であるといえよう。

²³ ベルクソンは、「過去の記憶」と「過去の出来事」を同一視している。彼は、過去＝記憶のもつ性質は、現存する事物である脳によっては創発されえないと考えており、過去＝記憶が脳に依存しないでそれ自体で存在していると想定しなかった場合、過去の出来事の同一性が保存されない（という困難に陥る）と考えている。この「同一視」が何を意味するか、正当なものなのかについての考察は、「私の現在」の議論上の役割を特定するという本章の主題からは離れて論を構成しなければならないため、他日に譲らざるを得ない。

では線分 CI についてはどうか。現在主義によれば、線分 CI のうちで実在しているといえるものは点 I のみである。すなわち、過去の記憶については、現に意識に現われているものにしか実在性を認めないのである。現在主義とは、心的なものについては、意識に現前しているものにのみ実在性を認める立場である (MM157-9)。

まとめよう。現在主義とは、線分 AB 上にある物理的対象については「意識とは無関係の客観的な諸実在を認め」、線分 CI 上の記憶、過去には「客観的な実在性はない」と主張する形而上学的立場である (MM158)。この意味で、現在主義においては、現在は「実在しているもの」と見なされ、過去は「実在していないもの」と見なされることとなる。つまり、現在主義とは、現在において存在しているものだけが存在しているとする立場である。この現在主義をベルクソンがいかにして斥けたのかを見ることが私たちの以下で目指すところである。この試みは、大きく分けて、四つの局面に分けることができる。一つ一つ見ていこう。

2. 起源の特定

現在主義を斥ける第一の局面とは、現在主義を帰結する諸要素を特定するというものである。そのような要素として彼は二つのものを見出した。

一つめは、意識の目的にかんする理論的信念である。ベルクソンによれば、現在主義を主張する人々は、意識の目的は「純粋な認識」であるとか、「本質的には思弁の方に向けられている」と考えている (MM157)。言い換えれば、意識の目的とは、対象をできるだけ明晰判明に主体に与えることだとされるのである。この場合、何かが忘却されることや、認識が不分明なものであることは、端的に、認識の失敗として位置づけられるだろう。とすると、意識がそのような失敗を犯すメカニズムをわざわざもっていて、記憶をあえて忘却したり、知覚をあえて不分明にすると想定するのは、不可解なことと思われる。ベルクソンによると、以上のように想定した場合、次の帰結が導かれる。「すなわち、事実上、意識が所有しているものだけが、権利上、意識に与っており、意識の領域においては、実在的なものはすべて顕在的なものなのだ、と」(MM157)。言い換えれば、はっきりと意識に現われている記憶だけが、実在しているものと見なされ、思い出されていないが保存されている記憶の居場所が失われる。現在主義の起源の一つめは、この「意識の思弁化」とでも呼ぶべき事態である。

二つめは、実在性の条件の捉え方にかんするものである。ベルクソンによれば、私たちは何かが実在しているというとき、二つの条件をもとにしている。(1) 意識への現前と、(2) 現

前しているものと、先行するものや後続するものとの因果的ないし論理的な結合である (MM163)。現在主義者は、これら二つの条件を完全に切り離し、心的状態には (1) だけを、物理的対象には (2) だけを割り当てる。その理由は、私たちの知性が「截然とした区別を打ち立てることを役割としている」ために、「二つの要素を切り離して、根本的に異なる二つの実在の仕方を、一方では外界にある対象に割り当て、他方では内的な状態に割り当てることを好む」(MM164) からである²⁴。本章の考察にとって重要な (1) についてだけ具体化すれば、「意識への現前」だけを心的状態の実在性の条件と考え、そのために、意識に現前していない心的状態が実在として認められる余地がなくなってしまう。つまり、現在主義の二つめの起源は、截然とした区分を設けようとする知性による、実在性の二条件の分離である。

以上のように、現在主義の起源となる二つの要素を指摘することが、現在主義の棄却の第一の局面である。

3. 起源の転換

次に、ベルクソンは、これまで指摘してきた現在主義の起源となる要素を別のものに転換し、そこからいくつかの存在論的・認識論的な帰結を導いていく。この起源の転換が、現在主義の棄却の二つめの局面に当たる。

3-1. 転換①

現在主義は、意識の目的を「思弁的」なもの、「純粋な認識」だと見なしている。そのせいで、過去の記憶の保存という考えが斥けられてしまっているのだった。まずはこの点について転換がなされねばならない。そこでベルクソンは「[...] 意識にそれ本来の役割を回復させよう」と提案する。彼によれば、知覚などの認識の目的とは、行為にとって有益な情報をもたらすことである。つまり、ここでいう意識の「本来の役割」とは、サバイバルに役立つ情報を与えることである。そして彼によれば、この場合、対象の認識をあえて不分明なも

²⁴ 「しかし私たちは、事態をこのように表現することに多大なる労苦を覚える。その理由は、空間内に同時に配置されている対象の系列と、時間内で次々と展開されている諸状態の系列とのあいだにある差異を目立たせ、反対に、類似点を目立たなくするという習慣を、私たちが身につけているからである」(MM161)。

のとすることに一定の有用性が認められる。具体的には、何かを忘却することや、認識をあえて錯雑としたものととどめておくことが、生存にとって必要不可欠なものとされるのである。というのは、仮に私たちが記憶した内容のすべてを意識にのぼらせ、知覚物の隅々に至るまで見て取っているとした場合、そのあまりの情報量の多さゆえ、喫緊の事態にうまく対応できないからである。例えば、ネコ（捕食者）を前にしたネズミ（被食者）が、過去の記憶に思いを馳せ、さらには、環境の細部に至るまで見て取っていたら、そのネズミにとってネコの攻撃を回避するという行為を上手く遂行することは困難になっていくであろう。このようにベルクソンは、サバイバルに有利な行為をなすためには、記憶の適度な忘却と知覚の適度な不分明さ（記憶と知覚を一部の対象に絞り込むこと）が必要だとした。

以上のことを想定した場合、現在と過去にかんする現在主義の考えも書き換えられざるを得ず、ひいては、「いったん知覚された過去が消えてしまったという理由はもはやない[…]」(MM156-7)。ベルクソンは次のように述べる。「もし意識が現在の特徴をなすメルクマールに他ならぬとすれば、言い換えれば、現実的に体験されているもの (*l'actuellement vécu*)、さらに言い換えれば、作用しているもの (*l'agissant*) のメルクマールに他ならないとすれば、この場合、もはや作用しないものは、意識に与ることをやめたとしても、何らかの仕方で存在することもやめなければならないわけでは必ずしもない」(MM156)。つまりここでベルクソンは、「現在＝実在するもの」「過去＝実在しないもの」と見なす現在主義の考えを変更し、「現在＝作用しているもの」「過去＝作用していないもの」と見なすことを提案しているのである。言い換えれば、現在を「効力を発揮しているもの」、過去（の記憶）を「効力を失っているもの」と見なすことが提案されているのだ。そして、効力を失っていることには、存在しなくなったことは必ずしも含意されない。このようにして、過去の記憶に実在の余地が確保されることとなる。

3-2. 転換②

次に知性による截然とした区別を転換しなければならない。つまり、実在性の二条件——(1) 意識への現前、(2) 現前しているものと先行するもの・後続するものとの因果的ないし論理的な結合——のうち、前者を内的状態だけに、後者を外的事物だけに割り当てるのをやめて、二条件を内的状態と外的事物の両方に一定程度認めることが提案されるのだ。このような条件のもと内的状態と外的事物を眺めてみると、各々、以下のような特徴を認めることができる。

外的事物においては、(2) 結合の方は完全である。というのは、物質世界は必然的な法則に従っているように思われるからである。それに対して、(1) 意識への現前は不完全（部分的）である。なぜなら、私たちは物質世界の全体を一挙に見渡すことなどできないし、たった一つの事物であってもその事物は特定のパースペクティブを伴って現われるからである。

内的状態においては、(1) 意識への現前は完全に満たされている。「〔内的状態の〕意識への現前は完全なものであり、現実的な心理的状态は〔…〕その内実のすべてを私たちに与えている²⁵」(MM163)。それに対して、(2) 結合の方は不完全である。ここで、結合がまったくないという、知性による截然とした区別に従ったことになるが、ベルクソンは、「まったくない」のではなく、「部分的には満たされている」とする (MM163)。内的状態、心的状態は、必然的な法則に完全に支配されているわけではないが、かといって、まったくもって結合を欠いてしまっているわけではないのである。

以上のような具合に実在性の条件を外的事物と内的状態に割り当てた場合、過去の記憶にも、外界の事物と同様に実在性が認められるとベルクソンは考える。彼によれば、私たちは、物質世界には必然的な秩序があると信じており、この信念が物質世界の実在性を信じさせている。ベルクソンはこう言う。「まったくもって意識の外にある対象〔＝線分 AB〕が実在すると私が述べる際に、いわば私が実体化しているものが、この必然性である」。ベルクソンはその「実体化」のプロセスを「鎖」の比喻で説明している。ある対象を知覚した後にはいつも特定の対象が現われるなど、対象のあり方に一定の秩序が見出されると、密接に結合した「鎖のような様相が諸対象に付与される」。すると、現に知覚されている対象は、そうした鎖のうちの輪の一つに過ぎないとされ、鎖を構成している他の輪も実在しているであ

²⁵ 「あらゆる意識状態は、顕在的ではないにせよ、私たちの性格のうちに姿を見せている」(MM164)。「私たちの過去の心理的生は、〔…〕全体として私たちの現在の状態を条件づけている。それはまた、いかなる過去の状態も性格のうちにはっきりと顕現しているわけではないが、全体として私たちの性格のうちに現われている」(MM165)。「〔…〕より詳細に見てみると、次のことが見て取れるだろう。すなわち、私たちの記憶も同じ種類の鎖を形作っていること、そして、私たちの性格は、私たちの決意のすべてに常に現前しており、私たちの過去の状態すべての現実的な総合になっているということである。私たちのもつ先立つ心理的生は、このような凝縮した形においては、外的世界以上に私たちにとって実在してさえいる。私たちは、外界のほんの小さな部分しか知覚していないが、それとは反対に、私たちが体験してきた経験の全体を利用しているのである」(MM162)。この主張をベルクソンがいかにして正当化しようとしているのかということについては本章の主題から離れて考察する必要がある。

ろうと思われる。こうして、目の知覚されている地平の外部にも、また別の地平があることが受け入れられていく (MM161)。

同様のことが内的状態についてもいえる。上のように実在性の二条件が割り振られるならば、内的状態にも、外的事物と同じ様な鎖の様相が、ひいては実在性が認められるとベルクソンは述べる。「[...] 私たちの記憶も〔物質世界と〕同じ種類の鎖を形作っている」(MM162)。「[実在性の] 二つの条件はつながりあうことで、過去の心理状態の各々に、無意識ではあるものの現実存在していることを保証している」(MM164-5)。つまり、内的状態にも、ゆるやかではあるものの、「鎖の様相」が見出され、そうした思い出されていない記憶にも鎖を構成するものとしての実在性が付与されていくのである。かくして、過去の記憶に実在性が付与される余地がまた一つ認められる。

3-3. 転換を正当化するもの

以上のようにしてベルクソンは、現在／過去についての考え方、ならびに、実在性の条件の割り振りを変更する。それが恣意的でないことは、現在主義の起源となる要素を特定し、それを別のものに転換するという所作によって保証されている。上述のベルクソンによる現在／過去についての考え方、ならびに、実在性の条件の割り振りの変更は、たんに自分の議論にとって都合がいいようになされたわけではない。現在主義の源泉となる要素を見て取り、そこに狙いを定め、それらを別のものに転換することで、過去の実在性に変化をもたらすという戦略がとられているのだ。

このような流れの議論に、「私の現在」という概念はどのように貢献しているだろうか。次にこの「私の現在」について見ていくことで、現在主義の棄却の第三・第四の局面を見ていこう。

4. 私の現在

ベルクソンによると現在には二種類ある。一つめは、それ以上分割することのできない「数学的な点」「理念的な瞬間」としての現在である。これは、ただ思い描かれるだけの現在であり、言い換えれば、私たちが「体験する現在」ではない。二つめの「現在」とは、この私たちが体験する現在である。それは常に一定の持続を占めており、「私の過去にも未来

にも同時に蚕食している」。実際いかなる知覚内容ならびに感覚であっても、幾分かの時間幅を伴って私に現われている。例えば、私が光を知覚しているとき、私の網膜が受け取っているのは、一定の波長を備えた無数の振動であり、その最初の振動と最後の振動は無数に分割できる間隔をもつ。その意味で、ほんの一瞬の知覚でさえも、無数の思い出された要素から成るといえる。これが「過去に蚕食している」という意味である。さらに現に与えられている知覚内容には、未来の決定へと向かう「傾き」がある。例えば、何かを見たり聞いたりする際に、私たちは次にどのような物や音が現われるのかとか、その現われてきたものに対してどのように反応するかということも含めて、対象を知覚している。これが「未来に蚕食している」という意味である (MM152-3)。

この「私の現在」が生じるには、「私」という主体による「実在」への介入が必要である。ベルクソンによれば、実在そのものとしての世界は連続的・流動的なものである。この連続体・流動体を、身体のなす知覚作用によって切断し固定することによって、「私の現在」が形成されるのである。それは、ある特定の時空間上に現われた身体についての意識であり、「一定の点に位置づけられる」というその性質ゆえに、たった一つの、他ではありえなかったものという様相をもって私に現われる²⁶。この「私の現在」のもつ様相を、ベルクソンは「現実的」「現実性」という語を用いて表現している。「私たちの現在の現実性 (l'actualité de notre présent) は、その〔＝身体の〕現実的な状態 (son état actuel) に存する」(MM154)。この「私の現在」という時間経験の実相を析出してくる作業が、現在主義の棄却の第三の局面に当たる。

さて、現実性 (actualité) と実在 (性) (réalité) との関係については、ベルクソンの次の発言に着目すべきである。「〔過去の実在を受け入れ難く感ずる際の〕根本的な幻想は、流れている持続そのものに対して、私たちが作り出した瞬間的な切断面の形式を移し及ぼすことに存する」(MM166)。ここでいう「瞬間的な切断面」とは、知覚によって作り出され、ひいては私たちに「現実性」を伴って与えられる世界の現われのことである。そして、この切断面のあり方を物質世界にそのまま投影して、実在を捉えてしまうがゆえに、言い換えれば、

²⁶ 「〔…〕私の現在とは私が私の身体についてもつ意識からなる。私の身体は、空間に広がっているものであり、感覚を体感していると同時に運動してもいる。感覚と運動はこの延長のうちの一定の諸点 (des points déterminés) に位置づけられるのだから、ある任意の瞬間にありうる感覚と運動のシステムはたった一つである。だからこそ私の現在は、絶対的に決定されたものとして、また私の過去と対照を成すものとして、私に現われるのである」(MM153)。

「私の現在」の観点から実在を捉えてしまうがゆえに、実在そのもののあり方が見誤られるというわけだ。では、「私の現在」はどのようにして実在にかんする誤った考え方、要は、現在主義を導くのか。この過程を追うことが、現在主義の棄却の第四の局面である。次にこの局面をベルクソンの叙述にしたがって見ていこう。

5. 「私の現在」からの現在主義の成立

まずは、線分 AB のすべてに実在性が認められる過程を、次に、線分 CI のうち I にしか実在性が認められなくなる過程を見ていこう。

5-1. 未来の図式

線分 AB から見ていこう。先に述べたように、「私の現在」は、未来への傾きをもつ。ベルクソンはこのことを、私たちは「直近の未来の図式」をもちいて世界を知覚している、とも表現する。「未来の図式」とは、これからいかなる行為をなすことが有益かなどを指し示す、いわば行為の指針である。この未来の図式によって、空間内の知覚されていない部分も示される。例えば、教室のドアを知覚することは、知覚主体にとって、たんにそのドアを知覚するというだけの経験ではない。その知覚内容には、ドアをいかにして開閉するのかという一定の行為への誘引が含まれているし、また、そのドアの向こうに隣の部屋があること、そして隣の部屋の向こうには建物の外部があることといった具合に、知覚された地平の外部があることも示されている（そうでなければドアを開けるという行為が意味をなさないだろう²⁷）。かくして、知覚されてはいないが実在している外部地平（線分 AB の実在）が了解されていくというわけだ²⁸ (MM160)。

5-2. 行動の邪魔になるものは無視

次に線分 CI のうち点 I 以外に実在性が認められなくなる過程を見ていこう。こちらは二つからなるものとして整理できる。

²⁷ 石井 [2001: 31]。

²⁸ Deleuze [1983: 88-90] はベルクソンの知覚論を、現象学の志向性概念と対比させつつ説明している。だが実際には、ベルクソンにとっても、知覚は、現出を突破して現出者へと超越していく作用をもつということが、未来の図式にかんする議論からは見て取れる。

まずは一つめ。上述のベルクソンの認識論からすれば、思い出されていない記憶が思い出されなかった理由は、認識主体にとってそれらの記憶が目下の行為を有益に成し遂げるのに貢献しないものだったからである。すなわち、認識主体にとっては、「過去としての私たちの記憶というのは、重荷に相当するもの、私たち自らが引きずっていて、邪魔ものとして厄介払いしたくなるようなものに当たる」。このような「邪魔もの」となる過去の記憶を切り捨てることによって、「私の現在」は生じる。ところで、このような不必要なものにまで一々思いを馳せていたのでは、私たちは生存競争で勝ち残ることはできない。そのため、それに類する余計な記憶は消失してしまったと想定するほうが（生存競争に生き残るためには）望ましい。かくして、現に意識にのぼっているものだけが実在していると考えるように私たちは向かう。(MM160-1)

5-3. 中間にある過去を飛ばして意識しない

次に二つめ。私たちは行為を遂行する際に常に自らの身体をもって空間内で行為を遂行する。その際、例えば、3メートル先にある窓を開けるには、その3メートルの距離を、まずは1メートル詰め、次に2メートル詰め、最後に3メートルに到達するといった具合に、少しずつ詰める必要がある。より一般化して述べれば、身体的行為を遂行するには空間内の中間地点を一つ一つ踏破していく必要がある。それに対して、記憶においては、中間地点を踏破する必要がない。例えば、三日前の出来事を思い出す際に、まずは一日前を思い出し、次に二日前にまで遡り、そしてとうとう三日前に至るといったことはない。そうではなく、私たちは、三日前の当該の出来事に一挙に到達する。こうすることで目下必要な記憶を即座に手にすることが、効率よく行為を成し遂げるという観点からは必要不可欠である。ところが、「このように意識が一飛びでそこに移動するため、過去の間部分はずべて意識に捉えられないことがない」。こうして、線分 CI のうち点 I 以外には実在性が付与されなくなってしまう。言い換えれば、思い出されていないが保存されている過去の記憶というものが認められなくなり、むしろ、そうした記憶は完全に消失してしまったと思われるようになる(MM162-3)。

以上のようにして現在主義が打ち立てられる。

6. 世界を見ることを学び直す

さて、これまでの考察から導かれるいくつかの帰結を確認しておこう。その後に、本章冒頭に掲げた問いに答えたい。

まず指摘しておきたいのは、ベルクソンにとって現在主義と過去实在論との対決は、アンチノミーではない、言い換えれば、互いにもっともらしい二つの説の対決などではない、ということである。というのは、現在主義とは、私たちが自らの経験の本性に則って形而上学を打ち立てた場合に、十中八九正当化されるものだからだ。つまり、一方で、「私の現在」における直接的な知覚経験を基盤とした現実性の面から現在主義のもっともらしさが実感を伴うものとして打ち立てられるのみならず、他方で、理論的な信念などといった要素がそのもっともらしさをさらに補強する。そして、過去实在論は、それとは逆に、ますますもっともらしさを奪われていく²⁹。つまり、ベルクソンは、きわめてもっともらしい説（現在主義）と、きわめてもっともらしくない説（過去实在論）の対決、そして後者の擁護という困難な戦いを強いられている³⁰。

²⁹ 「過去全体が保存されているということを認めるのに私たちが反感を覚えるのは、私たちの心理的生活が向かう方向そのものに由来する」(MM167)。「空間内にある見て取られていない対象と、時間内にある無意識的な記憶をめぐって、私たちは、根本的に異なる二つの实在のあり方にかかわっているわけではない。しかし、行為の要請はそれぞれにおいて正反対なものとなっているのだ」(MM163)。

³⁰ ベルクソンは『思考と動き』の中で次のように述べている。「哲学者はいつも忍耐強いわけではない。言語のなかに貯蔵された概念に頼るほうがよほど簡単なのだ。そうした概念は知性の必要に応じてつくられているものだからだ。行動のために便利な線にそって切り抜かれた实在に対応しているからだ。多くの場合、そうした概念は实在から引き出せる利益に基づいて対象と事実を分配し、同じ欲求にかんするものをすべて同じ知的区分のなかに投げ入れる。異なる知覚に同一の反応をするときその対象を「同じ類」であるとし、反応の方向が逆になるとその対象を「対立する類」に区別するのだ。そうして得られた一般性の中に帰着するものは、定義によって明解であるとされ、そこに還元されないものは不分明であるとされる。〔ベルクソン的な意味での〕直観的な視点が哲学論争において驚くほど劣勢なのはこうして説明される。〔…〕科学と、言語と、常識と、知性の全体が、彼〔＝直観の哲

さて、このような不利な戦いを制するには、もはや、新たな世界観を提示してその利点を示したり、対立仮説の困難を指摘するだけでは事足りない³¹。従来の世界の見方を露にし、その見方を転換してしまうことによって、「世界を見ることを学び直すこと³²」が必要なのだ。もちろん、ここでいう「従来の世界の見方」とは、「私の現在」における切断面のあり方を投影して世界を眺めることに他ならない。つまり、「私の現在」という時間経験にかんする概念は、現在主義の起源の一つと位置づけられる。

以上より、本章冒頭に掲げた問い（時間経験に関する「私の現在」という概念は、過去の客観的実在性を肯定するうえでどのような役割を果たしているのか？）には次の答えが与えられるだろう。ベルクソンは、「私の現在」という時間経験の実相を、（現在主義の肯定へと向かう）従来の世界の見方として位置づけることによって、そのような見方が転換される契機とした。これが、「私の現在」の導入が、過去の実在を肯定することにつながるとベルクソンが考えた理由である。

学の見解を否定する論者]のために役に立っている。直観的な哲学を批判するのはあまりに容易である。しかもその批判が歓迎されるのは火を見るよりも明らかである。そのために初心者はいつでもそうした批判に誘惑される」(PM32-3)。

³¹ ベルクソンが現在主義に向ける批判が皆無なわけではない。記憶とは、弱い状態の感覚（表面化していない物理的状態）であり、一方から他方への移行は脳内の物理的活性の強弱の変化であるとする現在主義の考えに、彼は二つの批判を向けている。一つめは、記憶が強度を高め感覚になるという事例に推論の飛躍を指摘するものである (MM150-1)。二つめは、感覚と記憶の差異はつねに直観的に認められていることを指摘することで、現在主義の主張に含まれる、感覚が弱められることでそれが記憶と取り違えられるという事例が、直観に反していることを指摘するものである (MM148; 151)。ベルクソンが『物質と記憶』第三章において、現在主義に指摘した困難は、これら二つでほぼ尽きている。私が見るに、ベルクソンは、論敵の困難と自説の利点を指摘・比較するという哲学的議論において一般に用いられる所作だけでは、過去の実在を肯定するには不十分だと考えていた。その理由は、先に示したように、現在主義と過去実在論の対決がアンチノミーではないことにある。この敗色濃厚の自覚が、過去実在論の肯定に際して「私の現在」を彼に導入させた動機であるといえよう。

³² Merleau-Ponty (1967: XVI).

7. 実在と経験——結論に代えて

最後に、これまでの考察から引き出せる、実在と経験にかんするベルクソンの考え方についていくつかの帰結を示そう。

まず、ベルクソンにとっての実在とは、直接的な知覚経験・感覚経験によっては捉え難いものである。知覚内容とは、つねにすでに、物質世界の可能的知覚と、過去の記憶の多くを放棄した結果（「切断面」）として、私たちに与えられている。こうして切り取られてきた経験の断片のあり方を世界にも投影して実在のさまざまな性質について推測し判断しようとするとき、私たちは、有益な行為を成し遂げようとする知覚の本性や、そのような行為をなすべく物事を截然と切り分ける知性の本性に従うことで、実在についての誤った見解（現在主義）に与してしまうことを運命づけられている。この意味で、ベルクソンにとって、直接的な経験というのは、実在にかんする誤謬の源泉に他ならない。

しかし、ベルクソンは、以上のことを承知した上で、実在に到達する可能性を何とか確保しようとする。もちろんベルクソンは、明晰判明に与えられている与件をひたすら分析し、ただただ推論を重ねていくことで、実在の真の姿に到達できるとは考えていない。というのは、たとえ明晰判明に現われているものであっても、すでに知覚作用にさらされた物質世界の切断面である以上は、そうした見え方を実在に投影するわけにはいかないし、先に述べたように、私たちの知覚や知性には誤謬を招く傾向が内在しているからだ。むしろベルクソンが向かうのは、誤った実在概念を導き出してくる病巣を特定することである。具体的には、私たちを誤りへと導く要因を経験の内部から見て取り、さらには、そこからいかにして私たちが誤るに至るのかを現象に即して解明することで、現在主義がもっともらしさを伴って与えられるに至る歴史を遡ることである。そうした病巣を特定し、取り除いてしまうという所作それ自体を通して、実在の真の姿が立ち現れてくる。つまり、ベルクソンにとっては、対立仮説へと至る道筋を析出する、現象学的な仮象論が、実在へのアプローチなのである。私が先に（メルロ＝ポンティを引きつつ）述べた、「世界を見ることを学び直す」とは、この実在への「現象学的仮象論」のアプローチに他ならない。

以上が、「私の現在」という概念をめぐるベルクソンの考察から見て取れる、実在と経験

の関係にかんする彼の考え方である³³。

³³ ベルクソンの「反知性主義」(Russel [1945: chap. XXVIII]) というものがありうるとすれば、それは、「誤謬の源泉」としての知性がアプリオリに抱えた實在に到達する無能力をめぐる呼び名となろう。だがこれまで見てきたように、ベルクソンは、経験の源泉をたどるという所作を厳密に行なえば、知性のもつそのアプリオリな無能力を解消し、實在に到達できる(實在を知解できる)とも考えていた。この点ではベルクソンは知性主義者とも言える。

第三章：意識の諸平面の理論におけるベルクソンの哲学的方法 ——一般観念論をめぐって——

本論文第三章では、前の章とはまた別の視点から、ベルクソンの哲学的方法について解明したい。それは、『物質と記憶』第三章の「意識の諸平面」の理論についての考察である。

まずは、意識の諸平面の理論が答えようとしている問題（一般観念論）を示そう。——目の前に、赤いボールが三つあるとする。三つのボールは、いずれもが同じように赤くて、丸い。のみならず、同じような重さ・質感をしている。そして、これら三つのボールについて「これらは同じボールである」と言うことができる。しかし、これらのボールは、数的には別々のものである。それにもかかわらず、これらのボールが「同じボール」であると言えるのはなぜか。その理由は、それらすべてが共有している同一の性質（赤い、丸いなど）があるからである。ここで赤いとか丸いと言われているものを「一般観念」と呼ぼう。つまり、一般観念とは、複数の個物によって共有されることで、それらの質的な共通性の根拠となる観念である³⁴。ところで、おそらく人間は一般観念を、何らかのプロセスを経て、どこかのタイミングで獲得する。このプロセスを問う議論が「一般観念論」であり、これまで多くの哲学者がこの問いに応答してきた。

ベルクソンもまた、『物質と記憶』第三章において、独自の一般観念論を提示している。後に詳しく見るが、彼の一般観念論は、(1) 類似の感情の観取、(2) 身体的習慣の構築、(3) 意識の諸平面における意識の運動という三つの段階からなる。本章の目的は、この三つめに当たる「意識の諸平面」の理論が、ベルクソンの一般観念論においてどのような役割を果たしているのか、そして、どのようにして根拠づけられているのかを明らかにすることである。「意識の諸平面」の理論について、ベルクソンは、それが『物質と記憶』の「指導的な理念の一つ」であり、「私たちの仕事の出発点として役立ったものである」（MM7）と述べている。つまり、「意識の諸平面」の理論

³⁴ 鈴木他 [2014: pp. 140-4] を参考になっている。

とは、『物質と記憶』における探究全般を導くアイデアであり、一般観念論におけるその正当性を問うことは、『物質と記憶』の是非を根本から問うことに等しい。

ところが、先行研究を見る限り³⁵、この「意識の諸平面」の理論は根拠のない余計な理論に見える。先行研究によれば、ベルクソンの一般観念論は次のように正当化されている。——ベルクソンは、一般観念の形成過程を説明する二つの理論（概念論と唯名論）に「循環 *cercle*³⁶」があると指摘し、この「循環」を「回避すべく」（木山 [2013 : pp. 200-1]）さまざまな意識の働き（上記 1~3）を導入した。そして、自身の説明には「循環」が見出されないことを理由に、自身の理論を正当化している。——しかし、この解釈においては、「意識の諸平面」の理論が、『物質と記憶』において「一見派生的な仕方では提示されている」に過ぎないように見える (Worms [1997b : p. 86])。というのは、後に見るように、「意識の諸平面」の理論は概念論と唯名論の循環の回避に貢献していない。これが、「意識の諸平面」の理論が余計に見える理由である。

さらに、この場合、「意識の諸平面」の理論は根拠のないものに見える。本論文では詳述できないが、ベルクソンの一般観念論における過程 1・2 は、『物質と記憶』の第一・二章において実証的成果をも用いつつ根拠づけられており、また第三章では、循環の回避を理由に根拠づけられてもいる。それに対して、3 の「意識の諸平面」の理論は、1・2 にあるような正当化が行なわれているようには見えず、しかもそれが循環の回避に貢献していない以上、循環の回避を引き合いに出して「意識の諸平面」の理論を根拠づけることもできない。

このような問題を解決すべく、Worms [1997b] は『物質と記憶』の他の重要な説明（言語の聴取とその理解、記憶の局在説批判、純粹知覚説、持続のリズムの理論など）における「意識の諸平面」の理論の役割を明らかにしている。また、木山 [2014] は、「意識の諸平面」の理論の背景にある心理学的理論を引き合いに出して、「意識の諸平面」の理論の説明を補完することを試みている。だが Worms と木山の試みにおいては、まさしく『物質と記憶』第三章における一般観念の形成過程をめぐるベルクソンの議論に「意識の諸平面」の理論が果たしている役割が何であるのかが明らかになることはなく、ひいては、どのようにして「意識の諸平面」の理論が根拠づけら

³⁵ Worms [1997a] ; Theau [1968 : pp. 294-333] ; 木山 [2013].

³⁶ « *cercle* » の訳語には「循環」と「円」という二つを採用している。いずれの語を用いるにせよ、訳語の後に « *cercle* » と付すことで、どれがこの語に当たるのかを示した。

れているのかも不明なままである。そして、ベルクソンが述べるように、『物質と記憶』全体がこの「意識の諸平面」の理論に導かれている以上、このような事態を帰結する解釈においては、この書物の企てすべてが根拠のない余計な理論に基づいていることとなってしまうだろう。

私が見るに、この問題は、概念論と唯名論の「循環 *cercle*」としてベルクソンが述べているものの内実が正確に把握されていないことに由来する。このことを明らかにすべく、以下のように論を進める。まず（第一節）概念論と唯名論について概観する。次いで（第二節）両者の循環にかんする Worms [1997a] の解釈を見ていく。そのうえで（第三節）概念論と唯名論の循環の内実を改めて規定する。ここから（第四節）ベルクソンの一般観念論について概観したのちに、（第五・六節）ベルクソンによる「意識の諸平面」の理論の正当化の内実と、「意識の諸平面」の理論が彼の議論の中で果たしている役割を明らかにしたい。

1. 概念論と唯名論

概念論と唯名論の内実を確認することからはじめよう。概念論から見ていこう。例えば、[1] 特定のリンゴ *a* が知覚されるとする。[2] このリンゴ *a* から、赤いとか丸いなどの性質が「抽出 *abstraction*」(MM175) される。ここで抽出されるものは「個体的な性質 *qualité individuelle*」——まさにこのリンゴだけがもつ赤さや丸さ——であり、現代の用語でいう「トロープ」である。他の特定の赤い個物（他のリンゴやポスト）や丸い個物（例えばボール）などが知覚された際にもトロープが抽出されていく。[3] かくして抽出されたトロープは一つの束を成し、トロープから成る類似性グループ（以下「トロープグループ」）が形成される。このトロープグループこそ概念論が一般観念と呼ぶものである。(MM174-5)

次に唯名論。[1] リンゴ *a* が知覚されるとする。[2] このとき、リンゴ *a* のもつ特定の性質が「赤」とか「丸」といった名前で指示される。[3] そして、「赤／丸」によって指示される性質をもつ無数の対象（リンゴ *b, c...*、ポスト *a*、血 *a...*／リンゴ *b*、ボール *a*、惑星 *a...*）が「習慣 *habitude*」といった能力によって呼び起こされる。この [3] の働きをベルクソンは「一般化 *généralisation*」(MM175) と呼ぶ。この働きによって、赤や丸といった特定の性質をもつ事物群を心に抱くことが可能となる。唯名論にとっては、このような習慣によって惹起される無数の個物から成る類似性グループ（以下「個物グ

ループ」)こそが一般観念の役割を果たしている。(MM174)

概念論と唯名論の対立点は、類似性グループの構成者がトロープなのか個物なのかという点、そしてその類似性グループを構成する働きが、性質の抽出なのか、個物のまとめあげなのかという点にある。そして、前述のように、ベルクソンによれば、概念論と唯名論にはある種の「循環 *cercle*」がある。ではそれはどのような「循環」か。

2. Worms の解釈

ポイントとなるのは以下の箇所である。

「一般観念の問題にかんして引き起こされている心理学上の難問をできる限り突き詰めていけば、それらの困難は次のような循環 (*cercle*) のうちに追い込まれることになるだろうと、私たちには思われる。すなわち、[A] 一般化するためには、はじめから抽出できなければならず、[B] だが有益な形で抽出するためには、すでに一般化することができなければならない。」(MM174)

「[C] そういうわけで私たちはまさしく実際に一つの円 (*cercle*) の中を歩きまわっているわけであり、唯名論を通して概念論へと連れていかれて、概念論を介して唯名論へと舞い戻っているのである。」(MM175)

Worms [1997a : p. 169] を参考にしてみよう。「[概念論と唯名論の] 問題は次の困難に帰することができる。すなわち、二つの場合においては、結局のところ、個別的な対象のうちに一般的性質が見て取られることがなぜできるのかということが理解されないのである。」つまり、Worms の解釈における概念論と唯名論の抱えている困難は次の問いにまとめることができる。一般的な性質を用いて個別的な性質を、あるいは個別的な性質を用いて一般的な性質を指示することはいかにしてできるのか。ここで Worms は哲学的問題としてのカテゴリーとその個物への適用の問題を念頭に置いているのかもしれない。何にせよ Worms の解釈から読み取れるのはこのようなことにとどまる。

では Worms の解釈における « *cercle* » とは何を意味するのだろうか³⁷。Worms は次

³⁷ Theau [1968] と木山 [2013] もこの「循環」について扱っている。しかし、前者は循環をめぐるベルクソンのテキストを引用するにとどめており、その内実を具体的に分析することはしていない。後者も「一般観念を一般化に求める「外延からの議論」と、抽象に

のように述べている。「彼 [=ベルクソン] によれば、私たちは、一般観念と個別的対象とのあいだの円 (cercle) を歩きまわっている。」(同上、強調は引用者による) ここで Worms のいう「一般観念」とは、唯名論における「語」、概念論におけるトロープの束のことであろう。Worms はここで、「円」ということで、上で挙げた、一般観念と個物のもつ性質相互の適用不可能性を表現していると思われる。「円を歩きまわる」という言葉はこの不可能性を前にした私たちの戸惑いのようなものを意味しているのだらう。

3. « cercle » の再規定

Worms のこの解釈には曖昧な点が多く、ベルクソンのいう概念論と唯名論の「循環」の内実を正確に理解するには、「cercle」の意味をより厳密に規定する必要がある。

3-1. 説明上の不備としての「循環 cercle」

[A] は唯名論にベルクソンが指摘した困難である。例えば、リンゴのもつ色について「赤」という名前が与えられ、特定のポストや血といったさまざまな個物が習慣という能力によって心に抱かれるとき、次の三つの事態が成立している。①語による指示対象の拡張と、②指示対象の制限である。例えば、①「赤」の指示対象がリンゴ a、ポスト a、血 a…といったように広げられると同時に、②これらの赤い個物だけに指示対象が限定されるように、それらを赤くない対象 (青い空、黄色いバナナ…) から区別しているのではなければならない。そして、①・②が成立するためには、③ここですでに何らかの (この場合赤いという) 類似性がリンゴ、ポスト、血…に認められているのではなければならない。

ベルクソンの指摘のポイントは③が成立するには抽出とそれによる類似性グループの獲得がすでに成立していなければならないということである。実際リンゴやポストといった個物群のもつ色を類似の性質 (赤さ) としてまとめあげるためには、それらの個物がもつさまざまな色を一つにまとめる何かがすでに獲得されていなくてはならない。そしてその「何か」とは何らかの類似性グループであるはずだ。だが唯名論は、個物グ

求める「内包からの議論」との対立」(p. 200) と述べるにとどまっている。

ループが形成される過程を説明している以上、ここで参照できる類似性グループとしてはトロープグループしかない。つまり、個物グループを用いて何らかの個物一般を表象するには、抽出とそれによる特定の性質のまとめあげを適切に導くトロープグループが必要となる。

しかし、ここで唯名論が説明すべきは、一般観念がいかにして形成されるのかということであった。そうである以上、トロープグループに依拠して個物グループの形成を説明することはできない。というのも、仮にトロープグループを獲得しているのであれば、それはすでに一般観念を獲得しているということに等しいからだ。

〔B〕は概念論の困難である。概念論は、抽出の末に、トロープの束として一般観念が形成されると考えている。ベルクソンの批判は、この抽出と一般観念の形成の間のプロセスに向けられる。例えば、リンゴやポスト、あるいは血が知覚された際に、これらの個物から赤トロープが抽出されるとする。この抽出された赤トロープは、最終的に、赤い対象一般を表象する束としてまとめられる必要がある。

ところで、赤の一般観念を形成するという目的に資するようにトロープをまとめるためには、このまとめあげを秩序づける何らかの「名称 nom」(MM175)が必要となる。そのような名称がなければ、抽出された赤トロープの分類・総合が無秩序になされてしまい、この場合、赤トロープの束を適確に形成することは望むべくもない。そして、このような名称を適当に用いることができるということは、「赤」という名前によって指示される赤い事物群から成る類似性グループ、つまり個物グループを獲得しているということに等しい。

だが、概念論が説明すべきは、赤の一般観念がいかにして形成されるのかということであった。そうである以上、はじめから赤の類似性グループを導入しているのでは、概念論は説明すべきことに答えたことにはなるまい。

さて、Worms は、概念論と唯名論の困難が、一般観念と個別的な性質相互の適用不可能性に存すると解していた。それに対して、筆者は、それを次のように解する。一般化による個物グループの形成を説明するには抽出によってトロープグループがすでに獲得されているのでなければならない、逆もまた然りである。しかし、そのような説明においては、一般観念がはじめから獲得されているのでなければならない、概念論と唯名論の説明は一般観念の形成プロセスの説明になっていない。

3-2. 概念体系上の「循環 cercle」

さて次に引用部の〔C〕を解釈してみよう。〔C〕を見てすぐに指摘できることは、Worms が「円」の構成物を一般観念と個物のもつ性質と見なしていたのに対して、ここでベルクソンが述べている「円」の構成物は、概念論と唯名論であるということだ。つまり、ベルクソンは、「円の中を歩きまわる」ということで、概念論と唯名論を行き来するという事態を意味しているように思われる。筆者が見るに、ここでベルクソンが述べていることは、唯名論と概念論が両者のあいだの「堂々巡り」を強いる概念体系のもと成立しているという事態である。両者は、一見したところ、一般観念の形成過程をめぐる議論で対立する二つの学説に見える。ところが、ベルクソンによれば、二つの学説は対立しているのではなく、一方が他方へと導くような概念体系のもと成り立っているのだ。

つまり、〔C〕においてベルクソンが概念論と唯名論の循環として提示しているのは次の事態だと思われる。——唯名論と概念論は、他にもさまざまな理論の選択肢があるにもかかわらず、一般観念の形成過程をめぐる私たちの理論の選択について、これら二つの理論の二者択一を強いる概念体系を構築している。——これはもはや Worms とはかなり異なる解釈だろう。Worms によれば、概念論と唯名論の「cercle」は、個物と一般的なものとのあいだの適用不可能性という哲学的問題を表現している。だが、筆者は、そのような伝統的問題の枠組みでは説明しきれない、ここで扱われている概念論と唯名論に固有の関係をベルクソンが指摘していると解する。概念論と唯名論は、共通の概念体系のもと一般観念論に取り組んでおり、そこにおいては、一方で概念論者を唯名論に、他方で唯名論者を概念論に向かわせるという形での二者択一が強いられている。

つまり、ベルクソンは、「cercle」という一語を用いて、概念論と唯名論について二つの事柄を指摘している。この解釈に従えば、「循環を回避する」という事態は、〔A・B〕においては一般観念の獲得を前提としないように一般観念の形成過程を説明できるようになるということ、〔C〕においては概念論と唯名論の二者択一の強制を免れて、そのような概念体系とは別の概念体系のもと、一般観念の形成過程についての理論を構築できるようになるということを意味する。ではベルクソンは〔A・B〕いかにして概念論と唯名論の説明上の不備を回避すると同時に、〔C〕いかにして概念論と唯名論の強い

ている既存の概念体系とは別の概念体系を導入したのか。これらの問いに応答する彼の議論を再構成しよう。

4. 一般観念の形成過程の説明

まず〔A・B〕の方から説明しよう。それは以下の三つのプロセス (1~3) から成る³⁸。

- (1) 類似の感情が与えられている。つまり、欲求に応じるものとそうでないものとが漠然と区別された全体が与えられている。

ベルクソンによれば、一般観念の形成の出発点には「特徴的な性質あるいは類似にかんする錯雑とした感情 *le sentiment confus de qualité marquante ou de ressemblance*」〔以下「類似の感情」〕がある (MM176)。類似の感情においては、身体の構造上反応・欲求するものとそうでないものが大まかに区別された「全体」が観取されている。例えば (これは筆者の考案した例だが)、草食動物は、消化器系の構造に応じて食べる草の種類が異なっている。サイは木の葉を食べるし、馬はイネ科の葉を食べる。それゆえ、サイの知覚は木の葉に反応する傾向をもち、馬の知覚はイネ科の植物に反応する傾向をもつ (MM177; Theau [1968 : p. 315] の例も参照されたい)。このようにして、動物の直接的な知覚内容には、基礎的な欲求が反応するものとそうでないものとの大まかなコントラストがある (MM183-4)。

- (2) この全体の中から、同一の身体運動を返すことによって使用できるものが同一のタイプの事物として認識される。

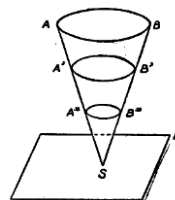
知覚・感覚はその一つ一つが固有の質をもち、細部を突き詰めれば、無数に多様なものを想定できる。それに対して、類似の感情においては、この無数の質をもつ知覚に対して同一の運動を返すことによって、「表象される前に、感じられ、受けとめられた」一般観念が得られる (MM178)。例えば、草食動物は「草一般」を区別している。それは、草食動物の身体構造上、彼らは草に反応するように出来ており、草の知覚において「食べる」という運動のプランをいつも描いているからである。つまり、ベルクソンは、観念の一般性を、特定の事物に対する身体的態度・反応のタイプの同一性に還元する (MM179)。このように特定の事物に対して特定の運動を展開する身体的メカニズムを構築するプロセスによって、漠然と「類似」した「全体」にさらに詳細な区別が施され

³⁸ 以下の記述は Theau [1968 : pp. 294-333] を参考になっている。

ていく (MM183-4)。

(3) 運動のタイプの同一性についての反省によって身体運動における一般性が「思考の領域」へと移される。

このプロセスを説明したものが「意識の諸平面」の理論である。右図 (MM181) において、平面 P は物質世界を、逆円錐の頂点 S は身体における感覚 - 運動メカニズムを、底面 AB は記憶の全体を表現している。逆円錐のなかには無数の段階に分かれた断面 (A'B'・A''B'' ...) があり、そのときの認識にとって的確な位置を意識は採用する。



例を挙げよう。一方で、意識が頂点 S の方に位置をとると、「身体的態度か発話された語」といった判明なものが意識に与えられる (MM181)。例えば、コップがあるとす。このコップを、単に飲み物を飲むための事物一般として、あるいは他のコップとも同じタイプの事物として認識するときには、S 寄りの平面に意識は位置をとる。他方で、意識が底面 AB の方に位置をとると、認識内容は「判別的な記憶力によって個体の知覚へと凝固させられる。」 (MM181) 例えば、コップを、子どもの頃から使用してきた思い出深い対象、その意味で、代わりのきかない、世界でたった一つのコップとして認識する場合には、AB 寄りの平面に意識は位置をとっている。

そして、ベルクソンによれば、「一般観念の本質は、実のところ、行為の領域と純粹記憶力の領域とのあいだを絶えず動くことである。」 (MM180) つまり、S や AB とは理念的な極限に過ぎず、一般観念とは、その時々状況に応じて意識が的確な平面上へと位置をとることによって絶えず様相を変化させるものである。また、動物が頂点 S の側に意識を位置づけ身体運動を機械的に展開するだけであるのに対して、人間はその運動を差し控え、その運動について反省することができる。つまり、運動の同一性という形で事物を一般化する「この働きそのものについてなされる反省の努力」 (MM179) を人間は行なうことができる。このようにして、人間は、運動的反応の同一性の意識についての意識という二階の意識 (反省) を働かせることによって、一般観念を AB 側へと動かすことができる。この働きによって、観念の一般性が「運動の領野」から「思考の領野」へと移される。そして、身体運動に由来する同一性を今度は意図的に分類することができるようになる (MM179)。

以上三つの過程 (1~3) によってベルクソンは一般観念の形成を説明する。ベルクソンの説明における類似性グループの形成に必要なものは習慣化される身体である。そし

て身体とは、はじめから習慣化されているものではなく、感覚 - 運動システムを構築することによって習慣化されていくものであるから、運動的習慣を形成する身体という道具立てを用いることは一般観念がはじめから獲得されていることを意味しない。したがって、ベルクソンの理論においては概念論と唯名論の説明上の循環は乗り越えられている。

しかし、この場合、ベルクソンの一般観念論における (3) 「意識の諸平面」の理論の役割がわからなくなってしまう。というのは、彼の説明の (1・2) によって、すでに、概念論と唯名論の循環は解消されていることとなるからだ (MM178)。また、この場合、「意識の諸平面」の理論自体がいかんにして根拠づけられているのかもわからなくなる。というのは、「意識の諸平面」の理論は循環の回避に貢献していない以上、少なくとも、循環の回避という事態を引き合いに出して、「意識の諸平面」の理論を支持することはできないからだ。(これらについては本章冒頭で示した通りである。)

このような帰結を避けるために、先ほど行なった二つの「循環」の区別が役に立つ。つまり、「意識の諸平面」の理論とは、循環 $[A \cdot B]$ を回避するものではない。それは、一般観念の形成過程を説明すると同時に、 $[C]$ 概念論と唯名論の二者択一を強いる概念体系から脱出することを可能にする理論である。

5. 概念論と唯名論の二者択一からの脱出

では、ベルクソンはいかにして概念論と唯名論の概念体系からの脱出を試みたのか。以下ではこのベルクソンの議論を三つの段階から成る批判として再構成する。

第一段階：認識対象を個体に限定することへの批判

第一段階は概念論と唯名論に「共通の要請」を指摘するものである。「さて、これら二つの相対立する説を掘り下げていくと、そこにある共通の要請が見出される。すなわち、いずれの説も、私たちが個体の知覚から出発すると想定しているのだ。」(MM175-6)

概念論と唯名論による説明 [1] に着目しよう。そこでは両者とも、ある個体が知覚されるという事態から説明を始めている。そのうえで、トロープや名詞がこの個体といかにして関係しあうのかが説明されている。ベルクソンはこの説明の出発点を否定したう

えで、類似の感情を導入している。原初的な経験の内容とは、個体についてのものではなく、あるいは類の概念でもなく、「類似の感情」なのだというわけだ。しかし、概念論と唯名論は、「私たちが個体の知覚から出発すると想定している」ために、類似の感情という大まかな「全体」についての認識に気づくことができなくなっている。このように類似の感情は、概念論者と唯名論者の先入見を指摘することを通して導入されている。

第二段階：認識の知性化の批判

次に以下の引用部に注目しよう。「それらの学説〔＝概念論と唯名論を含む心理学的な一般観念の形成にかんする学説〕が誤っているのは、観念をあまりにも知性化しすぎてしまって、それらの観念にまったく思弁的な役割しか付与せず、観念があるのは観念のためであって私たちのためではないと信じ込み、観念と意志の活動とのあいだの関係を見過ごししてしまったことなのである。」(MM183)

つまり、私たちは、認識の目的を、知性的・理性的に事物を捉えることとしてしまい、その実践的側面を見逃してしまう。だから、認識と行為する身体との関係を見失ったうえで理論を構築してしまう。概念論と唯名論はこのように意識を身体化することなく、いかにして観念が連合するのかと問う。しかし「この問いに連合論〔＝概念論と唯名論〕は答えることができない」。なぜか。「その理由は、連合論が観念やイメージを独立した存在物——それはある内的な空間のなかにエピクロスのアトムのように漂いながら、引力圏内で偶然に互いに引かれ合った際に近づき合い触れ合ったりするものである——に仕立て上げてしまっているからなのだ。」(MM182-3)

つまり、両者の理論においては、意識が外界と取り結ぶ実践的關係が無視されている。だから、実践的な身体がどのように認識内容を連合しているのかに答えることができない。ここでベルクソンは、認識の知性化という概念論と唯名論の悪癖を指摘することによって、認識を身体化している。

第三段階：意識の不動化の批判

次に意識の諸平面の運動の導入である。ベルクソンの次の発言に着目しよう。ここで先ほどの円錐の図 (MM181) が用いられている。

「〔…〕 以上のように規定された円錐のうちにあって、一般観念は、頂点 S と底面

AB とのあいだを休みなく揺れ動いている。S において一般観念がとる形式は、身体的な態度あるいは発話された語といったきわめてくっきりとしたものであろう。AB において一般観念がまとう様相は、同じくくっきりした個々のイメージである。そこでは一般観念はその脆い統一性を失い、散乱して、無数のイメージへとこの姿を取るようになる。そして、だからこそ、完全に出来上がったもので満足してしまう心理学、事物しか認めないで進展を無視する心理学は、上記の運動〔AB と S のあいだを絶えず動く意識の運動〕から、それが揺れ動くところの極端なところ〔=S と AB〕しか見て取ることがないのであろう。」(MM180、下線は引用者による)

ここでいう「心理学」というのは概念論と唯名論を含む心理学的理論全般を指す³⁹⁾。また、下線部の「だからこそ」が対応している理由は、S と AB において観念のとり様が「くっきり」としていることである。

つまり、ここでベルクソンは以下のように述べている。ベルクソンによれば、一般観念は、頂点 S と底面 AB とのあいだの絶えざる運動を本質とするのであった。ところが、第一に、心理学的な理論には、完成された認識の様態をモデルとして一般観念の形成過程を説明する傾向がある。第二に、それには、意識の運動を止めてしまつて、固着した「事物」として意識のあり方を捉える傾向がある。このような傾向は次の二つの事態を生じさせる。

一つめは、一方の「極端なところ」にある S の認識をモデルとして認識論を構築することである。S においては「有節言語」が完成された認識としてあり、その中でも、名詞という品詞がはっきりとした形をとっている。そこで、知覚された個体をこの名詞と関係づけ、そこからいかにして一般観念が形成されるのかを問う。

二つめは、もう一方の「極端なところ」にある AB の認識をモデルとして認識論を構築することである。AB においては個体の認識が完成された認識としてある。この個体の認識が一般観念の構成要素と見なされたうえで、個体の認識が積み重ねられることによってどのようにして一般観念が形成されるのかが問われる。

ところで、このような二つの理論を私たちはすでに知っている。すなわち、前者が唯名論、後者が概念論である。独立した個体の観念や類の概念とは「精神が後から人工的に作り上げた」(MM183) ものである。それにもかかわらず、唯名論者と概念論者は、

³⁹⁾ 引用部 (MM180) に付された註 41 (MM392) も参照されたい。

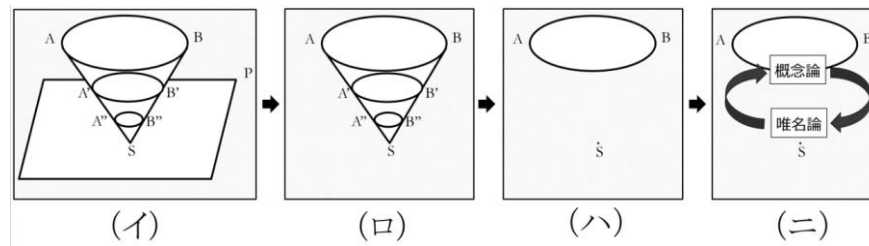
上で指摘した悪癖のせいで、前者は名詞を、後者は個別的な性質（トロープ）を一般観念の形成の端緒としたうえで、一般観念がいかにして形成されるのかを問題にしている。つまりここでベルクソンは円錐の図を用いながら、概念論と唯名論の用いる概念がいかにして成立したのかを説明している。

6. 「意識の諸平面」の理論の役割

以上の考察からベルクソンがいかにして「意識の諸平面」の理論を正当化しているのかを示そう。ドゥルーズも述べるようにベルクソンの方法論はカントのそれと似ている。「[...] ベルクソンは錯覚を、カントと類似した仕方であつかう。錯覚は知性のもっとも深いところにもとづいている。それは、厳密に言えば、消散されることもなく、消散することもできず、ただ抑圧されうるだけのものである。」(Deleuze [1966 : p. 10]) ベルクソンが自身の一般観念論における独自の概念・理論を導入するのは、私たちの認識における逃れがたい傾向・悪癖（認識の知性化・意識の事物化・認識内容の個体への限定）を指摘して、その影響力を抑え込んだうえで、そこから垣間見える意識の働きを見出すことによる。

だが本章の考察から理解されるのは、ベルクソンがただ認識の傾向・悪癖を「抑圧」しているだけではないということである。——すなわち、彼は、概念論と唯名論の用いている概念体系が生み出され、両者の二者択一の強制が成立する歴史を、意識のメカニズムを導入することによって辿り直している。——下の図を用いてまとめよう。第一に、認識が知性化されることによって、外界と意識との関わりが抹消され、頂点 S と平面 P とのあいだの実践的關係がなきものとされる（ロ）。第二に、意識の動きを固定し、その運動を止めてしまうことによって、AB と S との間にある無数の平面（A'B'、A''B''…）が取り去られ、AB と S しかないかのように認識論上の概念が構築される（ハ）。第三に、原初的な認識の内容が個体にかんするものであるとされるため、類似の感情という中間的な認識様態に気づく可能性が排除されている（ハ）。このような概念体系のもと、概念論は一方の極端なところにある AB における要素（トロープ）から出発して理論を構築し、唯名論はもう一方の極端なところにある S における要素（名詞）から出発して理論を構築する。そして各々の限界がわかると、今度はもう一方の極端な方へと移行して、そこから理論を構築しようとする（ニ）。これによって、概念論と唯名論の堂々

巡り・二者択一を強いられるのである。



かくしてベルクソンがいかにして「意識の諸平面」の理論を支持したのか理解されよう。すなわち、ベルクソンは、概念論と唯名論の強いる概念体系によって覆い隠されていた認識様態（意識の平面における運動など）が概念論と唯名論の二者択一を生み出す機構を備えていることを示すことで「意識の諸平面」の理論を正当化している。ベルクソンにとって重要なのは、「意識の諸平面」の理論によって、既存の理論のもつ困難を回避できるかということだけではなく、概念論と唯名論の用いる概念とそこで立てられる問題の成立が説明されうるか否かということでもあるのだ。

7. ベルクソンは「意識の諸平面」の理論によって何をしているのか

以上の考察からベルクソンにとって「意識の諸平面」の理論とはどのようなものであったのかがわかる。ここまで見てきたように、「意識の諸平面」の理論とは、一般観念の形成プロセスのみならず、概念論と唯名論という哲学的立場の成立をも説明するものであった。この「意識の諸平面」の理論の特性に鑑みれば、ベルクソンの一般観念論は「概念論と唯名論の間にある」（Theau [1968 : pp. 318-25]）第三の理論にはとどまらない。すなわち、Theau によれば、一方で、ベルクソンの理論は概念論に似ている。すなわち、ベルクソンの理論において観念の形成に必要なものは、唯名論者がいうような語ではなく、身体の運動メカニズムであり、これは（あくまで Theau によればだが）スコラ的な「能動知性 l'intellect-agens」に相当する。他方で、それは、唯名論にも似ている。萌芽的な観念を身体の習慣から思考の領域へと移すことで一般観念の形成を説明しようとするとき、ベルクソンは一般観念の総体を「有節言語の総体」として提示する。さらに Theau によれば、このような「概念論と唯名論とのあいだにあるベルクソンの理論」がここで提示しているものは普遍の实在論である。その理由は「知覚されたイメージが事物に基づいて描かれ、また事物の一部である以上、そして、類似というものがイ

メージの一側面、つまり欲求の観点から見られたイメージそのものである以上、一般觀念の素材 *étoffe* は、知覚の素材と同じように、物質に帰属するからである。」(p. 324) ベルクソンは認識を身体化することで、物質という確固たる地盤にイメージや觀念を基づかせた。これによって、ベルクソンは、一般觀念を、実在とは無関係な空虚な記号ではなく、「物質的事物のただなかから、実際に直接的に取り出されたもの」として捉えたのだ。

今ここで、Theau のこの解釈を全面的に否定することはできない。そのためには、Theau がベルクソンの理論との比較対象にしている、古代や中世の普遍論争の文脈、ならびに 19 世紀フランスの当時の論争状況を思い起こす必要さえあるだろう。ここでは次のことだけを指摘しておこう。Theau の解釈においては、ベルクソンの理論は、概念論や唯名論と並べられるいわば「第三の理論」に過ぎない。だが、このような位置を意識の平面論に与えることは誤っている。というのは、ここまで見てきたように、意識の平面とは、一般觀念の獲得プロセスのみならず、概念論と唯名論の成立をも説明するものであるからだ。この意味でそれは概念論・唯名論と並べられる第三の理論ではない。そうではなく、むしろ、(すでに説明したような) ある種の仕方で解体していくとそこから概念論や唯名論が出てくる理論、そこに潜む内的なロジックを一定の仕方で辿っていくと概念論と唯名論の成立が説明できる理論と言うべきである。この意味で、「意識の諸平面」の理論には、一般觀念論という哲学的論争についての理論というメタ的な理論という位置を与える方が適切だろう。

となると、次のような一見奇妙な哲学的方法をここから見出すことができる。——ベルクソンは、意識の理論についての理論(意識のメタ理論)を作り上げることによって、意識についての新たな理論や概念を創出している。——なぜベルクソンはこのような迂遠とも思える作業が必要だと考えたのか。それは、既存の理論では、意識について用いられている概念があまりにも貧弱で、哲学的問題を解決することなど望むべくもないと思ったからだろう。ベルクソンが概念の分析といった哲学的方法を採用しなかった理由もここにある。ベルクソンにとって重要なのは、既存の概念を判明にすることではなく、忘れられた意識の本来の姿を哲学の議論場に再登場させることなのだ。

このベルクソンの哲学観にはある種の哲学に対する批判が込められていよう。すなわち、ベルクソンは、既存の問題を既存の理論ごと引き受け、そこにある概念を分析し、出来合いの説のどちらかに軍配をあげて満足するような試みは哲学的ではないと考えている。哲学者たるもの、既存の概念をそのまま引き受けることなく、それらの成立を

問い直すことで、新たな概念を創造すべし。——このような哲学（者）についてのベルクソンの規範意識の明確化には、カントとの比較・対照がなお有効であり、『思考と動き』の諸論文の検討が必須だろう。このような次なる課題を提示することで、本章の結論に代えたい。

第二部 純粹知覚説

第一部では、ベルクソンの哲学的方法が示された。第二部では、まず、純粹知覚説の内実を明確化する（第四章・五章）。次いで、第一部で示されたベルクソンの哲学的方法を踏まえて、純粹知覚説がいかんして正当化されているのかを示す（第六章）。

第四章 ベルクソンにとって色とは何か

序論で純粹知覚説が色にかんする現代的な知見と合致しないように思われるということをおは述べた。まずはその内実をより詳細に示すことから始めたい。

次のような例を想像して欲しい。——あなたが電車に乗っている場面を想像しよう。あなたは赤いセーターを着ている。この電車がトンネルに入ったとしよう。そのときあなたのセーターの色は暗い赤色に見えるようになるだろう。その後、この電車がトンネルの外に出たとする。このときこのセーターの色はもとの赤色よりもっと精彩に富んだ赤色にあなたには見えるだろう。このような日常的な現象について「素朴な色観 naïve view of color」をもつ人は次のように述べる。確かにセーターの色は状況によって変化しているように見えるが、それにもかかわらず、このセーターは一定の色をもつ。つまり、通常環境で通常の知覚主体にそう見えるような「本当の色」を事物はもつのであり、セーターそれ自体が日光下において（色覚異常などのない）ふつうの知覚者に見えるような赤い色をもつのである⁴⁰。ベルクソンも、『物質と記憶』において物質を「イメージ」とする考え方を提示する際に、このように考えているように思われる（とりわけ下線部）。

「[…]「イメージ」ということで私たちが理解しているのは、觀念論者が表象と呼ぶものよりは多く、實在論者が事物と呼ぶものよりは少ない、ある存在——「事物」と「表象」との中間に位置づけられた存在である。物質にかんするこの考え方は端的に常識の考え方である。[…] この色は […] 対象の内にある。それらは、私たちの精神の状態ではなく、私たちの精神からは独立した存在の構成的要素である。

⁴⁰ 美濃 [2016 : 21-3 頁] を参考になっている。

したがって、常識にとって、対象はそれ自体において存在するのであり、他方で、私たちがそれを見て取るように対象はそれ自体色彩に富んでいる。これはイメージユなのだが、それ自体で存在するイメージである。」(MM1-2、下線部は引用者)

知覚主体に現われる色という感覚性質は、知覚主体が何らかの物理化学的な働きによって生み出し外界に投影するものではなく、あるいはそうした物理的作用の随伴現象でもなく、物理的对象それ自体がもつ性質だとベルクソンは述べているように思われるのだ。以下ではこのような立場を「色の实在論」と呼ぼう。

ところが、現代の色にかんする知見を踏まえると色の实在論ほど疑わしいものはない。すなわちそれは、第一に、今日でも有力とされる、ロック、ガリレイ、そしてニュートンの哲学的な考えに反しているし、第二に、色に関する科学的知見とも一致しない。このようないわば「色の非实在論」を本章ではまず概観するが、色にかんする科学的・哲学的な知見のいずれもが色の实在論には否定的な立場をとっている。つまり、ベルクソンの色にかんする考えは、私たちの目から見ると端的に誤っているように見える。とすれば、本論文の序論で述べたように、色にかんするこの考え方に基づいている、心身問題の困難の緩和、ならびに意識と科学の世界像の両立という『物質と記憶』のプロジェクトはすでに破綻していることになってしまうのではないか。

本章の目的は、この破綻の危機を回避すべく、色にかんするベルクソンの考えを単なる色の实在論とする解釈を斥け、彼の色覚論を正確に理解することである。『物質と記憶』の文言を詳細に読み解いていくと、それは色の实在論とは異なる見解を表明していることがわかる。しかも、私が見るに、色にかんするベルクソンの考えは、色の知覚という現象に対して比較的高い説明力を有する。要するに、本章では、ベルクソンの理論を正確に記述し、それを受け入れたうえで、その理論の説明力の高さを明示することを目指す。

第二部全体にとって重要なことも述べておきたい。ベルクソンが純粹知覚説という知覚説を提示し、そこで彼が「知覚は対象においてある」とか「私たちは対象において知覚する」という主張をしていることはすでに確認した。しかし、これらの意味は、より具体的にはどういう意味だろうか。色を例にしてみよう。それは、対象が何か「本当の色」のようなものをもっていて、私たちがその本当の色をそのまま見て取っているということなのだろうか。しかし、ベルクソンが色の实在論を採用していないのだとすれば、このような解釈は誤っていることとなる。色にかんするベルクソンの考え方を明確にす

ることは、純粹知覚説の主張の内実の明確化につながるのである。以上が本章の射程である。

1. 色の非実在論——投影説と傾向性理論⁴¹

色の実在論に対しては、すでに 17 世紀から、ロックやガリレイ、そしてニュートンといった人々によって、きわめて説得的な反論が提示されていた。例えばロックは次のように述べる。

「火や雪の諸部分の特定のかさ・数・形・運動は、だれかの感官が火や雪を知覚すると否とにかかわらず、火や雪に真実にある。したがって、それらの物体に実在するから、実在的性質と呼んでよい。が、明るさ、熱さ、白さ、冷たさは火や雪にならない […]。そうした〔明るさや熱さなどの〕感覚を取り去ろう。[…] そうすれば、色も味も香も音もすべて、そうした特定の観念としては消えてなくなり、それらの原因に、すなわち〔物体の〕部分のかさ・形・運動に還元されるのである。」（ロック [1972 : 192-3 頁]）

ロックの述べていることを、先ほどのセーターの例を用いて説明しよう。ロックによれば、赤いセーターは、私たちには赤い色をもっているように見えるが、本当はこのセーターそれ自体が赤いのではない。このセーターそれ自体が実際に持っている性質は大きさや形といった物理的な性質のみである。それに対して、赤色という感覚性質は、感官をもった知覚主体がいてはじめて存在する性質であって、事物それ自体がもつ性質ではない。このように、知覚主体からは独立に事物それ自体が持っている性質を「一次性質」、知覚主体に依存してはじめて存在する性質を「二次性質」とロックは呼び、両者を峻別した。言い換えれば、一次性質とは、知覚主体に依存せず客観的に存在する性質であり、二次性質とは、知覚主体に依存してはじめて存在する主観的な性質のことである。セーターそれ自体は「本当の（赤）色」などもっていないのである。

では、色という二次性質はどのようなプロセスを経て出現するのか。ニュートンによれば、このプロセスは、事物が光を反射すること、事物が光を発すること、事物を光が

⁴¹ 美濃 [2016] ならびに篠原 [2011] を参考にしている。

透過すること、という三つから成る。それらの各々において、事物のもつ微視的な構造が関わっているのだが、今日では、その構造によって生じる光の波長が、色という性質の出現に関与していることが知られている。波長それ自体に色はないが、この波長を受容する知覚主体がいると、そこに色という二次性質が現れるのである。何が起こっているのか。まず事物が一定の波長の光を反射させる。次いでその反射した光が知覚主体の網膜に到達する。網膜には錐体細胞が分布しており、到達した光は錐体細胞のうちに一定のパターンの発火を生じさせる。そして、この反応が神経網から脳内部の視覚中枢へと伝播する過程で、一定の種類の新しい状態が生じる。こういった状態の結果として、知覚主体は色の知覚経験をもつのに至るである。以上のようなニュートン由来の科学的な知見においては、ロックも述べていたように、通常的环境中で通常知覚主体にそう見えるような「本当の色」を事物がもつわけではない。以下ではこのような考えを「色の非実在論」と呼ぼう。

色の非実在論は次の反論にどう答えるだろうか。——色は事物それ自体がもつ性質として知覚主体に現れてくる。この直観的なデータと色の非実在論は合致しないではないか。——色の非実在論者は、例えば次のようにして、この直観的なデータが真理ではないと端的に主張するだろう。すなわち、私たちはあたかも色が事物それ自体のもつ性質であるかのように錯覚しているのであり、本当は、その色という性質は、知覚主体が上述の生理学的なプロセスを経て外界に「投影 project」しているものに過ぎない、と。このような考えが色の非実在論の選択肢の一つとしてありうる。これは「投影説」という立場である。

投影説は今日でも一定の支持者をもつ⁴²。だが投影説は次のような立場を検討することなしには受け入れられるものではない。すなわち、色の「傾向性理論」という立場である。傾向性論者も、事物それ自体が色を備えていることは否定する。しかし、このことは、私たちに見えるような色に対応する何かを事物がもつ可能性を斥けはしない。仮にこうした「何か」が実在するのだとすれば、それを色という性質と呼ぼうと傾向性論者は提案する。そしてその性質は「傾向性」と呼ばれる。すなわち色という性質は「標準的な環境で通常知覚主体に特定の色を生じさせる傾向性」であり、この見解においては次の双条件文が成り立つとされる。

物体 x が色 F をもつ $\Leftrightarrow x$ は標準的な環境で通常知覚主体に F をもつものとして

⁴² 篠原 [2011] がその一例である。

知覚される。

色の傾向性理論の強みは二つある。一つめは、色のもつ知覚者依存性を説明できることである。確かに、投影説は、色のもつ主観性を説明することに成功している。だが、これに対して、色は主観的なものではなく、知覚主体に相対的なものであるという見解もありうる。例えば、先ほどのセーターの色の変化（赤→暗い赤→明るい赤）は、周囲の環境と知覚主体の状態の変化との相関関係によって説明できるように思われる。傾向性理論はこのような色の知覚者依存性を説明できる。

二つめは、私たちの直観的なデータに対応していることである。先ほどの投影説への批判にあったように、やはり色は（何らかの意味で）事物それ自体のもつ性質であるように思われる。傾向性理論はこの直観的なデータとも相性がよい。というのは、傾向性理論においては、色が傾向性という性質であると述べることによって、色は知覚主体とは独立に存在する「何か」とであると主張しているからである。

このように、傾向性理論は、色が事物に属する何かであるという色の实在論者の考えと、色が事物それ自体のあり方ではなく、私たちに知覚される限りでのあり方であるという投影説の考えの折衷案として提示されるものであり、その意味でいわば「中道派」と言える立場である⁴³。だが、投影説にせよ、傾向性理論にせよ、やはり色の实在論の主張を受け入れないことには変わりはない。事物は「本当の色」などもたないという彼らの主張は今日では説得的なものとして受け入れられていると言ってよい。

2. ベルクソンは色の实在論者か？——「創発」批判

となると、ベルクソンの色にかんする見解はやはりもはや受け入れがたいものなのではないか。確かに、先ほど見たように、「色は対象の内にある」とか、色は「私たちの精神からは独立した存在の構成的要素である」とか、「私たちがそれを見て取るように対象はそれ自体色彩に富んでいる」といったベルクソンの言葉は色の实在論へのコミットを感じさせる。

実際、ベルクソンが、次のようにして、投影説を批判していたことは明らかである。——知覚対象である光点 P、知覚主体、ならびに知覚主体のもつ網膜の点 $a \cdot b \cdot c$ があると想定した場合、生理学者・心理学者は、次の四つの段階からなるものとしてその知

⁴³ この呼び方は篠原 [2011 : 28-30 頁] から借りたものである。

覚を説明する。

- (1) 光点 P から振動が発せられ、その振動が網膜の点 a・b・c を刺激する。
- (2) その刺激は神経を伝って、脳などの中枢へと到達する。
- (3) 刺激は脳内で知覚イメージに変換される。
- (4) そのイメージが外界の点 P に投影される。

上記 (1~4) は既述のニュートン由来の科学的説明と軌を一にしている。だが、ベルクソンによれば、この説明は「現実のプロセスでは全くない」。

「実際には、意識内で形成され、次いで P に投影される、非延長のイメージなどない。本当は、点 P・点 P が発する光線・網膜・当該の神経要素が、緊密に結びついた全体を形作っていて、光点 P はこの全体の一部であり、P のイメージが形成され知覚されるのは P においてであって、他のところではない」(MM41)。

したがって、色は「私たちの精神からは独立した存在の構成的要素である」等々、というわけだ。

しかしここで注意されたい。ベルクソンがこのように述べる時、彼は投影説の説明 (1~4) のすべてを否定しているだろうか。彼は同じ段落内で次のようにも述べている。

「私は次の〔二つの〕ことを認める。〔一つは〕点 P から網膜のさまざまな微粒子に伝わる振動が皮質ないし皮質下の視覚中枢に伝わり、しばしば、別の中枢にも伝わるということ。〔もう一つは〕この中枢が、ある時は、振動を運動機構に伝え、またある時は、振動を暫定的に〔中枢に〕留めるということである」(MM40)。

つまりベルクソンは、点 P から振動が網膜に伝わり、それが中枢に到達し、その振動が中枢から運動神経へと伝達していくというプロセスが知覚意識の形成の契機となっていることは認めているのである。これは先の投影説の説明 (1) と (2) を彼が否定していないことを意味する。ベルクソンが否定しているのは、(3) 物理的振動のイメージへの変換、ならびに (4) そのイメージの外部への投影という部分のみである。そして、MM41 に見られるように、事物における光の反射やそれを受容する網膜などの相互作用によって、何らかの仕方で、色も含めた P のイメージが「形成される」とベルクソン

は述べているのである。ここから次のようにいえよう。——ベルクソンにとっても、色の知覚は、知覚主体、知覚対象、ならびにそれらの周辺の環境に由来する物理的プロセスの相互作用の中で「形成」されるものである。

ただし重要なのは、ベルクソンの説明においては、色が「形成」されることは、色という感覚性質が「創発」することではないという点である。本論文第一章でもすでに見た次の引用部に注目しよう。

「第一の項〔＝外界の運動〕よりも第二の項〔＝知覚表象〕により多くのものがあるならば、〔言い換えれば〕現存から表象に移行するために、何らかのものを加えなければならないとしたら、その〔＝現存と表象のあいだの〕距離は乗り越えがたく、物質から知覚への移行もうかがい知れぬ神秘に包まれたままであろう」(MM32)。

この引用部は投影説とベルクソンの考えの違いをはっきりと示している。色を例に具体化しよう。投影説によれば、脳や神経が外界の物理的運動を受容したのちにそこにもともとは存在しなかった色という性質を生み出し、その色が外界に投影される。しかし、この場合、この（いわば）「無色透明」な事物と赤い色の知覚意識との間にある隔たりはどのようにして乗り越えられるのか。投影説はニュートン由来の科学的説明を繰り返すかもしれない。だが、すでに見たように、ベルクソンも投影説の述べるような物理的プロセスの存在は認めている。ただベルクソンが疑問視しているのは次の点である。——仮に（ロックの言うように）一次性質と二次性質とを峻別するならば、光の反射や神経の電気信号の伝達といった色をまったくもたないタイプの存在者（一次性質）から、知覚意識に与えられる赤という一次性質とは質的に異なる存在者（二次性質）が創発したことになる。そのような質的に異なる存在者の創造作用を単なる事物がもつというのは受け入れがたい。彼は次のようにも述べている。

「物質の知覚と物質そのものとの間には本性の差異ではなく、程度の差異しかないのだから、知覚と物質の関係は、部分と全体の関係にある。それゆえ、物質が、私たちがそこに見て取るものと別の種類の力能を行使することなどできまい。物質には神秘的な力などなく、物質がそのような力を隠し持つことなどできない」(MM74-5)。

つまり、物質が作用・反作用を繰り返しても、そこから新たなもの（例えば知覚意識）が創発することなどありえない。ロックのように一次性質と二次性質とを峻別し、一方から他方へと移行しようとするならば、より具体的には、単なる物理的作用からそこには存在しなかった色という新たな性質が創発すると述べるならば、投影説の説明における「何らかの働き」は必ずや「デウス・エクス・マキナ」を導入せざるを得ないというのがベルクソンの考えである。

3. 色はいかにして「形成」されるのか

それにしても、色が「創発」するのは別の何らかの仕方で「形成」されるのだとして、それは具体的にはどのような過程を経て形成されるとベルクソンは考えているのだろうか。この点については、すでに引用した部分にヒントがある。ベルクソンによれば、「知覚と物質の関係は、部分と全体の関係にある」のであり、「第一の項〔＝外界の運動〕よりも第二の項〔＝知覚表象〕により多くのものがある」とか「現存から表象に移行するために、何らかのものを加えなければならない」といった考えは受け入れがたい。ベルクソンはこうした投影説的な考えとは正反対の理論を提示している。つまり、物質と知覚意識のあいだには、両者が同じタイプの存在者であるという規定に加えて、知覚意識よりも物質の方が量的に豊かな存在者であるという関係がある。そして、その量的な豊かさをいわば「減らす」という働きが、物質から知覚意識への移行の過程なのだ。

「第一の語〔＝現存〕から第二の語〔＝表象〕へと、減少 *diminution* によって移行できるならば、すなわち、イマージュの表象がイマージュの単なる現存よりも少ないものならば、事情は同じではあるまい。というのはこのとき、イマージュの単なる現存が自らを表象に変えるためには、現存しているイマージュが自身から何らかのものを放棄するのを強いられるので十分だからだ。」(MM32)

このようなベルクソンの見解は色の経験科学とも整合的なものである。例えば、金魚には人間に見えない色が見えているという研究結果がある⁴⁴。そのようなことが金魚に

⁴⁴ この研究結果については、田中 [2014 : 18 頁]、ならびに Byrne & Hilbert [2007] を

できるのは、金魚が、人間には知覚できない紫外線に近い光を受容する器官を備えているからだ。だが、この金魚にしか見えない光は、たとえ人間には知覚できない光なのだとしても、金魚がその光を知覚することによってはじめて存在し始めたものではない。ベルクソンの言葉を借りれば「イマージュは知覚されなくても存在することができる。イマージュは表象されなくても現存することができるのだ。」(MM32) 外界には、もともと、私たちが知覚しているものよりも多くの事物が存在している。そして、その多くの事物のうちから、自らの身体が感受性をもつものだけを私たちは見て取っているのである。このように、色が生じるのは、新たな存在者を生み出すことによってではなく、物理的存在者の数を減らすことによってなのである⁴⁵。

ここまでの考察をいったんまとめよう。ベルクソンは次のように色の「形成」を説明する。

- [1] 無数の物理的作用をもつ事物が存在する。
- [2] 事物における光の反射、ならびに知覚主体の網膜に分布した錐体細胞におけるその光線の受容、神経系への伝達といった生理学的なプロセスによって、色は「形成」される。
- [3] ただしここでいう「形成」とは、物理的な相互作用によって色という新たな性質が「創発」することではない。むしろ、知覚主体のもつ器官が反応できる物理的作用だけが受容され、それ以外の物理的作用が無視されることによって色は現れる。

このように、知覚意識に与えられる色は、事物の持つ存在者を減らすことによって形成される。物質にはより多くの知覚可能性が本来備わっている。その多くの知覚可能性のうちの一部を現実化するという作用がベルクソンにとっての知覚なのである⁴⁶。

参照されたい。

⁴⁵ 「物質についての私たちの表象は、物体に対する私たちの可能的行為の尺度である。私たちの表象は、私たちの欲求を惹きつけないものの、より一般的には、私たちの機能を惹きつけないものの除去に起因するのだ。ある意味で、次のように言えよう。任意の無意識の物質点が、物質世界のあらゆる点の作用を集め伝えている以上、この物質点の知覚は、その瞬間性においては、私たちの知覚よりも無限に広大かつ完全である。それに対して、私たちの〔知覚〕意識が手にしているのは、特定の面から与えられた物質世界の特定の部分に過ぎない。意識とは——外界の知覚の場合——まさしくこの選択に存するのだ。しかし、私たちの意識的知覚の必然的な貧しさのうちには、何らかの積極的なものがあり、それは、すでに精神の前兆となっている。それは語源的な意味での分離する働き *discernement* である。」(MM35)

⁴⁶ 例えば平井 [2006 : 102 頁] は次のように述べる。「[...] われわれはいわば圧倒的に

4. ベルクソンは色の実在論者か？

以上のベルクソンの考えは投影説とは相容れないだろう。生理学的なプロセスによって色という性質が生み出され、言い換えれば、一次性質だけをもつ事物の働きによって二次性質というタイプの異なる性質が創発し、それが外界に投影されるとはベルクソンは考えていない。しかし、ここで重要なのは、このようなベルクソンの考えは、おそらく、色の実在論とも相容れないということである。というのは、ベルクソンにとって色とは、投影説が述べるような二次的な性質ではないが、それと同時に、事物のもつ無数の作用のうちから自分の器官が反応できるものだけを取り上げることによって、あくまで「形成」されるものでもあるからだ。そうである以上、事物それ自体が「本当の色」をもつという色の実在論の考え方とベルクソンのそれとは異なるものであるはずだ。

次の例を考えてみよう⁴⁷。目の前にピンクのシャツを着ている友人がいるとする。私に見えているピンク色はこの友人のシャツという特定の空間上に存在する事物がそれ自体でもつ色だと色の実在論者は考えるだろう。というのは、色の実在論にとっての色とは、通常的环境下で通常の知覚主体に与えられるような色であるからだ。だが、仮にこの友人が色覚異常をもっていると想定しよう。友人は錐体細胞を先天的に欠損しているため、ピンクのシャツが彼には白に見える。だが私にはそのシャツがピンクのシャツとして知覚されている。色の実在論者は、この例においてさえ、このシャツが本当にもつ色はピンクであると主張するだろう。しかしこれには明らかに無理がある。それに対して、ベルクソンは、上の例を次のように説明するはずだ。事物はもともとピンクに知覚されるか、あるいは白に知覚されるか、あるいは……といった無数の可能的性質をもつ。この意味で、事物とは、知覚可能性の総体である。この知覚可能性のうちのピンクに見えるという可能性を現実化できる知覚主体と、白に見えるという可能性を現実化できる知覚主体がいる。なぜこのような違いが生まれるのか。ベルクソンの説明は単純な

膨大な所与の作用に対して、不感であるが故に知覚する、と言えよう。知覚は、ほとんどを見ないことによって、見ることに成功するのである。／このことは裏を返せば、物理的な作用反作用の連関の全体としての物質的宇宙が与えられるならば、知覚を作り上げる質料は、すでにそこに含まれている、ということである。知覚は、精神によってその都度新たに生産されるような、何か積極的な心理的構成物ではない。すなわち、質料的に見て、知覚と物質の関係は部分と全体の関係に過ぎず、両者の間に本性の差異はない（物質においては、全体は部分の総和以上のものを持たない。）言うなら、知覚は、物質でできているのである。」

⁴⁷ この例は私の大学学部時代の個人的な体験をそのまま用いている。

ものだ。それは、特定の光の波長を受容する器官が、前者にはあり、後者の知覚主体にはないからである。この説明においては、ベルクソンは、事物がピンクといった本当の色をもつなど主張しないだろう。

では冒頭で見たような、「色は対象の内にある」とか、色は「私たちの精神からは独立した存在の構成的要素である」とか、「私たちがそれを見て取るように対象はそれ自体色彩に富んでいる」といったベルクソンの言葉はどう解されるのか。それは次のように解されるべきではないか。——事物のもつ色とは、特定の環境において特定の知覚主体に、色 F に知覚されるか、あるいは色 G に知覚されるか、あるいは…といった無数の性質をもつ「何か」である。——ベルクソンはこの「何か」を「可感的性質 *qualité sensible*」と呼ぶ。すなわちベルクソンによれば、赤い色の知覚意識の物理的基盤それ自体においても「可感的性質は消失しない […]」(MM233-4⁴⁸) のである。ベルクソンは次のように述べている。赤の知覚意識の物理的基盤それ自体において「[…] この〔赤〕色は、褪せて、継起的な印象に伸び広がっていき、おそらくまだ彩られてはいるものの、しかし徐々に純粋な振動とほとんど一致していくのを、私たちは見て取るのではないか」(MM228、下線部は引用者による)。本論文の解釈においては、下線部は次のように解されるべきである。それは、赤色の物理的基盤が、通常的环境下で通常の知覚主体に現われる赤色をもつ、という意味ではない。そうではなく、物理的基盤が、特定的环境下で特定の知覚主体に現れうるような可感的性質をもつ、という意味である。

彼が色にかんするこのような主張を行なっているだとすれば、ベルクソンの見解は色の実在論よりは、むしろ「中道派」に近い。というのは、このベルクソンの考えは、中道派の一つである傾向性理論と同様に、色が事物に属する「何か」（ベルクソンによれば「可感的性質」）であるという色の実在論者の考えと、色が事物それ自体のあり方ではなく私たちに知覚される限りでのあり方であるという投影説の考えの折衷案として位置づけられるからだ。ではベルクソンの考えは既存の傾向性理論なのだろうか。

⁴⁸ 全体を引用しておけば次のようになる。「これらの事物〔＝物理的な振動〕はそれら事物自身の状態に戻り、科学によってそこに区別される諸瞬間に相当するものに区切られていく。そして感覚質は、消失しはしないが、いっそう分割された持続へと延び広がって、溶解していくのである。このようにして物質は、無数の振動に分解されていくのであるが、これらすべての振動は切れ目のない連続性のなかでつながり合い、互いに連動しており、まるで震えるようにしてあらゆる方向に伝わっている。」(MM233-4)

5. 傾向性理論への反論

ベルクソンの色にかんする考え方を正確に理解すべく、傾向性理論に対する批判にベルクソンならばどのように応答するのかを考えてみたい。要するに、ベルクソンの色の理論を、中道派への批判に対して応答可能なものとして再構成しようというわけだ。

一つめの批判は、傾向性という性質は実在性をもたないというものである⁴⁹。例えば塩は水溶性をもつと言われる。しかし、塩は水溶性をもつから水に溶けるのだろうか。むしろそれは、特定の微視的・構造的な物理的性質をもつことによって水に溶けているのであって、そうした物理的性質とは別の水溶性という性質をもつことによって水に溶けているのではないのではないか。それと同様に、事物の色も、事物が傾向性をもつことによって特定の色として知覚されているのではなく、事物のもつ傾向性の因果的な基盤としての微視的・構造的な物理的性質によって、特定の色として知覚されているのではないか。

このような批判には次の一般的な考えが前提されている。すなわち、水溶性や傾向性といった性質は、何らかの物理的な基盤に支えられていなければならない、という考えである。今仮にこの物理的基盤に基づいて色の傾向性が成り立っているとしよう。こうしたことは十分にありうるだろう。この場合、色とは何かという問いに応答するには、物理的基盤に基づいた傾向性という性質の特定だけでは不十分であり、当の物理的基盤のいかなる性質によって傾向性が実現されているのかをも特定しなければなるまい。したがって、傾向性理論は、色の本性に対して不十分な解答しか提示できていない。

傾向性論者による色の知覚経験の説明の不十分さをより具体的に指摘する議論もある⁵⁰。モリエールの有名な例を挙げよう。「睡眠薬はなぜ人を眠らせるのか」という問いに対する「それは睡眠薬が眠らせ力をもつからだ」という答えを聞いて、「なるほど」と納得する人はいない。実は傾向性理論はこれと同じ類の応答である。すなわち、「事物はなぜ赤く見えるのか」という問いに対して、「それは事物が赤く見える傾向性をもつからだ」と傾向性論者は答えている。なぜこの答えには説得力がないのか。仮に傾向性論者の言うことが正しいとした場合、傾向性論者の「それ（＝事物が赤く見えるの）は事物が赤く見える傾向性をもつからだ」という応答に出てくる「赤」という語（下線

⁴⁹ この批判については、篠原 [2011 : 33 頁]、美濃 [2016 : 24-5 頁]、小草 [2018 : 註 3] を参考にした。

⁵⁰ この点については、篠原 [2011 : 34-6 頁]、小草 [2018 : 11-2 頁] を参考にしている。

部)は「赤く見える傾向性をもつ」に置き換え可能であるはずだ。すると、当該の応答は「事物が赤く見えるのは、事物が赤く見える傾向性をもつように見える傾向性をもつからだ」となる。しかしこの応答における下線部の「赤」もまた「赤く見える傾向性をもつ」に置き換え可能であり、以下それが無限に続くことになる。つまり、傾向性論者の説明は、無限後退に陥っている。それが意味するのは、傾向性論者は色とは何かをどこまでも突き止めるには至らないということである。

ベルクソンが、この無限後退の指摘ほど具体的な難点の指摘を行なうかはわからない。(少なくとも『物質と記憶』内にはそのような議論は見出されない。)しかし、傾向性とその物理的基盤にかんする批判的議論は、すでに見たベルクソンの考えのうちに含まれている。ベルクソンが一次性質と二次性質を峻別するロック的な物質観を斥けて、両者を同じタイプのものとして位置づけていたことを思い出して欲しい。これが意味するのは、一次性質しかもたない事物から二次性質が創発するということをベルクソンは受け入れていないということであった。ここで、赤という性質が既述の傾向性なのだと仮定した場合、そして、この傾向性にはその傾向性をそれ自体ではもたない物理的基盤があるのだと仮定した場合、当の物理的基盤は、それ自体はもたない傾向性という新たな性質を生み出していることとなる。この意味で、傾向性理論においては、ロック的な一次性質と二次性質の峻別が、傾向性(＝二次性質)とその物理的基盤(＝一次性質)の区別において採用されていることになる。これはまさしくベルクソンが認めない考えであろう。したがって、ベルクソンの色の理論は、ここで述べられた傾向性理論とは別種のものとして位置づけられなければならぬ。

6. 実現基盤機能主義

上述のような傾向性理論批判はまた別の選択肢が可能であることを示唆している。それが「実現基盤機能主義」という立場である⁵¹。今度はこの立場とベルクソンの立場を比較してみよう。

先ほどの傾向性理論の批判には次の主張が含意されている。——色のもつ性質を傾向性として特徴づける考えは(無限後退に陥るという点で)不十分なものである。そして、

⁵¹ この立場は篠原 [2011 : 34 頁] ならびに美濃 [2016 : 25 頁] で導入され、検討されている。

仮に「色とは何か」という問いに対する十分な答えがあるとすれば、それは、傾向性の物理的基盤それ自体のメカニズムについて解明したものでなければならない。——この主張を受け入れ、色とは、傾向性ではなく、傾向性の物理的基盤のもつ（傾向性とは別の）物理的性質だと考えるのが「実現基盤機能主義」である。この立場においては次の双条件文が成り立つとされる。

物体 x が色 F をもつ $\Leftrightarrow x$ は標準的な環境で通常の知覚主体に F をもつものとして知覚される傾向性を持ち、かつ、 x はこの傾向性の物理的基盤である何らかのカテゴリカルな（＝傾向性のように「～ならば」という条件を表現する句が本質的な仕方では現れない）物理的性質をもつ。

このとき傾向性は単なる概念へと解消され、その実在性は認められなくなる。そして、色はあくまで傾向性の物理的基盤がもつ物理的な性質であることとなる。

だがこの実現基盤機能主義に対しても批判がある。それは「色の多重実現可能性」とか「メタメリズム」と言われる現象を用いた批判である⁵²。例えば、火と赤いセーターとリンゴはそれぞれ異なる光の波長の反射特性をもつ。このことは、これらの事物が異なる分子・原子をもち、異なる分子・原子の配列のパターンをもつからだと説明される。このようにこれらの事物は異なる物理的性質をもつ。それにもかかわらず、火とセーターとリンゴは同じ赤い色をしている。また、「ベンハムの独楽」という例もある。すなわち、一定の仕方で白黒に塗り分けられた独楽を一定の速度で回すと、この独楽が赤色（や緑色）をもつものに見えるのである。要するに、異なる物理的性質をもつ事物が、特定の同じ色をもつことがある。したがって、実現基盤機能主義の述べる「色とは何らかのカテゴリカルな物理的性質である」という主張に反して、私たちは、ある色をその色として特定するための一定の物理性質を示すことができない。「性質とは、ある一定の性質〔実現基盤機能主義においては一定の物理的性質〕を共有するという事実によって取り出される集合のことである⁵³」以上、実現基盤機能主義の説明は色という性質を捉え損なっていると言わざるを得ないのだ。

このような批判をベルクソンはどう評価するだろうか。まず、私が見るに、ベルクソ

⁵² 多重実現可能性、メタメリズムによる批判については、篠原 [2011 : 31-2 頁 ; 34-5 頁]、美濃 [2016 : 26 頁]、小草 [2018 : 4-5 頁] を参考にした。

⁵³ 篠原 [2011 : 34 頁] の規定をそのまま用いている。篠原が参考に使っている Cohen [2009: p. 188] も参照されたい。

ンは、特定の色が特定の物理的性質に一対一対応するという色観を採用していない。このことは(すでに本論文第三章で見た)ベルクソンの一般観念論と関係する。すなわち、ベルクソンは、観念の一般性を、特定の事物に対する身体的態度・反応のタイプの同一性に還元する。例えば、草食動物は「草」という一般観念をもつ。それは、草食動物にとって、草が「食べる」というタイプの身体運動を誘発するものとして与えられているからである。それと同様に、仮に「赤色」という一般観念があり、この語によって指示される特定の性質があるとすれば、それが意味しているものは、特定の物理的基盤ではない。そうではなく、「赤色」という語によって意味されているのは、私たちが赤い色をもつ対象を知覚した際に、その赤色が誘発してくる身体的な反応や態度なのである。このようなベルクソンの考えにおいては、例えば、異なる物理的特性をもつものと同じものとしてカテゴライズされるという事態には何の不思議もない。例えば、リンゴと豚肉とチョコレートという異なる物理的組成をもつ諸事物が同じ「食べ物」だということは、それらの事物が「食べる」という同じ身体反応を誘発するものであるからだと説明されることとなる。知覚とは、特定の物理的基盤に一対一対応の内容をもてるほど繊細にはできていない。それは、極端に言えば、だいたい同じような身体反応・身体的態度を引き起こしてくる事物を同じ事物として分類する、といった程度の解像度しかもたない。それ以上の繊細さを要求するのは知覚の機能を高く見積もりすぎだ、というわけだ。

さて、そうすると、ベルクソンの色にかんする考えは、実現基盤機能主義とも異なるものとなろう。すなわちそれは次の双条件文をもつ。

物体 x が色 F をもつ $\Leftrightarrow x$ は特定の環境で特定の知覚主体に身体的反応 R を引き起こす傾向性をもつ。

つまりここでベルクソンは傾向性理論に舞い戻っている。しかし、このベルクソンの考えを採用すべきメリットを挙げることができる。というのは、上の双条件文においては、色 F が身体反応 R という異なる種類の概念によって条件関係を結ばれているため、傾向性理論に指摘される無限後退の問題が生じないのだ。

またベルクソンは傾向性とその基盤をめぐる問題にも応答できる。というのは、この場合、物理的基盤から色が創発するのではなく、物理的基盤が生み出しているものはあくまで身体的な反応であるからだ。言い換えれば、一次性質と二次性質を峻別して、前者から後者が創発するという考えはここでは採用しなくてすむ。ベルクソンの傾向性理

論には、これまで提起された傾向性理論の難点を克服しているという利点がある。

7. 傾向性批判再び

このようにベルクソンの考えにおいては色の傾向性理論に向けられる批判を回避しつつ、色という性質を特定の身体的反応を引き起こす傾向性で見なすことができる。しかしこれで傾向性理論に対する批判の全てに答えられたわけではない。例えば、次のような批判がありうる。——色は知覚において直接的に与えられ顕わになる。それに対して、傾向性は「～ならば、…であろう」という様相的な性格をもつものであり、これは直接に与えられることで顕わになるものではなく、推論などの概念的な思考によってはじめて捉えられるものである。したがって、色を傾向性で見なす傾向性理論は誤っている。——以下でこの批判⁵⁴に対するベルクソンの応答を再構成したい。そこからベルクソンの色覚理論の重要な側面が明らかになる。

まずベルクソンの次の発言に着目して欲しい。

「仮に可感的性質には多かれ少なかれ同質的な基体があるという私たちの信念が裏付けられるとすれば、それは次のような働きによってのみである。すなわち、その働きとは、——あたかも感覚が、私たちの感覚を超える何らかのものがあることを予測させるような、見て取られていない細部を含んでいるかのごとく——性質それ自体の中に、私たちの感覚を超える何らかのものがあることを捉え、あるいはそのようなものがあることを推し測るように私たちを仕向ける働きである。この場合、私たちが予め述べていたように、感覚における客観的なもの、言い換えれば、感覚に含まれるその感覚が与えている以上のものは、まさしく、いわばその繭の中で感覚が生じせしめている莫大な数の運動からなるのである。それは表面においては (en surface) 横たわって動かずにいる (s'étale, immobile) が、深みにおいては (en profondeur) 生きて振動しているのだ (vit et vibre)。」(MM229)

ここで述べられていることは、赤い色の知覚意識が与えられた場合、私たちは、意識に与えられている赤い色の事物という内容を越えて、その知覚意識の物理的基盤がある

⁵⁴ 小草 [2018 : 5-7 頁] ならびに McGinn [1996: p. 540] を参考にしている。

ということは無意識のうちに推察しているということである。それは、つまり、色を知覚するという経験は、その現われを直接的に知覚するというだけの経験ではなく、その現われを超越した事物の存在を措定するような経験でもあるということだ。ベルクソンの他の言葉も見てみよう。

「[...] 私たちは次のことを心得ている。何百万もの現象のうちのいくつかを私たちが数えることさえもままならないほんの少しの間にも、その何百万もの現象が続いて起こっている、ということ。このことを私たちに告げるのは一人物理学のみではない。ありのままの感覚経験 (*l'expérience grossière des sens*) によっても、すでにして、私たちにはこうした見当がついていたではないか。つまり私たちは、私たちの内的状態の継起よりも、はるかに速やかな継起が、自然の中にあることを予感していたのである。」(MM232)

なぜこのような働きを知覚経験はもつのだろうか。それは知覚経験というものが本質的に有益な行為を成し遂げるためにあるからだ。ベルクソンの言葉でいえば、知覚とは、「純粋な認識ではなく行為の方に向けられている」(MM27) ものであり、「物体に対する私たちの可能的行為の尺度である。」(MM35) 本論文第二章ですで見たと、「未来の図式」を用いた説明がわかりやすい。すなわち、未来の図式とは、これからいかなる行為をなすことが有益かなどを指し示す行為の指針である。例えば、教室のドアを知覚することは、知覚主体にとって、たんにそのドアを知覚するというだけの経験ではない。その知覚内容には、ドアをいかにして開閉するのかという一定の行為への誘引が含まれているし、また、そのドアの向こうに隣の部屋があること、そして隣の部屋の向こうには建物の外部があることといった具合に、知覚された地平の外部があることも示されている。このように知覚経験とは、〈こうしたら、こうなる〉といった行為の秩序を確保すべく、世界を知覚する。つまり、知覚経験には行為の秩序を確保しようとする傾向があり、それを達成するためには、外界を、秩序をもった安定した構造をもつものとして捉えた方が都合がよい。だから、赤の知覚経験が与えられると、その根底にある安定的な物理的構造を捉えようとする傾向が私たちにはあるのだ。(この点については次の章でより深く掘り下げる。)

もちろんベルクソンは、根底にある安定的な物理的構造体の存在を志向する「ありのままの感覚経験」によって示されているのが、物理学が提示するような物理的基盤の具

体的あり方だとは述べていない。水を例にして敷衍しよう⁵⁵。「水」という概念の指示対象は何か。一方で、それは「水的なもの」（無味無臭で、海や川を満たしており、飲めるもの）であると言われる。他方で、水概念の指示対象は、「水的であるもの」ではなく、その水的であることの物理的基盤、具体的には H_2O という分子構造であるという考えもありうるだろう。しかし、ベルクソンにとっては、ある事物が水であるのは、私たちがある特定の仕方ですその事物を知覚し、それに反応するからであり、事物それ自体がどのような内在的性質（分子構造 H_2O ）をもつかはいつでもよい。色の話に戻せば、先に見たベルクソンの色の考えにおいても「あるものが赤であることにによって本質的なのはそれがあある身体的態度を引き起こすことであり、それがどのような物理的基盤をもつかということは、知覚という実践的認識にとってはいつでもよいことである」とするだろう。ベルクソンにとっての知覚とは、事物の内在的性質をありのままに見て取るものではなく、自らの身体の構造上反応するものだけを取り出し、それに対してどのような行為をなすべきかを示すものである。

要するに、ここでベルクソンが述べているのは、色の知覚的現われには、その現われを越えた何らかの基盤的性質がそこにあるという内容が含まれるということである。そして、それは、色の知覚経験には様相的性格が含まれているということでもある。色の知覚経験とは、それ自体で顕わになっている以上の内容を与える経験、具体的には、その顕わになっていない物理的基盤を措定するという経験でもある。その意味で、色と傾向性を異なる性質と考える先の傾向性理論批判には正当性はない。

8. 色の恒常性

さて、以上の考察で明らかになったのは、ベルクソンの傾向性理論における「身体的反応」の内実である。

物体 x が色 F をもつ $\Leftrightarrow x$ は特定の環境で特定の知覚主体に身体的反応 R を引き起こす傾向性をもつ。

⁵⁵ 傾向性理論の選択肢の一つとしての「反応依存性理論」について説明した千葉 [2018 : 149 頁] を参考にしている。

この波線部は次のようになる。

物体 x が色 F をもつ $\Leftrightarrow x$ は特定の環境で特定の知覚主体に、外界を秩序だった安定的な構造をもつものとして捉え、そこで有益な行為を展開しようという身体的反応 R を引き起こす傾向性をもつ。

実際、このような傾向性を色の知覚経験がもつことはひじょうによく知られている。すなわち「色の恒常性」という現象である。赤い色のセーターは、詳細に見てみると、そのセーターのもつ凹凸のあり方や光の当たり方の違いによって、微妙に異なる赤色をもつ。しかしそれにもかかわらず、特別に注意を向けるのではない限り、私たちはそのセーターのもつ多様な赤色を同じ色をもつものとして一様に見て取っている。

この色の恒常性という現象は何によって可能となっているのだろうか。小草 [2018] によれば、それは「諸々の感覚的性質の変化を有意味なものとして受け取り、外界に関わる一定のストーリーのうちに置こうとする傾向を備えたわれわれ知覚者の、自動的な反応」という「把握的作用」である。小草は次のように述べる。

「恒常的な色の知覚において、感覚的性質（が決定する経験の質的側面）はランダムに変化するわけではなく、種々の状況の変化（あるいは変化のないこと）に応じて、規則的で安定したパターンをもって変化する（あるいは、変化しない）。[…]
こうしたケースにおいて、感覚的性質（が決定する経験の質的側面）は、「恒常的で安定した何かが、いろいろな照明や媒介に応じて様々な仕方で現われている」という想定と非常によくなじむような、規則的で組織だった仕方で変化する。そして、このように変化する一連の質的側面（感覚的性質）が与えられると、われわれ（や色を持つその他の生物）のような能力を持つ知覚主体は、否応なく、それらを外界にある恒常的な色の様々な現われ方として把握せざるを得ないのだ考えることができる。」（小草 [2018 : 15 頁]）

では、なぜ私たちには「諸々の感覚的性質の変化を有意味なものとして受け取り、外界に関わる一定のストーリーのうちに置こうとする自動的な反応」が備わっているのか。小草の解答にはこのような疑問がさらに投げられうる。さまざまな解答が考えられるだろうが、ベルクソンの応答は、知覚とは本質的に行為に向けられたものであるからだ

となろう。「ストーリー」をもちうるような秩序だった一つの全体として外界を捉えることによって、先にも述べたように、世界は安定的な構造物として立ち現れてくる。そのような安定的な構造物においてこそ有益な行為は成し遂げられる。このように世界を捉えようとする無意識的な働きこそが「身体的反応 R」の内実であり、色とはそのような身体的反応を引き起こす傾向性なのである。

しかしここで次のような疑念が浮かぶ。このような傾向性は、色の知覚経験に固有のものではない。例えば、音や匂いについても同様のことが言えるし、あるいは形などについても言える。実際、色の恒常性とは別に「形の恒常性」という現象も知られているではないか。とすると、色の知覚経験に固有の性質ではないものを用いて、色の知覚経験を特徴づけることは、失敗しているとまでは言えなくとも、色の知覚経験の特徴づけとしては不十分なものなのではないか。

このような疑問にベルクソンはどう答えるのか。それは次の引用部から理解される。

「偉大な進展が哲学において成し遂げられたのは、バークリーが、「機械論哲学者」に抗して、物質の二次性質には少なくとも一次性質と同等の実在性があると主張したときであった。」(MM2-3)

この引用部にあるように、ベルクソンは、バークリーと同様に、ロックによる一次性質と二次性質の峻別を拒否したのであった。もちろんベルクソンはバークリーの考えをそのまま踏襲したわけではない。「バークリーの誤りは […] 物質を精神の内部に移して、純然たる観念にしなければならないと思い込んだことにあった」(MM3)。つまり、ベルクソンは一次性質と二次性質の両方ともを外界の事物に備わる性質と見なしたのである。そして、そのうち色という性質について、ベルクソンは、それが上述の傾向性だと主張したことをここまで見てきた。とすれば、一次性質と二次性質の区別を否定したベルクソンは、色と同様、形にも上述の傾向的性質を認めるのではないだろうか。そして、仮に上のような批判が有効なものであるとすれば、それは、形の知覚と色の知覚は本質的に異なる現象であるとして、この意味で、一次性質と二次性質の峻別を踏襲している必要がある。しかし、これこそベルクソンが拒否する考え方なのである。

ここからはベルクソンの次のような形而上学的な主張が見出される。——すなわち、一次性質と二次性質とは、存在論的に異なった性質なのではなく、一つの事物がもつ二つの側面である。——それにもかかわらず、この数的に一つの事物のもつ二つの側面を、

存在論的に異なるものと見なすところから、色にかんするさまざまな哲学的問題が解決しがたいものとして提示されるに至るのである。

9. 行為性・超越性・直接性——結論に代えて

本章の最後に、以上の考察からベルクソンの色覚論の三つの特性を指摘したい。

一つめは行為性である。概念的にとらえた場合、一次性質と二次性質というロック的な概念の分類はひじょうに説得的なものである。しかし、その概念上の分類が、存在論的な分類として正当なものであるのかには疑問がある。実際ベルクソンはこのロック的な分類を斥け、一次性質と二次性質を、数的に一つの事物の二つの側面としたのである。このようなベルクソンの考え方は、彼が知覚経験を徹底的に行為性のもと捉え直した点に由来する。すなわち、一次性質と二次性質とは、行為者としての知覚主体にとっては、同じ種類の身体的反応を引き起こす傾向性である。そして、その身体的反応とは、「外界を秩序だった安定的な構造をもつものとして捉え、そこで有益な行為を展開しようという身体的反応」なのである。

二つめの超越性もこの知覚の行為性に由来する。すなわち、知覚経験は、外界のもつ安定的な構造を捉えようとする身体的反応によって、その現われを越えて、外界を見て取ろうとする。そのため、例えばドアの知覚が与えられた場合、知覚主体は、そのドアを虚心坦懐に眺めるのではない。知覚主体は、ドアをどのように開けるか／閉めるかといった身体運動との関連のもとドアを知覚する。ひいては、知覚主体にとっては、このドアの向こう側にある廊下や隣の部屋といった、直接的には与えられていない事物の存在を志向する経験として知覚経験は位置づけられるだろう。ベルクソンは、赤い事物の知覚にも、同種の構造を認める。すなわち、赤い色の事物を知覚する際、知覚主体は、その赤い色の事物の物理的基盤を志向する。この赤い事物の知覚にはその物理的基盤があるということを「推察」させる働きが知覚経験には伴っているのである。このように、知覚経験には、一次性質と二次性質とを問わず、超越性が本来的に備わっている。

三つめは直接性である。今述べたように、知覚経験にはその現われを越えて対象を与える性格があるが、それと同時に、知覚経験における対象は、センスデータとか観念といった媒介物を介して眺められるものではなく、直接的に与えられていると言える。一次性質であろうと二次性質であろうと行為の対象として私たちは事物に直接的に関与

している。つまり、知覚対象は、何らかの媒介物を介して眺められるものではなく、行為の対象として何らの媒介物もなしに意識に与えられている。これが「知覚は対象においてある」とか「私たちは対象において知覚する」というベルクソンの主張の内実である。

第五章：全体性と無際限

——純粹知覚において与えられているものは物質世界の全体か？——

第五章では、純粹知覚説をめぐる解釈上の問題を解決することを通して、この理論の内実をより明確にしたい。まずは、ベルクソンによる「純粹知覚」の規定を確認しよう。

「私たちは知覚ということで理解されるのが次のものであることを要求する。具体的で複合的な私の知覚、私の記憶でいっぱいになった、持続の一定の厚みを常に提供する知覚ではなく、純粹知覚であることを。それは、事実上というよりはむしろ、権利上実在する知覚であり、次のような存在がもつ知覚である。つまり、私がいるところに置かれた存在、私が生きているように生きている存在、しかし、現在に没頭し、あらゆる形式の記憶力の捨象によって、直接的であると同時に瞬間的である一つのヴィジョンを、物質から得ることができる存在である。」(MM32)

ベルクソンによれば、通常の知覚においては、記憶力の働きによって、多くの記憶像が知覚に提供されており、そこには一定の持続（時間的幅）が伴っている。純粹知覚とは、この記憶力の働きを捨象した知覚のことである。それは過去の記憶像が斥けられ、現存する事物だけを構成的要素としているという意味で「直接的」であり、各瞬間における知覚の記憶力によるつなぎ合わせが捨象されているという意味で「瞬間的」な知覚である。

本章が扱う問いは、この純粹知覚という認知状態において与えられているものが、物質世界の部分かそれとも全体か、という問いである。以下ではこの問いに「部分」と答える解釈を「部分解釈」、「全体」と答える解釈を「全体解釈」と呼ぶ。

一方で、全体解釈を採用する論者にはスティーブン・E・ロビンズ [2016] がいる。

「もしこの場における各々の点ないし出来事の状態がその全体の影響、そして実のところその全体の歴史を反映しているのであれば、ゼロの時間スケール（あるいは無限小のスケール）における各「点」は、実質的に、全体についての原初的な気づきをもつことになる。ベルクソンはこれを「純粹知覚」と呼んだのだ。それはまるで、宇宙という物質場を貫いて広がる気づきの、振動する広大な「網 (web)」のようなもの、非常にコヒーレントな網である。」(132 頁)

他にも、Meillassoux [2007]、居永正宏 [2012] が、純粹知覚において与えられているものが物質世界の全体なのだと解釈している⁵⁶。例えば以下の引用の傍点部が全体解釈を支持するものとして挙げられるだろう。

「純粹知覚によつて物質の全体、あるいは少なくともその本質が与えられる以上は (puisque la perception pure nous donne le tout ou au moins l'essence de la matière)、そして、残りのものは、記憶力に由来し、物質に付け加わるのだとすれば、記憶力は、原理上、物質からは完全に独立した力であらざるをえない。」(MM76-7、強調は引用者による)

他方で、部分解釈を採用する論者もいる。ロビンズの論文の訳者である岡嶋隆佑は上の引用文に付した訳注で次のように述べている。

「純粹知覚はたしかに、無限小の時間スケールにおける原初的な気づきと言えるが、その気づきが宇宙全体に及ぶという解釈には異論があるだろう。「純粹知覚は物質 [宇宙] に対して、部分と全体の関係にある」(MM, 75、強調引用者) からである。」

⁵⁶ Meillassoux [2007] は次のように述べる。純粹知覚論においてベルクソンは「物質があるがままに完全に与えられているという事実を手放すことはなく、そこには認識が到達し得ない物自体や、隠れた超越の余地はまったくなかった」(152 頁)。そして、メイヤサーによれば「物自体とは、その物に対して取ることができるすべての視点であった。最も近い、ごくわずかな部分しか含まない視点から、最も遠く離れた視点まで、すべての視点であった」(156 頁)。また、居永 [2012 : 142 頁] は以下のような図を用いて純粹知覚を表現している。デイントン [2017] は、「純粹知覚において物質世界の全体が与えられている」とは主張していないが、通常の知覚経験において物質世界の全体が与えられている——「あらゆる原子は、時間のあらゆる瞬間において、宇宙全体の完全な鏡である。原子は、生じている全てのことをあらゆる場所で知覚する」(デイントン [2017 : 124 頁])、
「こうした宇宙においては、あらゆる粒子が他のすべての粒子を (完全に) 知覚する [...]」(デイントン [2017 : 129 頁]) ——という解釈を提示している。

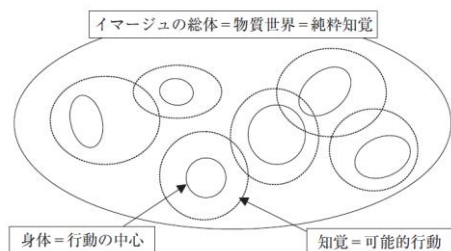


図1 イメージの総体、身体、知覚の関係

(ロビンズ [2016 : 137 頁])⁵⁷

確かに、岡嶋も述べるように、ベルクソンは MM75 ではっきりと、「純粹知覚と物質は部分と全体の関係にある (la perception pure étant à la matière dans le rapport de la partie au tout)」と述べている。この引用部にだけ着目すれば、全体解釈ではなく、部分解釈が採用されるべきだと思われよう⁵⁸。

一方で、MM76-7 が部分解釈を斥け、全体解釈を支持しているように見え、他方で、MM75 を読む限りでは、全体解釈に救いの余地はなく、部分解釈が正しいように見える。こうなると次の解釈もありうるだろう。すなわち、ベルクソンの純粹知覚にかんする言明は矛盾しているという解釈である（「矛盾解釈」）。私はこの解釈を提示した先行研究を管見の限り知らない。だがそれはベルクソンの解釈者たちが各々チャリティーを発揮して『物質と記憶』を読解しているからに過ぎず、実際に全体解釈と部分解釈という相容れない解釈に対応した文言が同時に存在している以上、矛盾解釈にも一定の説得力があるように思われる。

さて、結局のところ、どの解釈が正しいのか。以下で私はこれら三つの解釈（全体解釈・部分解釈・矛盾解釈）とは別の解釈を提示したいと思う。すなわち、ベルクソンは、純粹知覚において与えられているものが部分かつ全体であると述べている、しかしそれにもかかわらず、ここに矛盾は一切ないという解釈（「両立解釈」）である。

この主張を提示すべく以下のテキスト上の問題について考えてみたい。ベルクソンは『物質と記憶』で次のように述べている。

「知覚されていない全ての対象も与えられている (donnée) と想定することへの不都合もないと私が思うならば、その理由は、対象が厳密に規定された秩序

⁵⁷ 「仮に純粹知覚が宇宙の共時的な全体に及ぶと理解するとしても、それが宇宙の歴史の全体、つまり宇宙論的な記憶の全体に及ぶというのは明らかにベルクソン自身の主張ではない。純粹知覚は、「あらゆる形式の記憶も排除した」知覚として定義されているからだ (MM, 31)。したがって、これらの点は著者〔ロビンズ〕の積極的な主張として読まれるべきである。」 Barnard [2011 : pp. 126-7] も部分解釈を提示しているものと読める。

⁵⁸ 「純粹知覚において与えられているものは物質世界の部分か全体か」という形で問いを定式化し、その問いに「全体ではなく部分である」という明確な回答を出している先行研究を私は管見の限り知らない。だがこのことは上記の問いに答えが出ていることは意味しない。むしろ、この問いに対する解答が曖昧なままになっているために、ロビンズ [2016] や Meillassoux [2007]、居永 [2012] などのような解釈が出てきてしまうのではないだろうか。

(l'ordre rigoureusement déterminé) をもつゆえに、これらの対象が一本の鎖のように思われ、現前している知覚はその鎖のうちの輪の一つに違いないと思われるからだ。以上のようにして、この輪は、対象の現実性を鎖の残りの部分に伝達していくのである。」(MM161-2)

次のことを補足しておく。(1) ここで説明されていることは、物質世界全体についての意識を私たちがもつに至る過程である。(2) ここでいう「現実性」とは「意識に現前している」という性質のことである⁵⁹。以上の点を踏まえて上記引用部をまとめると次のようになる。

- ① 対象が「秩序」をもつならば、知覚されていない対象が「一本の鎖」のように思われる。
- ② 知覚されていない対象が「一本の鎖」のように思われると、知覚されている対象はその鎖のうちの「輪の一つ」であると思われる。
- ③ 上記①・②を通して、知覚されていない対象に「現実性」、つまり「意識に現前する」という性質が「伝達」していき、「知覚されていないすべての対象」についての意識、言い換えれば「物質世界全体」についての意識が与えられる。

以下で私は、①・②にある「鎖」や「輪」といった語、③にある現実性が「伝達」していくといった比喩的表現に具体的な内実を与えることによって、当該の引用部 MM161-2 の内容を明確にする。この目的を達成すべく、ベルクソンの最初の主著『意識の直接与件についての試論』(以下『試論』)の考えを、上記引用部において前提されている考えを明示するために適宜参照する。これによって、物質世界の「全体」の表象が意識に与えられる過程にかんするベルクソンの考えを明確化することが本章の一つめの目的である。

ところで、カントや現象学は、世界の全体という表象を「理念」として特徴づけていた。すなわち、無限の予料の対象としてある種の未知の性質をもつものが彼らにとっての世界の「全体」なのである。本章においては、ベルクソンがこのような伝統的な全体概念とは一線を画す特徴づけを全体概念に与えていたことを明らかにする。すなわち、

⁵⁹ 「[...]」 「潜在的」は、最もミニマルには、「意識に現前していない」という意味だけをもつことになるのである(そして、そのことを踏まえると、いま「現実的」と訳した«*actuel*»は「意識に現前している」というだけの意味になる。「顕在的」とでも訳すとよいのかもしれない)。」村山 [2017 : p. 29]

ベルクソンの全体概念とは「既知のもの」として特徴づけられるのであり、ここにベルクソンの全体概念の特性がある。このことを明らかにすることが本章の二つめの目的である。

以上の目的を達成することにより、ベルクソンが、純粹知覚において与えられる「全体」の内実を明確にし、両立解釈が説得的なものであることを示したい。

1. 「秩序」とは何ではないか

ベルクソンの知覚論を概観することからはじめよう。彼によれば、知覚とは物質世界の部分についてのものであり、知覚によって与えられている物質世界の「部分」とは、行為に関係する限りでの物質世界の「部分」である。ベルクソンは次のように述べる。

「知覚にかんしていえば、私たちの身体は、宇宙の中で刻々と占める位置によって、私たちが影響力をもつ物質の部分と局面とを標示する。事物に対する私たちの可能的働きかけの正確な尺度である知覚は、現に私たちの器官に影響して私たちの運動を準備させている諸対象に、このようにして制限される。」(MM199)

ベルクソンによれば、知覚とは、行為の射程を示しており、そうである以上、それは物質世界のほんの一部にしか及ばない。では「行為の射程」とは具体的にいかなるものか。例えば、今自宅の部屋の中にいて、この部屋の内部のみが見て取られているとしよう。この部屋のドアを知覚するとき、このドアはそれを〈開ける〉という行為の実現可能性（例えば、何歩詰めればそのドアを開けることができるのかといったこと）とともに意識に与えられる。あるいは、目前にコップやペンがあるとすれば、これらは〈飲む〉とか〈書く〉といった行為の誘因として私に与えられる。コップやペンはドアよりも近くにあるから、〈飲む〉〈書く〉といった行為は、ドアを〈開く〉行為よりも、容易に実現されうるものとして与えられるだろう。このように、行為の射程には、現に見て取られており、私たちを特定の行為へと導く諸事物が含まれている。

だがこのとき、ドアを開けるという行為が私にとって意味をなすためには、このドアの向こう側に廊下があるという信念が必要であろう。そしてまた、このドアを開いて、廊下を通過するという行為が意味をなすためには、これらの行為の結果として私が到達

しようとしている隣の部屋が実在するという信念が必要である。言い換えれば、〈こうすればこうなる〉という行為の連鎖においては、その行為の連鎖に関与する諸物の実在性が了解されていなければならない⁶⁰。ベルクソンはこのような態度について「無意識的な精神状態」という語を用いて述べている。

「[...] 知覚されていない物質的対象 [...] は、ある種の無意識的な精神状態でないとしたら何であり得ようか。あなたが今まさに知覚している部屋の壁の向こうには、隣の部屋があり、次いで家の残りの部分があり、そしてあなたの住む通りや町がある。あなたがどんな物質理論に賛同するのかはどうでもよい。あなたが実在論者であろうと観念論者であろうと、町や通り、家の中にある他の部屋について語るときには、意識されていないにもかかわらず意識の外で与えられている知覚に当たるものをはっきりと考えているではないか。」(MM158)

このように、行為の射程とは、現に知覚されて特定の行為を導く事物のみならず、知覚されてはいないが当の行為の連鎖に関係する事物にも及ぶ。

すると、本章の問い（物質世界の「全体」についての意識が与えられる過程とはいかなるものか）には次のように答えることができるように思われる。——ベルクソンのいう「秩序」とは、行為の連鎖において想定される秩序である。例えば、ドアを開けば廊下が現れてくる、といったような秩序である。この秩序が想定されれば、部屋の中にいる際にも、廊下は、行為に関わる対象として意識に与えられる。そして、この対象の領域を拡大していけば、意識の射程が拡張されていき、ひいては、物質世界全体についての意識が与えられる。

だが、このような解答は当該の問いに対する応答として不十分である。その理由は、ベルクソン自身が、このような可能的行為における秩序のもとでは、物質世界全体についての意識はもたらされないと述べているからである。つまり、私たちは、「行為にかかわる物的対象」については、「自分たちの身体が影響をやめるであろう地点に事物の限界を定めている」(MM260)。身体能力と関係する限りでの物質世界は、せいぜいその「大部分」に過ぎず「全体」ではない。それは常に私たちの行為の影響力が及ぶ範囲に限られている。

そうすると、知覚に固有の制限を突破して、無際限に広大な領野（世界の全体）につ

⁶⁰ 石井 [2001 : p. 31]

いての意識を与えることを可能にするものは、行為における「秩序」とは異なる「秩序」であることとなる。ではそれはどのようなものか。

2. 秩序

ベルクソンのいう「秩序」の内実を正確に理解しよう。ベルクソンはそれを私たちとは独立の物的実在についての信念の起源として提示している。

「認知される諸実在と異なった諸実在があることを信ずることは、とりわけ私たちの知覚の秩序がそれらに依存し、私たちには依存しないのをみとめることだ。だから、あたえられた瞬間を占める知覚の全体の中には、つぎの瞬間に起こるであろうことの理由が存在するはずである。そして機械論は物質の諸状態の或るものから他のものを引き出すことができると主張するとき、この信念をいっそう明確に言いあらわしているにすぎない。」(MM229-30)

ここで述べられていることを『試論』(DI152-3)で挙げられている記述をもとに一般化すれば次のようになる。 $a \cdot b \cdot c \cdot d$ という条件が与えられており、それらの諸条件に引き続いてPという現象が起こるとしよう。機械論は $a \cdot b \cdot c \cdot d$ の各項を用いて「数学的な演繹」(MM73)を行なう。つまり、 $a \cdot b \cdot c \cdot d$ という条件が任意の瞬間に与えられると、それらの条件をもとに「計算」「計測」を行ない、その次の瞬間にPという現象が生じることを予測できると機械論は主張する。このような、「その瞬間のひとつひとつが、先立つ瞬間から数学的に演繹される」(MM279)という事態こそ、ベルクソンが「秩序」ということで想定していたことである。

では、ここでなされる「演繹」が「数学的」であるとは何を意味するのだろうか。注目したいのはベルクソンの次の発言である。

「この導出は、感覚的諸性質の見かけの異質性の下に、等質的で計算可能な諸要素が発見される場合にのみ可能である。」(MM230)

すなわち、諸現象間の数学的演繹は無条件に成功するわけではない。それには「等質的で計算可能な諸要素」が見出されなければならないのである。ではそうした「要素」はいかにして見出されるのか。それは「空間」を通してである。本来、物理的な諸現象は、量的なものとしてのみならず、質的なもの（感覚的性質を備えたもの）としても与えられる。ベルクソンのいう「空間」とは、物のもつそうした質的な側面を捨象して、その量的な面のみを取り上げることを可能にするのであり、この空間において物は「等質的なもの」と想定されている。この等質的空間と等質的な事物の想定があってはじめて、物理的現象の「数学的導出」が成功するというわけだ。

「[...] 私たちの諸感覚の異質性の背後に等質の物理的宇宙を想定するのを妨げるものは何もない。要するに、物質から、私たちの感覚がその物質にまとわせている具体的な諸性質を、例えば色・熱・抵抗、さらには重ささえも剥ぎとっていけば、等質的な広がり、物体なき空間にじかに向かい合うことになるだろう。」(DI154)

私たちは物質世界に空間を対応させることによって物のもつ量的な面にのみ注目する。それによって、物の質的な側面は無視されることとなる。しかしその恩恵として、諸現象間に対応する数学的関係を想定し、そこに方程式を適用することによって、現象の計測・計算、そして予見ができるようになる。このような条件下での予見可能性を保証するものこそベルクソンが「秩序」と呼ぶものである。

3. 空間

「秩序」によって（何らかの仕方で）物質世界全体がそれとして意識に与えられること、そして、その秩序が空間を通してはじめて物質世界に見て取られるものであることが確認された。ところで、この場合、この秩序を見て取ることを可能にする等質的空間が物質世界全体を意識に与えるのに役立っている可能性があるだろう。実際ベルクソンは、さまざまな対象が、空間化されることによって、意識に「一挙に与えられる」という具体例をいくつも挙げている。例えば時間がその一例である。

「時間を意識の諸状態が繰り広げられるかに見える等質的環境とみなすとき、まさにそのことによって、時間は一挙に与えられるが、これは結局、時間から持続を抜き取ることになる。」(DI73)

あるいはこれと同じことが意識の状態についても言われる。

「それらの〔＝意識の〕諸状態を、それぞれが別々に存在していた空間のなかに、全体として配列すること〔…〕このような用途のために使用される空間こそ、まさに等質的時間と呼ばれているものなのだ。」(DI90)

ベルクソンにとって、心や意識そして時間の本来のあり方——要は「持続」——とは、俯瞰して自由に辿りなおせる線分や地図のようなものを用いて表象されることによって見失われてしまうものであった。

「もともと空間とは、つまるところ、無限可分性図形にほかならない。しかし持続はまるでちがう。」(MM232)

「地図の上に描かれた道を眼でたどる場合、逆戻りして、来た道があちこちで分岐していないか探してみても、何の支障もない。しかし、時間は通過されてしまうような線分ではないのである。」(DI136)。

しかし、そうした時間や意識の本性を無視して、等質的な空間という形式のもと表象することによって、それらを「一挙に与えられた」ものと見なし、「全体として配列すること」ができる。ベルクソンは、これを、その全体を一挙に眺めることができる「地図」を描くことと同様のものとして特徴づけている。それは「軍隊の進軍を地図の上にたどるように、心的活動の過程を図形の上にたどることができる」と信じ込むこと」(DI135)なのだ⁶¹。

⁶¹ Lawlor [2010: p. 32] では次のように述べられている。「したがって、それ〔＝混合的部分 *une partie composante*〕に沿って一つの混合的部分から次の混合的部分へと移動することができる。言い換えれば、私たちは、持続の一つの混合的部分から次のそれへと、かくして、持続の全体へと辿って行くことができる。辿ることをめぐるこの主張がまさしくベルクソンにおける直観とは何かを私たちに教えてくれる。外的な視点ではないという限りにおいて、直観とは、無限の動くものに対して有限なものを介して開かれていることなのである。混合的部分によって持続が示されているのだと言うことができるかもしれない

そうすると次の仮説が浮かび上がってくる。——等質的空間を通して物質世界に秩序が見て取られ、ひいてはその全体を一挙に俯瞰できる物質世界の「地図」のようなものが意識に与えられるのではないか。時間や意識の状態についても同様のことが述べられていたように。

とすると次のことを問う必要があるだろう。物質世界全体を「地図」として描くことを等質的空間はいかにして可能にするのか。物質世界を等質的なものとみなすことと、物質世界全体の地図を描くことのあいだには大きな隔たりがあるように思われる。その隔たりを埋め合わせる必要がまずはあるだろう。

4. 持続——完了相と未完了相

この問いに答えるべく次のことを考えてみよう。等質的空間によって世界の全体を表象する「地図」のようなものが形成できるとして、ではそれとは逆に、なぜ持続するものの「地図」を形成することはできないのだろうか。この疑問に答えるには、持続概念に基づいたベルクソンの時間論とそこにおける「予見」にかんするベルクソンの考えを見ておく必要がある⁶²。

ベルクソンの時間論において重要なのは、過去—現在—未来といった区分が時間の本来のあり方ではないという主張である。「現在」を中心として、過ぎ去った現在としての「過去」、来るべき現在としての「未来」を線分上に位置づけるといった時間の表象は、時間の本来のあり方からの派生態に過ぎず、時間の二次的な表象に過ぎない。ベルクソンの考える時間の本来のあり方である「持続」において本質的なことは「未完了／完了」という「相 aspect」の区別なのだ。

例えば「過去」時制の出来事について述べるとき、私たちは、その過去の出来事を、未知の要素をもたないすでに展開しきった出来事として捉えており、だからこそ、この出来事の全体を一挙に思い浮かべることができる。ベルクソンは次のように述べる。

い。」だが、持続の全体がその部分によって示されるとすれば、それは未完了という持続の本性を無視しなければならないように思われる。Lawlor はここで「いかなる心理状態であっても人格の全体を反映している」(PM169-70) というベルクソンの言葉を過剰に解釈してしまっている。

⁶² 以下の説明は杉山 [2006 : pp. 78-83]、杉山 [2009] に依拠している。

「例えば私たちが過去を、つまり一連の既成事実を思い出すとき、私たちはそれをいつも短くまとめるけれども、だからといって私たちに関係する出来事の性質を変えはしない。それは私たちがその出来事をすでに知っているからである。また心理的事実が、その存在そのものを構成する進展の終局に達したとき、一挙に思い浮かべることのできるような事物になるからである。」(DI149)

このような、そのすべてが展開され切った既知のものという存在様態が「過去」という時制に込められており、これが「完了相」の存在様態の典型例である。

では未来はどうなるのか。未来とは、この語の意味に従えば、未知のものの生成という存在様態、すなわち「未完了相」の出来事となろう。ところが、ベルクソンによれば、「予見」という作業においては、「未来」が過去時制の出来事と同じ完了相の出来事として扱われており、実のところ、すでに「終局」に達した「事物」として捉えられている。どういうことか。

ベルクソンによれば、「予見」においては「現在の諸状態における未来の現象の一種の前駆的形成」(DI153)が行なわれている。それは例えば何らかの「方程式」や「定義」というかたちで「数学的に定式化された法則」を打ち立てる際に私たちが行なっていることである。ベルクソンは次のように述べる。

「数学は、実際、この種の前駆的形成のイメージを私たちに提供してくれる。平面に円周を描くその同じ運動がこの図形のあらゆる特性を生み出す。この意味で、無数の定理が定義のなかに前もって存在している。[...] 私たちはここで純粋量の領域にいる。また、幾何学的諸特性を方程式の形にすることができる以上、図形の根底的な特質を表現する最初の方程式が、単に潜在的にしかそこに含まれていなかった無数の新たな方程式へと変形されることもよくわかる。」(DI153-4)

このように、特定の方程式のうちにそれら無数の図形がすでに「潜在的に含まれている」という「イメージ」が形成されるとベルクソンは述べている。ここに未知の性質や現象はいっさいない。ここにあるのは既知の性質をもつ既知の現象である。つまりここでも、あらゆる要素は展開済みのもの、完了相にあるものとして扱われている。この意味で、予見とは、「おこなわれつつある事実がおこなわれた事実に取り替えられてしまう」(DI165) ことによってはじめて成立する。例えば、心理的事実が予見可能なものと

して想定される場合、私たちはこの心的状態の未来のあり方を「すでに知っている。」というのも、ここには「すでに知られた」方程式があり、この既知の方程式が、特定の数をそこに入力すれば、特定の心理状態を出力するものとして扱われているからだ。そこに見出されるのは、実のところ、既知の性質からなる既知の現象でしかない。

しかし、いやしくも「予見」がその名に値するならば、それが本来は未来時制の出来事についてのものである以上、未完了相のものにかんする予見でなければならない。ところが、ベルクソンによれば、「予見」からは未来が実質的に排除されており、かつその排除によってはじめて「予見」が成立する。つまり、あらゆる要素を展開済みのものとして扱い、完了相にある出来事として捉えることによって、予見が成り立つ。したがって、予見とは、その行ないの本性を見極めていけばいくほど、自らの本性を裏切らざるを得ない行ないである。

そして、過去時制の出来事や予見における未来といった完了相にあるものとは異なる、未完了相の存在様態を指してベルクソンが導入したものこそが「持続」であった。持続においては、いまだ何も展開され切っておらず、そこにあるのはいわば未知なるものの生成である。だから、持続するもの、言い換えれば、未完了相にある展開され切っていないものについてその全体像を地図のように「一挙に与える」ことは定義上不可能となる。これが、持続するものの「地図」が形成されえない理由である。

5. 既知の全体

では、持続するものの地図が形成できないのに対して、物質世界全体についての地図を形成できるのはなぜか。もちろん上のような「前駆的形成のイメージ」をそのまま物質世界から得ることはできない。というのも、前述のように、物理的な諸現象は量的なものとしてのみならず、質的なものとしても与えられるため、それを「純粋量の領域」に還元することはできないからだ。だが、これもまたすでに述べたように、私たちは物質世界を空間化して捉えることができる。つまり、等質的空間を物質世界に対応させることによって、物質世界を「純粋量の領域」として捉えることができる。この想定のもと、空間化された物質世界と対応する「方程式」が提示される。そして、この方程式には、あらゆる瞬間・あらゆる場所における物質世界で生じる現象が潜在的に含まれているとされるのだ。かくして、物質世界にかんしても前駆的形成のイメージが獲得される。

ここで何が行なわれているのかをもう少し詳細に見ていこう。まず指摘しておきたいのは、意識に与えられている物質世界全体とは、経験を取り集めることによって認識をより豊かにしていくプロセスの末にあるのではないということだ。一見したところ、物質世界全体という表象は、この語から連想される「広大さ」といったイメージゆえに、そうした経験の豊饒化の極限にあるもののように思われる。実際、カントにとって世界の全体とはある種の「理念」、つまり「感官においてそれに合致するいかなる対象も与えられない必然的な理性概念⁶³」であった。事情は現象学においても変わらない。「世界の本当の姿は、あくまでもこのような理念として目指されるにすぎず、私たちがそうした地点に実際に到達することはできないのである。」(植村他 [2017 : p.283]) カントや現象学において、世界全体とは、直観においては与えられることのない、無限の予料の対象なのである。

ベルクソンにおいて事情は正反対である。ベルクソンによれば、物質世界全体の表象を可能にする等質的空間とは、概念形成の末に私たちに与えられるものではなく、「直観」によって与えられるものである。つまり、等質的空間とは、推論以前の段階ですでに与えられている形式であり、「必然的でアプリアリな諸関係一般すべてが含まれる潜在的な総体、言うなら原 - 理念性⁶⁴」なのである。ベルクソンは次のように言う。

「質をもたない空間というものを知覚したり、思考したりする [...] この能力は抽象する能力なぞではない。それどころか、抽象が截然とした区別と、概念相互ないし概念の記号相互のあいだの一種の外在性とを前提することに注意すれば、抽象する能力がすでに等質的空間の直観を含むことが分かるだろう。」(DI72-3)

つまり、抽象化といった理性的・概念的な能力によって等質的空間が与えられるのではなく、むしろ、等質的空間を通してはじめて概念的な能力が与えられる。この意味で、物質世界全体が意識に与えられる源泉となる空間は、すでにつねに、私たちのうちに与えられている⁶⁵。

⁶³ 『純粹理性批判』「超越論的原理論」の第二部第二部門「超越論的弁証論」における第一編第二章「超越論的理念について」

⁶⁴ 杉山 [2009 : 37 頁]。

⁶⁵ 「アプリアリな幾何学的図形や関係が記入されていく原一理念的な母体としての空間を、我々は直接即座に、遅れや延期なしに、理解し、見ており、つまりは「直観」しているのだ。言い換えれば、理念的極限としての空間は、我々に今から既に与えられている。この完了相的な既与性 (*déjà-donné*) は空間の本質的性格である。／ベルクソンは理念性に

とはいえ、等質的空間がアприオリに与えられるものであるとしても、この等質的空間を用いて物質世界の全体を表象するにまで至るには、ある種の人間的な働きが必要である。ベルクソンが言うには、「動物はおそらく、私たちのように、自分の感覚のほかには、自分とは区別される、あらゆる意識的存在の共有財産たる外的世界を思い描くことはしないだろう。」(DI103) つまり動物は「物質世界」を他者とも共有されうる自分たちから独立の空間として認めることができない。その理由は「等質的空間という独立した観念がはっきりと現れるようになる」には、「知性をそなえた生物の系列」の上の方に行かなければならないからだ。(DI70-3) 人間も動物も空間という形式を用いて世界を認識している。だが、動物にとっての空間とは、あくまで行動の射程を示すものにとどまっており、数学的演繹を可能にするものにまでは至っていない。

では人間はここで何を行なうことによって物質世界「全体」を表象できるようになるのか。それは、物質を無時間的な相のもとに押し込め、アприオリに与えられている等質的空間に完全に内属させることである。つまり、物質世界全体の表象とは、未知のものの無限の予料によってではなく、すでに常に与えられている空間という既知のものの中で物質世界をとらえ切ることによって与えられる。ベルクソンによれば、予見するとはその予見している事象に現在時において立ち会うことに他ならない。ベルクソンの言葉を借りれば「どんな予見も実は見ることなのである (Toute prévision est en réalité une vision)。」(DI148) それと同様に、未知の要素を捨象された物質世界全体は「全て与えられているもの」として見て取られる。かくして物理的な現象はすべて私たちの手の中にあるとされ、自由に対象化できるものとしていくらかでも俯瞰して眺められるようになる。したがって「全体」として与えられる物質には、神秘的な要素などいっさいない。ベルクソンは次のように言う。

「物質の中には、現に与えられているものより以上のものがあるけれども、異なったものがあるのではない。[...] 物質のこの知覚と物質そのものとの間には、程度

関して、あるいはより適切には、空間という原一理念性について、その現実的で直接即座の現前を語る。すなわち、理念的なものは実在なのであり、理念性が極限として理解されねばならないとして、この極限は既に到達されているのだ。ベルクソンとフッサールの最も深い相違が見出されるのはここだ。」(杉山 [2009 : p. 38]) 「フッサール同様ベルクソンにとっても幾何学的理念性は、ある無限を含意する独特の理念化作用の、その極限として構成されるものである。しかし強調すべきは、ベルクソンにとってそれは、有限な物、完全に終わった (fini) ものへの、終極 (terme) あるいはむしろ終結した (terminé) ものへの、今ここでの逆説的な無限化であるということだ」(杉山 [2009 : pp. 40-1])

の差異があるだけで本性の差異はない […]。それはつまり、物質は私たちがそこに認める力と、別種類の力を及ぼすことはありうべくもないということである。それは不可思議な効力をもつものではないし、また秘めているということもありえない。」(MM74-5)

この意味で、ベルクソンにとっての物質世界全体とは次のような対象である。すなわち、ベルクソンにとっての物質世界全体とはアブリアリに与えられた空間の内部でのみ表象される既知のものである。

6. 結論

さてここで冒頭にて提示した MM161-2 の概略を今一度確認しよう。

- ① 対象が「秩序」をもつならば、知覚されていない対象が「一本の鎖」のように思われる。
- ② 知覚されていない対象が「一本の鎖」のように思われると、知覚されている対象はその鎖のうちの「輪の一つ」であると思われる。
- ③ 上記①・②を通して、知覚されていない対象に「現実性」、つまり「意識に現前する」という性質が「伝達」していき、「知覚されていないすべての対象」についての意識、言い換えれば「物質世界全体」についての意識が与えられる。

以上の考察を踏まえてここにある語の内実を具体化すると次のようになる。①における「秩序」とは、物質世界に「等質的空間」が適用され、物理的現象の予見ができるようになることで認められるものである。このとき、知覚されていない対象から成る「一本の鎖」という表現は、世界における予見可能な物理的事象の集まりを示していると思われる。「鎖」はそれらの事象が一定の規則に従って生じるさまを表現するために選ばれた語であろう。また、「一本の鎖」がそうした集まりを表現しているとすれば、②における「輪」は「知覚されている対象」であるから、それは、予見可能な物理的事象の集まりのうち現に知覚主体に与えられている事象を表現していると思われる。そして、「現実性」が「伝達」していくという③で言われている事態は、諸々の事象を予見可能なものとして捉えることであり、つまり、特定の方程式や定義のうちに諸々の事象を潜

在的に含みこませること（前駆的形成）を意味している。かくして、等質的空間を通して予見されうる諸現象が一つの系列を成し、それが「物質世界の全体」として意識に与えられる。——以上を踏まえてベルクソンの説明を具体化すると以下ようになる。

- ① 諸対象が等質的空間の適用を通して数学的演繹の対象となるならば、知覚されていない対象は予見可能な物理的事象の集まりと見なされる。
- ② 知覚されていない対象が、予見可能な物理的事象の集まりと見なされると、知覚されている対象もそれら予見可能な物理的事象のうちの一つと思われる。
- ③ 上記①・②を通して、知覚されていない対象が特定の方程式や定義の内に潜在的に含まれるものとして捉えられ（前駆的形成）、それらの集まりが物質世界の「全体」として意識に与えられる。

さて、以上の考察から、純粹知覚において与えられる全体の内実も理解されよう。ベルクソンが次のように述べていたことを思い出そう。すなわち「純粹知覚によって物質の全体、あるいは少なくともその本質が与えられる」（MM76-7）。ここでいう物質の「本質」とは、計算・計測可能とされた純粹量的な側面のことである。この側面が与えられることと、物質世界の全体が与えられることを同様のこととして、ベルクソンはここで純粹知覚のもつ内容を規定している。とすれば、ここで与えられている「全体」とは、文字通りの意味での物質世界の全体ではなく、空間化されて質的な側面を捨象された物質世界全体の表象のこととなろう。

そして、純粹知覚において与えられる全体がこの意味のものであるとしたら、両立解釈は矛盾を含まない形で定式化可能である。すなわち、純粹知覚においては、物質世界の現実的な部分と同時に、物質世界全体としての表象が与えられている。これまでの解釈者たちは、この意味での部分と全体の区別をしていなかったために、部分か全体のどちらかが純粹知覚において与えられているという二者択一に（暗黙の裡に）縛られていた。しかし、純粹知覚において物質世界の部分と全体が同時に与えられているという両立解釈の主張には矛盾はない。

第六章 問題解決型の思考実験とその構成の方法

本論文第四章においてベルクソンの色覚論を解明することによって純粹知覚説の内実を規定した。すなわち、それは、一次性質と二次性質を峻別するロック的な考え方を斥ける。言い換えれば、一次性質と二次性質を存在論的に区別される二つの性質とするのではなく、一つの事物のもつ二つの側面とする。このように、一次性質と二次性質の区別を相対化することによって、知覚経験の行為性・超越性・直接性という三つの特性が示された。このとき、色とは、次の双条件文で表現される反応依存的傾向性である。

物体 x が色 F をもつ $\Leftrightarrow x$ は特定の環境で特定の知覚主体に、外界を秩序だった安定的な構造をもつものとして捉え、そこで有益な行為を展開しようという身体的反応 R を引き起こす傾向性をもつ。

これらの主張は、心身問題の困難の（部分的な）解消、そして日常的な世界像と科学的な世界像の両立といった『物質と記憶』の主題と深くかかわっている。では、ベルクソンはどのようにしてこれらの主張を正当化したのか。とりわけ、一次性質と二次性質という歴史的にも広く受け入れられてきたこの概念的な区別を相対化することをどのようにして彼は試みてきたのだろうか。このことを、これまでの考察の成果を援用しつつ明らかにすることが本章の目的である。

もう少し広い視点から問題を捉え直してみよう。上記のような存在論的・認識論的な主張を正当化する際に私たちが用いることのできる手法にはどのようなものがあるだろうか。一つには科学的な実験を行なうという手段があるだろう。実際、昨今の脳科学の成果は、このような実証的な研究を可能にする技術的革新に大いに依拠してきた。しかしながら、周知のように、『物質と記憶』が書かれた時代にはそのような脳科学の「具体的実験 concrete experience」は不可能であった。つまり、仮説を立て、その仮説からある予測を提示し、その予測を検証すべく実験を行なうという手法に限界があった。

しかし、古来より哲学者たちは、科学的・実証的な手法とは異なる、ある「実験」の手段を用いてきた。それが「思考実験 thought experiment」である。すなわち、それは「想像力」を用いてある状況を思い浮かべ、その状況から特定の一般的・理論的な帰結を導くという手法である。(Daly [2010: 101]) そしてベルクソンも『物質と記憶』とりわけ第四章において、上記の純粹知覚説の主張を正当化するときにまさしく思考実験を用いている。ベルクソンは、私たちの意識の主観的様相——ベルクソンはそれを意識の

素早い「リズム」と呼ぶ——を捨象して赤い事物それ自体のもつ微視的な物理的構造を「想像してみよ」と要求する。その想像においては、赤い事物の物理的基盤は、二次性質を一切失った（いわば）無色透明なものではなく、「可感的性質」を保ったまま「おそらくまだ彩られている」。さらに、それは原子や分子といった要素的な固体的な事物ではなく、「流動的」な連続体として立ち現れてくるというのだ。——ベルクソンの言葉を見てみよう。

「仮に私たちが、この持続を伸ばすことができるとしたら、言い換えれば、もっとゆっくりとしたリズムのなかでその持続を生きることができるとしたら、このリズムが緩慢になっていくにつれて、色は褪せて、継起的な印象に伸び広がっていき、おそらくまだ彩られてはいるものの、しかし徐々に純粋な振動とほとんど一致していくのを、私たちは見て取るのではないか。運動のリズムがひじょうにゆっくりとしたものであり、私たちの意識の習慣 (*habitudes*) と一致しているところでは——例えば、音階のうちで低い方の音でそうしたことが起こっているように——、知覚されている性質が、反復される継起的振動へと自ずと分解していくものの、内的な連続性によって互いにつながりあっているのが、私たちには感ぜられるのではないか。」(MM228)

ベルクソンは、自身の思考実験に従えば、赤い事物の物理的基盤としては、このような可感的性質を内在的性質としてもつ連続体が思い浮かべられるはずだ、そしてそれこそが赤い事物の物理的基盤なのだと述べている。ここでは、確かに、一次性質と二次性質の区別は相対化され、一つの事物が両方の側面をもつことが示されている。

しかし、単なる思考実験からこれほどまでに強い形而上学的主張を正しく導くことができるのだろうか。ベルクソンの述べていることは、想像力豊かなサイエンス・フィクションの作家が提示する世界観のようなものに過ぎないのではないかとも思われる。ベルクソンの思考実験には、これほどの強い形而上学的主張を認めるに足る哲学的根拠が欠けているように見えるのである。

本論文最終章の目的は、これまでの考察の成果を援用しつつ、上述のベルクソンの思考実験の根拠を提示することである。あらかじめ述べておけば、そこからは、推論や証明といった類の手法とは異なるベルクソンに独自の手法が見出される。それは「問題解決型の思考実験」とでも呼べる手法である。それは哲学で広く用いられる思考実験とい

う手法に一定の規範性を要求する。つまり、思考実験には、よいものと悪いものがあるということだ。ではその規範とはいかなるものか、思考実験とはどのようなにされるべきだとベルクソンは考えたのだろうか。以上のことを明らかにするのが本章の目指すところである。

1. ベルクソンの思考実験の特徴

まずはベルクソンが『物質と記憶』第四章で行なっている思考実験の特徴を一つ示したい。彼は自らの提示する思考実験から得られる「ヴィジョン」について次のように述べている。

「[...] あなたは物質から一つのヴィジョンを得るのであって、それを得ることはあなたの想像力にとってはおそらく骨の折れることであるが、このヴィジョンは純粋なものであり、外的知覚においてあなたが生の欲求に駆られて物質に付け加えてしまっているものから解放されたヴィジョンなのだ。」(MM234)

前述のように、思考実験において用いられる特有の能力は「想像力」である。その意味で、想像力を上手く働かせ特定の状況を正確に思い浮かべることができるかどうかということに、思考実験の成功の鍵があるといってもよいだろう。しかしながら、ベルクソンによれば、彼の思考実験においては、そのシチュエーションを想像するのは「骨の折れること」なのである。つまり、上述のベルクソンの思考実験は、想像しがたいものを想像することを要求する思考実験なのである。

なぜ彼の思考実験のシチュエーションは想像しがたいものなのだろうか。ベルクソンは上の引用部において、想像されるべきヴィジョンが「外的知覚においてあなたが生活の欲求に駆られて物質に付け加えてしまっているものから解放されたヴィジョン」であると述べている。ここから理解されるように、ベルクソンの思考実験が思い描くよう要求するヴィジョンが想像しがたい理由とは、知覚主体がこの世界で生きるべく作り上げている世界の見方によって、その想像が妨げられることに由来する。それによって、赤い色の知覚の物理的基盤それ自体が流動的・連続的で可感的性質をもつという姿が想像しがたくなっているのである。ベルクソンはその困難の内実を次のように説明している。

「通常〔可感的性質と物理的運動とを〕結びつけることを妨げているのは、運動を、原子などといった要素につなぎ合わせる習慣を私たちが身につけているからであり、この習慣によって、運動それ自身と、その運動が縮約されることによって生じる性質とのあいだに、それらの固体性が介在させられているからなのである。私たちは、日常的な経験において、動いている物体を目にしているため、要素的な運動があつて、そこに性質が還元されるということを擁護するためには、少なくとも微粒子が必要だと思い込んでしまう。この場合、私たちの想像においては、運動はもはや偶然的なもの——位置の系列や関係の変化——に過ぎなくなってしまう。そして、安定したものを不安定なものに取って代わらせるのが私たちの表象の定め (loi) であるために、私たちにとって重要で中心的な要素となるものは原子であることとなり、その原子の運動によってなされることといえどもはや相次ぐ位置をつなぎ合わせることでしかない。」(MM228)

私たちは要素的・固体的なものとして事物を捉えるように習慣づけられている。そのため、不安定なもの、言い換えれば、流動的・連続的なものは捨象して、安定したものでもってさまざまな事態を表現するように駆られるのである。これが、ベルクソンが想像することを要求する事態が想像しがたい理由である。

なぜ私たちにはこのような習慣があるのか。すでに確認したように、それは、知覚主体が有益な行為を成し遂げるべく外界を知覚しているからであった。つまり、知覚経験に備わる行為性という性格こそが、ベルクソンの思考実験の妨げとなっているのである。だからベルクソンはこの行為性の影響力を抑圧した事物像を何とかして読者に思い浮かべてもらえるようにしなければならない。

ところで、このようなベルクソンの自説に対する態度は、本論文の第二章で示されたものと類似している。本論文第二章では、ベルクソンによる過去の実在性の肯定の試みを見た。ベルクソンは、現在だけが実在するという現在主義を斥けて、過去（の記憶）が実在することを肯定した。しかし、彼によれば、現在主義と過去の実在論との関係は、互いにもっともらしいが両立しない二つの説といった関係にはない。むしろ過去の実在論の方が圧倒的に分が悪いのであった。なぜならば、私たちの認識それ自体に、有益な行為を成し遂げようとするなかで、過去の実在論を棄却し、現在主義を肯定するような機構が備わっているからである。そこでベルクソンが訴えた方法論が仮象論であった。つまり、行為の有益性を確保しようとする知覚経験において、過去の実在性を否定し、

現在主義を肯定するに至る考え方ならびに概念・理論がどのように生じるのかを辿り直すという方法をベルクソンは用いたのである。

この状況と、ベルクソンによる当該の思考実験の困難さとのあいだには類似性がある。ベルクソンの思考実験において賭けられているのは、純粹知覚説が正しいのかそれとも実在論が正しいのかということである。しかし、純粹知覚説の肯定へと結びつくような事態を思い浮かべることはひじょうに困難である。その理由は、有益な行為を成し遂げようという知覚経験の構造上、流動的・連続的で可感的性質を備えた物理的基盤の想像という要求は斥けられ、固体的・要素的で安定したものとして物理的基盤が思い浮かべられがちであるからだ。したがって、純粹知覚説と実在論は、互いにもっともらしく、競合する二つの仮説ではない。となると、ベルクソンは、純粹知覚説の要求する事物像を想像してもらえるように、何らかの方法に訴えなければならない。そして、その方法もおそらく上述の仮象論なのである。

2. 実在論と観念論の起源

ベルクソンが仮象論によって純粹知覚説の正当化を行なおうとしているということは、具体的には、純粹知覚説を斥けるような経験の性向を捉え、その性向に従って概念や理論が構成され、その概念・理論の正当性が確たるものとして受け入れられる過程を辿り直すということである。ではそれは具体的にはどのようなプロセスなのか。ベルクソンは、このプロセスを、力動論と機械論の対立からカントの批判哲学へと至る哲学史的なプロセスとして（MM235-8）、あるいは、物質についての科学的探究という科学史的なプロセスとしても（MM215-26）、また、ゼノンのパラドックスがパラドックスとして成立するプロセスとしても（MM209-15）説明している。つまり、ベルクソンは、純粹知覚説が斥けられ、実在論が肯定されるプロセスを、物質にかんするいくつかの探究が、さまざまな方向から互いに影響を及ぼすことによって成立するものと捉えているのだ。しかし、ここではその一つ一つを詳細に分析するのではなく、本論文で中心的に扱ってきた実在論と観念論の対立という点に絞ってそのプロセスを取り出すこととした（MM239-51）。それは以下の三つの側面から成る。

① 物質の完了化

まず重要なことは、「純粹知覚説を斥けるような経験の性向」とはどのようなものかということである。この点については、本論文第四章の後半部ならびに第五章ですでに示されている。すなわち、一次性質と二次性質とにかかわらず、知覚経験には、現れているものを越えて対象を自らに与えようとする性向がある。例をあげて確認していこう。まず、赤い事物を見たとき、知覚経験において、赤い事物の現われの根底にその物理的基盤があるということが志向される（第四章）。また、〈こうしたらこうなる〉といった行為の連鎖に関係する事物群が措定される（第二章・第五章）。そして、物質世界の全体の表象が与えられる（第五章）。このように、知覚主体は、直接的な現われを超越して、直接現れてはいない事物群を捉えようとする性向をもつ。また、第五章で示されたように、この知覚経験の超越的性格の働きは、事物を量的なものとして捉え、脱生成化・脱時間化させるものである。このようにして、物質世界を完了相のもとにとらえ切ろうという働きが知覚経験にはあるのだった。

このように、直接的な現われを越えて事物を完了相のもとにとらえ切ろうという働きが事物を知覚する働きには備わっている。繰り返しになるが、この性格を知覚経験がもつ理由は、有益な行為を成し遂げるべく外界を把握することが知覚の本来の務めであるからだ。知覚経験とは、虚心坦懐に外界を眺め、それを忠実に写し取ることを目指しているのではなく、自らの行為の対象として外界をとらえることを目指している。そのためには、外界を、安定した構造を備えた規則的で秩序をもったものとして捉えた方が都合がよい。だから、知覚経験には、物質世界を完了相のもとにとらえ切ろうという傾向があるのだ。

② 物質と知覚意識の分離

事物を完了相のもとにとらえ切ろうとする知覚主体は、行為の対象としての物質の本質を、徹底的に安定的・規則的なものとして把握しようとする。そのため、物質に備わっているように見える質的な側面を捨象して、物質を計測可能な純粋量の領域のものとして扱う。これが物質世界を脱生成化することであり、この点については本論文第五章で明らかにした通りである。すなわち、物がもつ（ように見える）計算・計測できない側面、つまり質的な諸要素が無視され、計算・計測可能な量的な側面が注目され

る。その結果として、物質世界は秩序をもつものとして立ち現れてくるのである。この量的な側面がロックの述べるような意味での一次性質である。しかし、物質から引き離れた質的な側面をなきものにはできない。そこで、この質的な側面については、物質とは別の存在者としての地位が与えられることになる。それが二次性質なのである。

かくして、一次性質と二次性質との分離によって、物質と知覚意識とが数的・質的に異なる二つの存在者として、別々に立てられるような概念体系が構築される。そして、この分離にもとづいて、物質とはどのような存在者なのか、その物質という存在者を私たちはどのように認識しているのかといった哲学的問いが立てられるのである。

③ 实在論と観念論の二者択一

これらの哲学的問題に答えようとして提示されるのが、实在論と観念論という二つの学説である。本論文第一章で見たように、一方で、实在論は、一次性質のみをもつ物質から二次性質をもつ知覚意識を導出しようとする。他方で、観念論は、知覚意識の方からはじめて、物質世界を構成しようとする。このとき、両者とも、物質と知覚意識とを別々の存在者として扱う概念体系のもとにある。しかし、いずれの説も、物質と意識とのあいだの移行を説明する際に、何らかのデウス・エクス・マキナに依拠せざるを得ないというのがベルクソンの見解であった。

それでも、实在論と観念論は、私たちにもっともらしいものと見える。なぜならば、知覚経験の機構に物質世界を安定的なものととらえる性向があり、そして实在論と観念論の基づく概念的な体系がこの知覚経験の性向に従って成立しているからである。この意味で、实在論と観念論は互いにもっともらしい二つの説であり、この対立はアンチノミーと呼べるものを形作っている。

このような状況下では、实在論と観念論とは異なる選択肢——例えば純粹知覚説——に気づく機会すら私たちからは失われている。しかも、一次性質と二次性質の分離という概念枠においては、もはや实在論と観念論以外には選択肢はない。だから、哲学者たちは、この概念枠組みにおいて、一方の立場の限界がわかるともう一方の立場に身を移すという形の二者択一を強いられてもいる。かくして、实在論か観念論かという二者択一のもと終わりなき哲学的論争が繰り広げられ続けるのである。

3. メタ理論としての純粹知覚説

さて、ここで、本論文第一章で提起された問題を再確認しよう。——ベルクソンは純粹知覚説を正当化する際に、最善の説明からの推論と呼ぶべき方法に訴えている。しかし、最善の説明からの推論において説明項の候補となる諸説は競合している必要がある。だから、競合している理論とはまったく異なる新説を持ち出して、その説明力の高さを好意的に評価するならば、その新説がなぜ他の仮説と競合しうるのかは少なくとも説明しなければならない。当該の議論においては、競合している仮説が实在論と観念論、そして新説が純粹知覚説に相当する。つまり、ベルクソンは、純粹知覚説がなぜ他の二つの理論と競合しうるのかを説明する必要がある。

ところで、このような状況と似通った状況が本論文第三章の一般観念論においても示された。すなわち、ベルクソンによれば、概念論と唯名論は、一般観念の獲得プロセスを説明できない。それにもかかわらず、概念論と唯名論の二者択一が私たちに強いられている。そこでベルクソンは、一般観念の獲得プロセスを説明する理論として、意識の諸平面の理論を提示した。実際、意識の諸平面の理論においては、一般観念の獲得プロセスはひじょうに上手く説明できる。とはいえ、意識の諸平面における意識の運動などといった、概念論者と唯名論者にはまったく思いもよらなかった理論によって一般観念の獲得を説明するというこの方法には問題がある。つまりベルクソンはなぜ概念論と唯名論といった仮説と意識の諸平面の理論が競合しうるのかを説明しなければならない。そこでベルクソンが依拠したものは、概念論と唯名論において隠されていた認識様態（意識の諸平面における意識の運動性など）が、一般観念の獲得のプロセスのみならず、概念論と唯名論の二者択一が成立するプロセスをも説明するものとして、意識の諸平面の理論を導入するという手法であった。より一般的に言えば、意識の理論についての理論（意識のメタ理論）を作りあげることによって意識の理論を作り上げるという独自の哲学的方法をベルクソンは用いていたのである。

この哲学的方法は、实在論と観念論の二者択一においても用いられている。ベルクソンの色覚理論は、知覚経験の行為性に着目する形で提示されていた。そして、それと同時に、この知覚経験の行為性こそが、物質世界を安定した構造をもつ行為の対象として捉える中で、一次性質と二次性質を分離し、物質と知覚意識を別々のものとして立て、实在論と観念論の対立を生み出すのであった。つまり、ベルクソンは、知覚経験の理論（实在論と観念論）についての理論（メタ理論）を作り上げることによって知覚経験の

理論を作り上げている。

第三章でも述べたように、ベルクソンにとっては、既存の哲学的対立をそのまま引き受けて、対立する複数の仮説——概念論対唯名論とか实在論対観念論といった対立——の中のどれかに軍配をあげるといったことは哲学の務めではない。そうではなく、既存の哲学的対立の基づく概念の成立を辿り直すことによって、なぜそのような哲学的立場が可能であるのかを明らかにすることを通して、新たな概念を創造すること、いわば「仮象論的なメタ理論」に基づいた概念の創造こそが哲学の務めなのである。実際ベルクソンは「形而上学入門」の中で次のように述べている。

「概念はふつう対をなし、対立する二つのものを示している。どのような具体的实在も、相反する二つの視点から同時に見ることができ、したがって対立する二つの概念に包摂できる。ここから、定立と反定立を和解させようとするむだな努力が延々となされるが、その理由は簡単である。概念あるいは視点でものをつくことは決してできないからだ。しかし直観でとらえた対象からは、たいていの場合、二つの反対概念へ容易に移行できる。そのように实在から定立と反定立があらわれることがわかるので、両者がどう対立しどのように和解するかも同時に把握できる。」
(PM198)

もちろん、本論文の第一章で示したように、ベルクソン自身、最善の説明からの推論や演繹的な推論にも依拠しているし、その際には、实在論の用いている推論を分析するといったことを行なってもいる。だから、こうした分析や定義や推論といった手続きがまったく無効なのだと彼は言いたいわけではない。だが、それでも、この手続きそれ自体が目的となり、上の意味での概念の創造がないがしろにされている時には、それは哲学的な試みとは言えないとベルクソンは述べるだろう。「[...] 哲学するということは、「批判」が定立と反定立という対立を外から見て取るこの具体的な实在の内部に、まさに直観の努力によって身を置くことである。」(PM224)

そして、上述の仮象論的なメタ理論を通して、ベルクソンは、当該の思考実験の困難を緩和しようとしている。つまり、物質それ自体を可感的性質をもつものとして想像することは、物質と意識を鋭く対立させる既存の概念的枠組みによって困難になっているのだ。だから、その概念枠組みの成立の歴史を遡り、实在論と観念論の二者択一の成立をも説明できるような理論として自身の知覚説を提示することによって、ベルクソンは、

想像力の力能を解放しようとしている。このことが、色の物理的基盤を想像させる際にベルクソンが提示する思考実験の土台となっている⁶⁶。

4. 問題解決型の思考実験——ベルクソンにとってのよい思考実験

以上で本章冒頭の問いには答えが与えられた。以下では、このベルクソンの試みに含意される事柄を一つずつ明示したい。改めて述べれば、ベルクソンにとっては、既存の哲学的対立の基づく概念の成立を辿り直すことによって、新たな概念を創造すること、つまり、仮象論的なメタ理論に基づいた概念の創造こそが哲学の務めであった。そして、この概念創造の試みによって、問題を解消ないし解決していくことが哲学にはできる。

このような哲学観には、ある種の哲学的方法に対する批判が含意されている。本論文第三章で見たように、その一つは、既存の問題を既存の理論ごと引き受け、そこにある概念を分析し、出来合いの説のどちらかに軍配をあげて満足するような哲学的試みへの批判である。観念論や実在論、そしてそれらの提示する概念枠組みをそのまま受け入れて、水槽の中の脳やメアリーの部屋の思考実験の提示する困難を乗り越えようとする人々は、遅かれ早かれ、デウス・エクス・マキナに頼らざるを得なくなる。それは、矮小化された意識概念をそのまま受け入れ、その枠組みの中でのみ、哲学的問題について考えているからだ。

ベルクソンは、観念論者や実在論者、そして両者が想定している形而上学的・認識論的な概念を前にして次のように応答するだろう。この思考実験においては、物質と知覚意識とを分離して考える概念体系が用いられている。しかし、そのような概念体系にお

⁶⁶ 本論文六章で扱っている『物質と記憶』第四章の議論を一つの「思考実験」と捉え、その内実を解明している先行研究として平光 [2018] がある。平光はこの思考実験を、「ベルクソンの意識が縮約から解放され、extension の経験へ到達する」（平光 [2018 : 353 頁]）思考実験と解している。そして、この思考実験が基づく方法は「私の意識を取り去る」こと（同上）である。あるいは Lawlor [2010] はこの思考実験を、私たちの外部へと赴く「拡張 dilation」の運動として捉えている。「このような拡張によってもはや生の必要の要求に従ってものを見ないようにされるのであり […] このように〔生の必要を〕抑え込むことによって私は生活の要求や […] 分割可能な空間からも自由になる。」

（Lawlor [2010: p. 34]）Lawlor によれば、このようにしてさまざまな階層に位置づけられる存在者のあいだの運動が可能になるのであり、これがベルクソンに独自の方法である直観の働き（の一つ）である。本論文は平光と Lawlor の述べる類の独自の手法は用いられていないと解している。つまり、経験のもつ性向に従って概念が成立する過程を辿り直すことによって、概念を規定し直し、思考実験をモデリングし直すことがベルクソンの方法である。

いては、解決不可能な問題が多く残される。このような概念的枠組みを捨て去って、物質と知覚意識が一致するような概念体系を採用しよう。そこでは、解決不可能に見えた多くの問題が解消されているだろう。——このようにベルクソンは解決不可能な問題を提示し哲学者の頭を悩ませるだけの思考実験を目の前にして、ただその思考実験の概念的枠組みの中にとどまり沈思黙考するといったことはしない。むしろベルクソンは積極的に新たな概念体系を導入することによって、その解決不可能性をなきものにしていく。ベルクソンは次のように述べる。「形而上学の諸問題はおそらく提出の仕方が悪かったのであり、それゆえまさに「永遠なもの」、つまり解決不可能なものと思う必要はもうないのだと私は考えた。」(PM8) このことを可能にし、新たな概念体系を導入する方法こそが仮象論によるメタ理論の構築なのである。つまり、ベルクソンは、既存の概念の成立それ自体を説明するというメタ理論を提示することで思考実験を改良しているのだ。これが意味するのは、ベルクソンにとってただ単に解決不可能な問題を提示するだけの哲学的主張やそれに基づいた思考実験(水槽の中の脳やメアリーの部屋はその例である)は悪い思考実験なのであり、彼にとってのよい思考実験とは、設定された状況の中に当の問題の解決策が顕在的ないし潜在的に含まれる思考実験なのである。

5. 結論——仮象から実在へ

それにしても、なぜメタ理論を作り上げると、それが思考実験の改良につながるのだろうか。より具体的には、意識の理論についての理論を作りあげることによって意識の理論を構築すると、なぜそのメタ理論が既存の哲学的問題を解決するような思考実験の構成を可能にするのだろうか。他の学問の問題と類比的にとらえると、この奇妙さは際立つ。例えば、邪馬台国はどこにあったのかという歴史学上の問いを考えてみよう。一方で、この問いに対しては「畿内説」がある。他方で「九州説」もある。これら二つの対立する仮説がある場合、この対立を決するのは、畿内説と九州説とがどのように成立し、二つの説が対立する議論場を作り上げていったのかを辿り直すことそれ自体によってではない。そうではなく、歴史的な資料を発見することや、遺跡を発掘することであろう。つまり、歴史学上の問題を解決することは、現実世界のなかにその説を立証するような証拠を探し出し、それらを人々に示すことによってなされるのであり、メタ理論を作り上げることによってではない。確かに、畿内説と九州説が自らの正当化に用いて

いた材料を列挙し、その正当性を吟味するという手続きは、歴史的に有効な手段となりうる。しかし、その作業を通して得られるものは、畿内説と九州説の成立にかんする説明に他ならないのであって、「邪馬台国はどこにあるのか」という当の問題を解決する新説にはならない。このように考えると、意識のメタ理論がそのまま意識の問題の解決策となるということはまったく自明なことではない。ひいては、なぜメタ理論の構築とそれによる思考実験の改良という試みが、哲学的論争においては同時並行で達成されるのかが一つの謎として立ち現れてくる。

私はこの問いに対する明確な解答を持ち合わせていない。したがって、以下で述べることは単なる仮説にしかならない。その仮説とは、ベルクソンによる思考実験の改良によって発見されるものが「實在」という探究の場だからである、というものだ。ベルクソンの意味での悪い思考実験は、解決不可能な問題を提示することによって、時として、哲学という営みを単なるパズルゲームのようなものにしてしまう。そうして、私たちは、現実的な事象の解明という哲学本来の目的を忘れ去り、現実とはまったく対応しない諸概念をひたすら操作するという営みにふける。ベルクソンが思考実験の改良によって行なったことは、このような抽象的なパズルゲームから目を離して、「實在」を見るように促すことではないか。つまり、上の意味での歴史学が現実世界を相手にし続けるのとは異なり、哲学は、時として、探究の対象である實在それ自体を忘れ去ってしまうという特性をもつ学問なのである。哲学は常に現実から仮象へと落ちていく可能性を秘めているのだ。

だが、仮に、實在を知覚することによって概念が作られ、その知覚経験を通して作り上げられた概念が仮象を生み出すような道筋を見出すことができるとすれば、仮象と現実のつながりを見出すこともできる。そして、その仮象と現実を行き来する道を辿り直すことで、再び現実に復帰することができる。言い換えれば、仮象が生み出されるプロセスを辿り直すことで、探究すべき現実の姿を回復させることができる。それが、メタ理論の構築とそれによる思考実験の改良という試みが、哲学的論争においては同時並行で達成されうるとベルクソンが考えた理由ではないだろうか。

結論部では、本論文の内容を要約し、本論文序論で提示したベルクソン解釈上の問いに答えを与える。そのうえで、ここで提示した仮説をまた別の角度から説明してみたい。

結論

まず各部・各章の内容をまとめよう。

第一部では、ベルクソンが『物質と記憶』で依拠している哲学的方法が示された

第一章の前半部では、ベルクソンが純粹知覚説を肯定する議論を論点先取の虚偽から救い出し、それが最善の説明からの推論であることを示した。また、後半部では、石井の研究を批判するという形で、ベルクソンが『物質と記憶』第一章末尾で提示している議論の内実を定式化した。それは、實在論の推論を分析することによって組み立てられた演繹的な推論として特徴づけられる。つまり、序論で提示された、ベルクソンが比喻をもちいる哲学者であるとか、直接的な経験をそのまま實在と見なすといったような批判からは、少なくとも部分的にはベルクソンを擁護することができる。しかし、これらの特徴づけ（最善の説明からの推論や演繹的な推論）は、ベルクソンが自身の用いた方法論について述べる際に使う「人間的な経験の向こう側」とか「経験の源泉」といった語の内実を明らかにするものではなく、ひいては、そうしたところに「赴く」とする彼の議論の道筋の内実を解明するものではない。

第二章では、過去の実在性を肯定する際にベルクソンが用いている哲学的方法の内実を示した。その際、「私の現在」という時間経験の概念に私たちは着目した。Worms やドゥルーズの解釈では、ベルクソンは、直接的な経験に過去の記憶が含まれることから、過去が實在するという推論を行なっていることとなる。しかし、ベルクソンの議論を詳細に辿ると、彼が行なっていることはまったく別のものであることがわかる。すなわち、ベルクソンは、「私の現在」という直接的な時間経験を起源として、そこから、過去の実在論が否定され、現在主義が肯定されるに至るプロセスを辿り直している。このようにすることで自然的な世界の見方を転換するという方法——私はそれを「仮象論」と呼ぶ——がベルクソンの哲学的方法である。つまり、ベルクソンにとっての直接的な経験とは、そこに含まれるものの實在性をそのまま肯定するようなものではなく、むしろ、仮象の源泉として位置づけられる。

第三章では、『物質と記憶』の一般観念論をめぐる、意識の諸平面の理論の機能を明らかにした。意識の諸平面の理論は、一般観念の獲得という現象を説明しようとする概念論や唯名論よりもこの現象を上手く説明できることによってだけ肯定されているように見える。より具体的には、意識の諸平面論は、概念論と唯名論の循環を解消する理論として肯定されているように思われる。しかし、実のところ、意識の諸平面の理論それ自体は、一般観念の獲得プロセスにかんする概念論と唯名論の説明に見出される循環

の解消には貢献していない。そうではなく、意識の諸平面の理論は、概念論と唯名論の二者択一という意味での循環からの脱却に貢献していることを私は示した。その際、ベルクソンは、概念論と唯名論の用いる概念体系が形成され、概念論と唯名論の二者択一を迫られるに至るプロセスを示すために意識の諸平面の理論を導入している。つまり、意識の諸平面の理論は、一般観念の獲得プロセスを説明する理論であるだけでなく、既存の哲学的論争がどのように成立するのかを説明するメタ理論でもある。ここから、意識のメタ理論を作り上げることによって意識の理論を作り上げるというベルクソンに独自の哲学的方法を示した。

第二部では、純粹知覚説の内実を規定した後に、その純粹知覚説を肯定する際にベルクソンが用いている方法を示した。

第四章では、ベルクソンの色覚論の内実を規定した。それは一見したところ、今日ではすでに力を失った色の実在論であるように思われる。そこで、投影説、傾向性理論、実現基盤機能主義といった諸説との比較を通して、ベルクソンの色覚論が、傾向性理論の一種である反応依存性理論に似ていることを示した。また、ベルクソンは、色という傾向性を行為の傾向性で説明するため、傾向性理論に向けられる無限後退の批判を回避できている。またベルクソンは、色の恒常性という現象についても、行為の有益性を目指すという知覚経験の特性によって説得的に説明する。このようなベルクソンの色覚論においては、一次性質と二次性質という存在論的な区別は相対化され、両者は一つの事物のもつ二つの側面とされている。そして、知覚経験それ自体は、行為性・超越性・直接性という三つの特性をもつものとして規定されることとなる。

第五章では、純粹知覚において与えられているのは物質世界の部分か全体か、という解釈上の問いを扱った。私は、物質的対象の全てが知覚に与えられるとベルクソンが述べている箇所の意味を明確化して物質世界の全体が与えられるプロセスを具体化することによって、そこで与えられている全体の内実を規定した。そのプロセスとは、物質世界の質的な側面を無視して量的な側面に注目するというもの、言い換えれば、等質的な空間という形式を用いて物質世界を脱生成化・脱時間化していくというプロセスであった。そして、このプロセスを通して与えられる物質世界全体とは全体の「表象」である。したがって、純粹知覚において与えられているのは、物質世界の実質的な部分と、物質世界全体の表象であり、ここには矛盾はない。

第六章では、第四章と第五章で内実の規定された純粹知覚説がどのように肯定されているのかを示した。その際、第一部で明らかにされたベルクソンの哲学的方法を反映さ

せる形で純粹知覚説の肯定の方法を示した。その方法とは、仮象論を用いたメタ理論の構築というものであった。つまり、ベルクソンは、行為のために外界をとらえるという知覚経験の性向によって、物質と知覚意識を峻別する概念枠組みが形成され、实在論と観念論の二者択一を強いるような哲学的問題が成立するプロセスを辿り直す。このようにして、物質と知覚意識の存在論的な区別を相対化し、両者を一つの事物のもつ二つの側面として扱うことが可能になる。そして、この新たな概念枠組みのもと、色の物理的基盤を想像させる思考実験を行ない、私たちが知覚対象を直接的に見て取っているという純粹知覚説の主張が肯定される。ここから、ベルクソンにとっての思考実験のよし悪しの基準が示された。すなわち、悪い思考実験とは、解決不可能な問題を提示するだけの思考実験である。ベルクソンは、そのような悪い思考実験に用いられる概念を再規定することによって思考実験の設定の内部に哲学的問題に対する解答が見出されうるような思考実験を作り上げる。このいわば問題解決型の思考実験がベルクソンにとってのよい思考実験である。

以上から本論文序論で提示された問題に対する解答を示そう。本論文が答えるべき一つめの問題は以下のものであった。

（１）純粹知覚説は、今日的な見解と比較してみると、色覚理論としてはひじょうに危うい主張をしているように見える。しかし、この純粹知覚説の主張には、心身問題の困難の緩和という伝統的な問題や、日常的な世界像と科学的な世界像の両立という今日的な問題に対するベルクソン『物質と記憶』の解答が賭けられている。では、純粹知覚説は、この現代的知見からの乖離という点において、即座に斥けられるべきなのか。

この問い（１）に対する解答は次のようになる。――序論ならびに第四章で確認したように、純粹知覚説は、一見したところ色の实在論という今日では力を失った色覚論の一種に見える。しかし、『物質と記憶』の色覚論を詳細に見ていくことによって、純粹知覚説は、色の实在論と非实在論のあいだを行く中道派の理論、具体的には、知覚を行為との連関のもと捉える傾向性理論に相当するということを本論文は明らかにした。そして、このベルクソンの色覚論は傾向性理論の難点を（少なくとも部分的に）克服している。この意味で、即座に斥けられるべきではない、一考に値する選択肢としてベルクソンの色覚論を位置づけることができたはずだ。したがって、ベルクソンの色覚論を即

座に誤りと判断するべきではない。ひいては、心身問題の困難を緩和する、科学的な世界像と日常的な世界像は両立可能なものであるといったベルクソンの主張は、少なくとも、純粹知覚説が即座に斥けられるべきだという理由では否定されるべきではない。本論文においては、これら二つのベルクソンの主張それ自体の妥当性について詳細に吟味することはできないが⁶⁷、それらが基づく純粹知覚説が即座に斥けられるべきではないということだけは示したつもりである。以上が（１）に対する解答である。

もう一つの問いは次のものであった。

（２）ベルクソン『物質と記憶』の哲学的方法は、「人間的な経験」を越えて経験の「源泉」へと赴くものと言われている。このようにして肯定されている純粹知覚説は単なる「証明」によって肯定されているのではないようだ。では、『物質と記憶』におけるベルクソンはいかなる哲学的方法によってこの純粹知覚説を肯定しようとしたのか。

この問い（２）に対する答えは次のようになる。——ベルクソンが『物質と記憶』で依拠している哲学的な方法は、仮象論によってメタ理論を構築することによって思考実験をモデリングし直すという方法である。まず、仮象論とは、知覚経験の性向を特定し、その性向によって、いかにして特定の哲学的立場とそれらの依拠する概念が成立するかを辿り直すという方法である。そして、概念形成の過程を辿るという方法によって提示されるものは、単なる意識の理論ではなく、意識の理論についての理論（意識のメタ理論）である。例えば、過去の実在論と現在主義の依拠する概念が作られ、それらの概念に基づいて哲学的問題が立てられるプロセスが示されたり（本論文第二章）、あるいは、概念論と唯名論の依拠する概念が作られ、それらの概念に基づいた一般観念論という哲学的問題が成立するプロセスが示されたり（本論文第三章）、そして、実在論と観念論が依拠する概念が作られ、それらの概念に基づいて物質の本性やその物質を知覚するという経験の本性についての哲学的問題が立てられるプロセスが示されたりする（本論文第六章）。とりわけ、物質とその知覚の本性をめぐるこの三つめのメタ理論が、本論文が明らかにしようとしてきた純粹知覚説の正当化の方法という点において重要で

⁶⁷ 心身問題の解消や日常的な世界像と科学的世界像との両立という論点の解明については、今日の科学的な見解などの現代的な視点からのベルクソンの再評価といった研究手法も有効だろう。そのようなことを実際に行なっているのが平井他編 [2016]；平井他編 [2017]；平井他編 [2018] である。

ある。すなわち、一次性質と二次性質の存在論的な区別という哲学史において（そして科学的な色覚論もこの区別に依拠していることに鑑みれば科学史においても）長いあいだ受け入れられてきた伝統的な考えを相対化して、その区別を概念上の区別に過ぎないと見なす純粋知覚説の主張を肯定する際に、この方法が以下のように用いられている。知覚経験とは、有益な行為を成し遂げるべく、物質世界を、秩序といった安定した構造をもつ存在者として捉えようとするものである。このような性向をもつ知覚経験は計測・計量可能なもののみから成る存在者として物質世界を把握しようとする。これによって、物質と意識が概念的にも存在論的にも区別され、そのようにして一次性質と二次性質という概念、ならびにその概念に基づいた物質の本性とその物質を知覚するという経験の本性にかんする哲学的問いが提出される。この哲学的な概念と問題の形成過程を示すことによって、物質とその知覚の本来の姿が見失われ、解決不可能な問題が立てられるプロセスが明示される。これによって、一次性質と二次性質の存在論的な区別は相対化され、相対化された概念上の枠組みに基づいて形而上学的な思考実験が立て直される。以上が、「仮象論によってメタ理論を構築することによって思考実験をモデリングし直すという方法」であり、これこそがベルクソンが『物質と記憶』で用いている哲学的方法である。以上が（２）に対する答えである。

以上が序論で提示された問い（１・２）に対する本論文の解答である。以下では（２）に対する解答に向けられるであろうさらなる批判をあげ、その再批判に応答することで、本論文の結論をより明確に提示したい。そこで思い出してもらいたいのが、序論で提示したブロとデルボスによる純粋知覚説批判である。彼らは、「純粋知覚」ということでベルクソンが述べているものを「直接的な経験」として位置づけたうえで、そのような純粋知覚をめぐるベルクソンの主張の哲学的な正当化が十分になされていないのではないかと問う。信念や観念といったものを一切媒介しない経験にかんする主張とはどのような意味で根拠のあるものとなりうるのか。序論で提示した形で改めて述べ直せば、「人間的な経験の向こう側」とか「経験の源泉」といったものに、なぜ・どのようにしてベルクソンは到達したと言えるのか。

確かに、この問いの「どのように」という部分に対してはすでに答えを提示した。すなわち、それは、仮象論によってメタ理論を構築することを通して思考実験をモデリングし直すという方法である。しかし、ここでブロとデルボスの批判を改めて見た理由は、問い（２）に対する本論文のこの応答を受け入れたうえでも、二人の純粋知覚説批判は

まだ有効であるように見えるからだ。特に上記の問いの「なぜ」の部分については次のような再批判が提示されうるように思われる。——仮に仮象論によってメタ理論を構築することを通して思考実験を問題解決型のものとしてモデリングし直すという方法にベルクソンが依拠しているとして、そのようにしてモデリングし直された思考実験で用いられている概念が実在に正確に対応しているということをなぜベルクソンは知ることができたのか。——このように、モデリングし直された思考実験において用いられている概念についても、それが真理であることを保証する何かがさらに求められ、かくしてそれが無限に続くということになるのではないか。結局のところ、ここには、真理の探究についてまわるあのいつもの無限後退が見出されるのではないだろうか。

もちろん本論文において私は次のような応答を有効なものとして見出したつもりである。すなわち、ベルクソンの知覚説は、实在論と観念論と並ぶ第三の理論ではなく、实在論と観念論についての理論（メタ理論）である。したがって、すでに成立している哲学的対立とその解決不可能性の成立をも説明できる理論として彼の理論を位置づければ、まさしくそのことを説明できる学説としてベルクソンの理論は肯定される。

だがこの応答にも次のような批判が向けられることは想定可能である。——メタ理論としての説明力の高さを強調してベルクソンの主張を肯定できるという主張をいったん受け入れよう。しかし、それが意味するのは、仮にベルクソンの理論よりも説明力の高い理論が見出された場合、その理論はベルクソンの理論よりもよい理論だということになる。例えば、实在論と観念論のみならず、純粹知覚説の成立プロセスをも説明するメタメタ理論がありうるし、そのメタメタ理論についての理論（メタメタメタ理論？）もありうる。したがって、仮にメタ理論としての説明力を理論の正当性の基準にするならば、結局のところ、無限後退は回避しがたいものとなる。これが意味するのは、ベルクソンの主張はどこまでいっても、その正当性が十分に示されるものではないということだ。

このような疑問に対する一つのありうる応答は、ベルクソンが提供する学説を相対化するというものである。例えば、Gutting [2010] は（ベルクソンとメルロポンティを比較しつつ）次のように述べる。すなわち、「[直接的で具体的な] 経験を救い出す特権的な洞察をもつというどんな哲学的方法をめぐる主張にも誇張 *hyperbole* がある。」

(Gutting [2010: p. 76]) このような見解に基づきながら Gutting は「直接的で具体的な経験」についてベルクソンのように主張する哲学を次のように特徴づける。「[...] 哲学とは小説のようなものであり、その中から「正しいもの」を選ばなければならないよう

な絶対的な選択肢ではなく、さまざまな観点到に依存したヴィジョン（あるときは相補的であり、またあるときは両立不可能であるかまたは比較さえできないようなヴィジョン）であり、そのヴィジョンすべてが各々の相対的な価値と用法をもつのである。」（Gutting [2010: p. 76]）確かにこのような相対的なヴィジョンという位置をベルクソンの学説に与えるのであれば、上記の疑問に対して一定のしかたで応答したことにはなるだろう。

しかし、少なくともベルクソンにとっては、自身の哲学が提供するものは「絶対的なもの」（PM177）であった。

「私が拒否するのは哲学者たちによって支持され、科学者たちによっても受け入れられた主張、すなわち認識の相対性の主張および絶対的なものに到達することの不可能性の主張である。」（PM33）

確かに Gutting のようにベルクソンの主張を弱めることは、プロやデルボスの批判に対する一つの有効な応答となるかもしれない。しかし、ベルクソン自身はそのような「相対化」を受け入れないように思われるのだ。したがって、ベルクソンの言葉に忠実であろうとするならば、ベルクソンがなぜこのように述べることができたのかということは少なくとも示さなければならぬ。

そこで次のように問うてみよう。なぜ Gutting はベルクソンの学説を（Gutting 自身が気づいていたのかどうかはともかく）相対的なものとして位置づけるべきだと考えたのか。私が見るに、その理由は、「絶対的なもの」をめぐるベルクソンの主張を、実在にかんするものはや探究の余地のないという意味で「絶対的」に正しい主張だと解するからである。このような主張を Gutting は「誇張」と呼び、ベルクソンの主張の相対性を強調したのであろう。

しかし、それは誤解ではないだろうか。これが私の解釈である。実際ベルクソンは次のように述べているのではないか。すなわち、偽の形而上学によって提供されるものは、「さまざまな概念の大なり小なり人為的な配列であり仮説的な構築物」（PM8）、「その〔＝経験の〕最も表層から取り出した抽象的一般的な観念体系」（PM9）に過ぎない。それに対して、ベルクソン哲学が提供するものは、この偽の形而上学によって失われた「経験」を取り戻すことである。そして、その経験とは、「動いている豊かな経験、よりいっそう深めていく余地のある経験 (susceptible d'un approfondissement croissant)、したがって新たな事実を含む経験 (grosse de révelations)」（PM8、強調は

引用者による)であると彼は述べる。つまり、ベルクソンが提供する「絶対的なもの」とは、もはや探究の余地のない形で完全に顕わになったものではなく、いまだその内に探究の余地を残すもののことでなければならぬ。

ここで「いまだその内に探究の余地を残す」ということで私が述べたいことは、先に指摘した無限後退によって指摘されるように「まだ十分な正当化がなされていない」ということではない。そうではなく、「より深く迫っていけば、そこから新たな発見があることが十分にありうる」という意味である。ベルクソンが自身の学説によって提示したものがこのような意味での実在なのだとすれば、彼が果たしたことは、もはや探究の余地のない形で実在の本性を示すことではなく、探究の対象となるべき実在を明確に指示することであることとなろう。Gutting の比喻を借りて述べれば、ベルクソンが求めたのは、たくさんある「小説」にまた別の「小説」を加えることではなく、複数の小説がその語りの源としているたった一つの「原文」としての「実在」へと再び目を向け直させることではないだろうか。

「[...] 真の経験論は、できるかぎり原文そのものに迫り、その生命を深くさぐり、一種の精神的聴診によって、その魂の脈動を感じ取ろうとするものである。そのような真の経験論が真の形而上学である。」(PM196)

一つ一つの小説としての物語に、概念論や唯名論が、あるいは実在論や観念論があり、それぞれがそれなりの仕方で実在について語っている。だが、それらが用いている概念が貧弱であるがゆえに、それらの物語は実在についての不十分な語りにならざるをえない。だからベルクソンは、それらの物語の語り手の目を今一度「実在」へと向け直すことを試みた。それは、概念論対唯名論あるいは実在論対観念論という対立に乗っかって新たな選択肢を提案することではなく、むしろ、それらの哲学的立場が目をそらしている実在を今一度提示することなのである。それは、探究の終わりにあるものではなく、むしろ、探究の出発点と言えるようなものであり、だからこそ、問題解決型の思考実験は、顕在的のみならず潜在的にも哲学的問いに応答可能なものとして提示されていると私は述べたのだ。

以上の考察によって私は、Gutting とは別の仕方でベルクソンの主張を弱めて解することによって、プロヤデルボスの批判からベルクソンを救い出したつもりである。つまり、Gutting のように（ベルクソンの述べていることに逆らっても）ベルクソンの主

張を相対化することによってではなく、また、「絶対的なもの」にかんするベルクソンの主張を探究の到達点とするのでもなく、これまでとは別の仕方では探究を動機づけるという意味で探究の出発点を規定し直すものとしてベルクソンの主張を解することによって彼の主張を救ったつもりである。

ベルクソンの言ったことがこのようなことに過ぎないのならば、彼の主張は大したものではないと思われるだろうか。だが、この見解には、ベルクソンの行なったことを「大したものではない」とするためのある種の価値判断の基準が前提されている。その基準とは、学問的主張は探究の到達点を提示したときにこそ一つの成果として評価されるべきだということであろう。しかし、この価値判断に基づけば、哲学という活動の多く、というかそのほとんど全てを否定することとなるだろう。したがって、この価値判断の基準は採用すべきではない。

それだけではない。この価値判断の基準は、今日私たちが試みようとしており、そしてベルクソン自身も掲げた哲学と科学の「協働」という活動にとっても害悪でさえある。もはや探究の余地のない到達点を哲学と科学の各分野がそれぞれの仕方では提示しているということは考えにくいし、そのような学問観に基づいた協働の試みがさらなる分断を生み出すだけのものとなることは想像に難くない。そうではなく、探究の出発点を規定し直し、私たちが深めていくべき対象を常に見直すことによってはじめて漸進的に進んでいくものとして、哲学と科学の協働はなされるべきではないか。少し長いがベルクソン自身の言葉を見てみよう。

「私としては、重大問題の解決を数学的に演繹しうるような原理は存在しないと思っています。といって私はまた、物理や化学の場合とは違い、何か決定的な事実が出てきて、そうした問題を一刀両断するとも思いません。私はただ、経験のさまざまな領域にさまざまな事実のグループがあり、そうしたグループはそれだけでは求めている認識を与えることはないが、しかしそれを見つける方向を示してくれると思っています。方向が一つ示されるだけでもすでに何ほどかのことであり、方向がいくつも示されるとすれば、それはもう大したことです。というのは、それらの方向は同じ一点に集中して、そこにこそ私たちの求めている点が見つかるからです。つまり、私たちがいま持っているいくつかの事実の系列はまだ必要なところまでは届いていませんが、しかし私たちはそれらを仮説的に延ばすことができるのです。[...] それらの系列は別々に取り上げられれば、単に確からしい結論をもたら

すだけでしょう。しかし、全体として取り上げられて一点に集まれば蓋然性が集積し、確実性への道を歩んでいると私たちは感じるようになります。多くの善い意志が結びついた協働の努力（le commun effort des bonnes volontés associées）によって、私たちは限りなく確実性へ近づいていくでしょう。なぜなら哲学はそのとき、もはや単独の思想家が組み立てる体系的な作品ではなくなるからです。哲学は追加や訂正や手直しを受け入れて、また自分でも絶えずそれを求めることになります。実証科学と同じように、哲学は進歩するでしょう。こうして哲学もまた協働（collaboration）によって出来上がっていくのです。」（ES4）

諸学問が協働で探究する場としての「実在」を規定し直すということが彼の哲学の核心にあったからこそ、ベルクソンは、引用部にあるような哲学と科学の「協働」や「実証的な形而上学」という理念を掲げることができたのではないだろうか。

さて、ブロやデルボスの（再）批判は、ベルクソンが純粹知覚説によって提示するものを、もはやこれ以上の探究の余地のない絶対的な真理と解することに依拠した批判であろう。だからこそ、ブロとデルボスは、純粹知覚説がなぜそのような真理として提示されうるのかと執拗に問うているのである。しかし、ベルクソンが純粹知覚説を通して提示しているものがいまだ探究の余地を残した実在であるとすれば、ブロとデルボスの批判は回避できる。これはベルクソンの説を相対的なものとするのではない。というのは、ベルクソンが探究すべき実在を指示している以上、そこには、探究すべき実在がないところがどこかも含意されているからだ。具体的には、概念論対唯名論、実在論対観念論といった既存の問題の枠組みを受け入れ、現在主義へと陥っていくような方向ではなく、意識の諸平面における意識の運動や、知覚対象と意識の直接的な関係性といった方向を探究すべきだとベルクソンは述べているのである。

最後に、これまでの考察に基づいて、ベルクソンが自身の方法について述べた次の引用部の解釈を提示しよう。

「それは、経験を探し求めてその源泉にまで赴くこと、あるいはむしろ、経験が私たちにとっての有用性の方向に向きを変えながらまさに人間的な経験となる、その決定的な転回点の向こう側に赴くことであろう。」（MM205）

まず、ここでいう「人間的な経験」とは、知覚経験の性向に従って作り上げられた概念を通してさまざまな物事のあり方を判断していくような経験のことである。例えば、一次性質と二次性質を存在論的に別のものとする概念枠組みのもとで物質と知覚意識を別々の存在者だと見なすことである。このようにして、仮象へと人は陥っていくこととなる。そして、「経験の源泉に赴く」とは、このようにして作り上げられた概念と理論の成立を辿り直すことによって、私たちが探究すべき実在へと目を向け直すことであり、その意味で「経験の源泉」とは、出来合いの概念とその体系に基づいた抽象的な体系ではない、本来解明すべき実在のことを意味する。なぜそれは「源泉」と呼ばれるのか。それは、この実在にこそ、私たちの解決しようとしていた哲学的問題の解決策が内在しているからであり、問題解決型の思考実験とは、このような意味での実在を思考実験の中に再び回復させたものに他ならない。

以上のように、ベルクソンにとっては、単に哲学における既存の学説を受け入れそれらのどれかに軍配をあげるのではなく、それらさまざまな学説がいかんにして可能になるのかをも解明するということこそが哲学の達成すべき目的である。そして、この目的を達成するためには、概念分析や定義やアーギュメントの構成、命題間の論理的関係の吟味などふつう私たちが哲学の依拠する方法と考えているものではなく、仮象論によってメタ理論を提示することを通して思考実験をモデリングし直すという方法が有効である。

■ 参考文献・引用文献

〔欧文文献〕

- [1] Barbaras, R. (2010) "The Failure of Bergsonism", in M. Kelly ed., *Bergson and Phenomenology*, Palgrave Macmillan, pp. 258-72.
- [2] Barnard, G. W. (2011) *Living Consciousness: The Metaphysical Vision of Henri Bergson*, State University of New York Press.
- [3] Belot, G. (1897) « Un nouveau spiritualisme », in *Revue philosophique*, pp. 183-99.
- [4] Bergson, H. (2007) *Essai sur les données immédiates de la conscience*, première édition critique de Bergson sous la direction de Frédéric Worms, PUF (Quadrige). (原著は 1889 年出版)
- [5] Bergson, H. (2008) *Matière et mémoire. Essai sur la relation du corps à l'esprit*, première édition critique de Bergson sous la direction de Frédéric Worms, PUF (Quadrige). (原著は 1896 年出版)
- [6] Bergson, H. (2009) *L'énergie spirituelle*, première édition critique de Bergson sous la direction de Frédéric Worms, PUF (Quadrige). (原著は 1919 年出版)
- [7] Bergson, H. (2009) *La pensée et le mouvant*, première édition critique de Bergson sous la direction de Frédéric Worms, PUF (Quadrige). (原著は 1934 年出版)
- [8] Byrne, A. & Hilbert, D. R. (2007) "Color Primitivism", *Erkenntnis*, 66, pp. 73-105.
- [9] Cohen, J. (2009) *The Red and the Real: An Essay on Color Ontology*, Oxford University Press.
- [10] Cornibert, N. (2012) *Image et matière : Étude sur la notion d'image dans Matière et mémoire de Bergson*, Harmattan.
- [11] Daly, Chris. (2010) *An Introduction to Philosophical Methods*, Broadview Press.
- [12] Dainton, B. (2017) "Bergson on temporal experience and durée réelle", in Phillips ed., *The Routledge Handbook of Philosophy of Temporal Experience*, Routledge.
- [13] Delbos, V. (1897) « Matière et mémoire. Essai sur la relation du corps à l'esprit, par Henri Bergson », in *Revue de métaphysique et de morale*, pp. 353-89.
- [14] Deleuze, G. (1966) *Le bergsonisme*, PUF.
- [15] ——— (1983) *L'image mouvement (Cinéma I)*, Minuit.
- [16] Dolbeault, J. (2013) "La panpsychisme de Bergson : une hypothèse sur la nature de

- la matière", in *Philosophie* 117 (1), pp. 38-54.
- [17] Gouhier, H. (1962 / 1999) *Bergson et Christ des Évangiles*, Fayard / Vrin.
- [18] Gutting, G. (2010) "Bergson and Merleau-Ponty on Experience and Science", in M. Kelly ed., *Bergson and Phenomenology*, Palgrave Macmillan, pp. 63-77.
- [19] Jacobs, H. & Perri, T. (2010) "Intuition and Freedom: Bergson, Husserl and the Movement of Philosophy", in M. Kelly ed., *Bergson and Phenomenology*, Palgrave Macmillan, pp. 101-17.
- [20] Jankélévitch, V. (1959) *Henri Bergson*, 2^eéd, PUF.
- [21] Kelly, M. R. (2008) "Husserl, Deleuzean Bergsonism and the Past in General", in *Husserl Stud* 24, pp. 15-30.
- [22] ——— (ed) (2010) *Bergson and Phenomenology*, Palgrave Macmillan.
- [23] Kerszberg, P. (2010) "From the World of Life to the Life-World", in M. Kelly ed., *Bergson and Phenomenology*, Palgrave Macmillan, pp. 223-44.
- [24] Lacey, A. R. (2008) *Bergson (Arguments of Philosophers)*, Routledge.
- [25] Lawlor, L. (2003) *Challenge of Bergsonism*, Continuum.
- [26] ——— (2010) "Intuition and Duration : an Introduction to Bergson's 'Introduction to Metaphysics'", in M. Kelly ed., *Bergson and Phenomenology*, Palgrave Macmillan, pp. 25-41.
- [27] Le Roy, É. (1914) *Une philosophie nouvelle, Henri Bergson*, Félix Alcan.
- [28] McGinn. C. (1996) "Another Look at Color", *Journal of Philosophy* 93 (11), pp. 537-53.
- [29] Meillassoux, Q. (2007) « Sustraction et contraction, à propos d'une remarque de Deleuze sur *Matière et mémoire* », in *Philosophie*, n° 96, pp. 67-9. (岡嶋隆佑訳「減算と縮約」、『現代思想』、2013年1月号所収、青土社)
- [30] Merleau-Ponty, M. (1945) *Phénoménologie de la perception*, Gallimard.
- [31] Mullarkey, J. (2000) *Bergson and Philosophy*, Edinburgh University Press.
- [32] ——— (2010) "The Psycho-Physics of Phenomenology: Bergson and Henry", in M. Kelly ed., *Bergson and Phenomenology*, Palgrave Macmillan, pp. 201-20.
- [33] Naulin, P. (1990) « Le problème de la conscience et la notion d'« image » », in *Bergson : Naissance d'une philosophie*, PUF, pp. 97-109.
- [34] Prado, B. (2002) *Présence et champ transcendantal : Conscience et négativité dans la*

philosophie de Bergson, trans. R. Barbaras, Georg Olms Verlag.

- [35] Russell, B. (1945) *History of Western Philosophy and its Connection with Political and Social Circumstances from the Earliest Times to the Present Day*, George Allen and Unwin.
- [36] Theau, J. (1968) *La critique bergsonienne du concept*, PUF.
- [37] Worms, F. (1997a) *Introduction à Matière et mémoire de Bergson*, PUF.
- [38] ——— (1997b) « La théorie bergsonienne des plans de conscience », in *Bergson et les neurosciences*, LES EMPÊCHEURS DE PENSER EN ROND, pp. 85-108.
- [39] ——— (2010) “Consciousness or Life? Bergson between Phenomenology and Metaphysics”, in M. Kelly ed., *Bergson and Phenomenology*, Palgrave Macmillan, pp. 245-57.

〔邦語文献〕

- [40] 石井敏夫 (2001) 『ベルクソンの記憶力理論——『物質と記憶』における精神と物質の存在証明』、理想社
- [41] 居永正宏 (2012) 「「生きている私の死」と死後に残るもの——ベルクソンの生の哲学による死の理解」、日本哲学会編『哲學』第 63 号所収、135-54 頁
- [42] 植村玄輝他編 (2017) 『ワードマップ 現代現象学』、新曜社
- [43] 小草泰 (2018) 「色の傾向性理論を擁護する」、『科学基礎論研究』 Vol. 45, No. 1 & 2, 1-21 頁
- [44] カント、イマヌエル (2014) 『純粹理性批判』(石川文康訳)、筑摩書房
- [45] 木山裕登 (2013) 「ベルクソンにおける知覚的「所与」と知覚的意味」、『論集』第 33 号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、197-210 頁
- [46] 木山裕登 (2014) 「ベルクソン「意識の諸平面」概念の心理学的背景」、『論集』第 34 号、東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室、132-45 頁
- [47] 篠原成彦 (2011) 「事物は色をもちうるか」、『哲学の探究』(哲学若手研究者フォーラム) 第 38 号、27-41 頁
- [48] シュヴァリエ、ジャック (2008) 『ベルクソンとの対話』(仲沢紀雄訳)、みすず書房
- [49] 杉山直樹 (2002) 「石井敏夫著『ベルクソンの記憶力理論——『物質と記憶』における精神と物質の存在証明』、『フランス哲学思想研究』第 7 号所収、172-7 頁
- [50] ——— (2006) 『ベルクソン：聴診する経験論』、創文社

- [51] ——— (2009)「フッサールとベルクソン 二つの「幾何学の起源」」、哲学会編『フッサールとベルクソン——生誕 150 年——』所収、有斐閣、28-44 頁
- [52] ——— (2019)「訳者解説」、『物質と記憶』(杉山直樹訳) 所収、講談社学術文庫、363-87 頁
- [53] 鈴木生郎、秋葉剛史、谷川卓、倉田剛 (2014)『ワードマップ：現代形而上学——分析哲学が問う、人・因果・存在の謎』、新曜社
- [54] 田中凌 (2014)「色の哲学における「開示」および「透明性」——色についての日常的理解と科学的理解の対立」、『哲学論叢』(京都大学) 第 41 号、13-24 頁
- [55] 千葉清史 (2018)「超越論的観念論と反応依存性——その反・懐疑論的帰結」、『思想』(岩波書店) 第 1135 号、143-59 頁
- [56] ドゥルーズ、ジル (2010)『批評と臨床』(守中高明他)、河出文庫
- [57] デイントン、バリー (2016)「中立一元論、時間経験、そして時間——ベルクソンへの分析的視座」(岡嶋隆佑訳)、平井靖史他編『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する：現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続』(書肆心水) 所収、206-238 頁
- [58] ——— (2017)「ベルクソンにおける在ること・夢見ること・見ること」、平井靖史他編『ベルクソン『物質と記憶』を診断する：時間経験の哲学・意識の哲学・美学・倫理学への展開』(書肆心水) 所収、122-53 頁
- [59] 檜垣立哉 (2017)「過去は何故そのまま保存されるのか——『物質と記憶』の記述の多層性について」、平井靖史他編『ベルクソン『物質と記憶』を診断する：時間経験の哲学・意識の哲学・美学・倫理学への展開』(書肆心水) 所収、99-111 頁
- [60] 平井靖史 (2006)「イメージのもうひとつの〈内〉」、『哲学の探究』(哲学若手研究者フォーラム) 第 33 号所収、99-116 頁
- [61] ——— (2018)「序論」、平井靖史他編『ベルクソン『物質と記憶』を再起動する：拡張ベルクソン主義の諸展望』(書肆心水) 所収、11-37 頁
- [62] 平井靖史他編 (2016)『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する：現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続』、書肆心水
- [63] ——— (2017)『ベルクソン『物質と記憶』を診断する：時間経験の哲学・意識の哲学・美学・倫理学への展開』、書肆心水
- [64] ——— (2018)『ベルクソン『物質と記憶』を再起動する：拡張ベルクソン主義の諸展望』、書肆心水
- [65] 平光哲朗 (2018)「extension と縮約——『物質と記憶』第四章におけるベルクソン

の直観を再考する」、平井靖史他編『ベルクソン『物質と記憶』を再起動する：拡張ベルクソン主義の諸展望』（書肆心水）所収、339-62 頁

[66] 藤田尚志（2010）「場所の記憶、記憶の場所——ベルクソン『物質と記憶』における図式論の問題」、『九州大学国際文化学部紀要』（九州産業大学国際文化学会）、第 45 号、181-93 頁

[67] ———（2017）「記憶の場所の論理 『物質と記憶』における超図式論と憑在論」、平井靖史他編『ベルクソン『物質と記憶』を診断する：時間経験の哲学・意識の哲学・美学・倫理学への展開』（書肆心水）所収、83-98 頁

[68] ミケル、ポール＝アントワヌ（2017）「外界の存在について」（米田翼訳）、平井靖史他編『ベルクソン『物質と記憶』を診断する：時間経験の哲学・意識の哲学・美学・倫理学への展開』（書肆心水）所収、42-63 頁

[69] 美濃正（2016）「色の哲学」、『大阪市立大学大学院文学研究科紀要』第 67 巻、19-35 頁

[70] 村山達也（2009）「ベルクソン『直接与件』における問題と実在」、日本哲学会編『哲學』第 60 号所収、279-93 頁

[71] ———（2018）「潜在性とその虚像——ベルクソン『物質と記憶』における潜在性概念」、平井靖史他編『ベルクソン『物質と記憶』を診断する：時間経験の哲学・意識の哲学・美学・倫理学への展開』（書肆心水）所収、20-36 頁

[72] ロック、ジョン（1972）『人間知性論（一）』（大槻春彦訳）岩波文庫

[73] ロビンズ、スティーブン・E（2017）「ベルクソン、ギブソン、そして外界のイメージ」（岡嶋隆佑訳）、平井靖史他編『ベルクソン『物質と記憶』を診断する：時間経験の哲学・意識の哲学・美学・倫理学への展開』（書肆心水）所収、118-37 頁